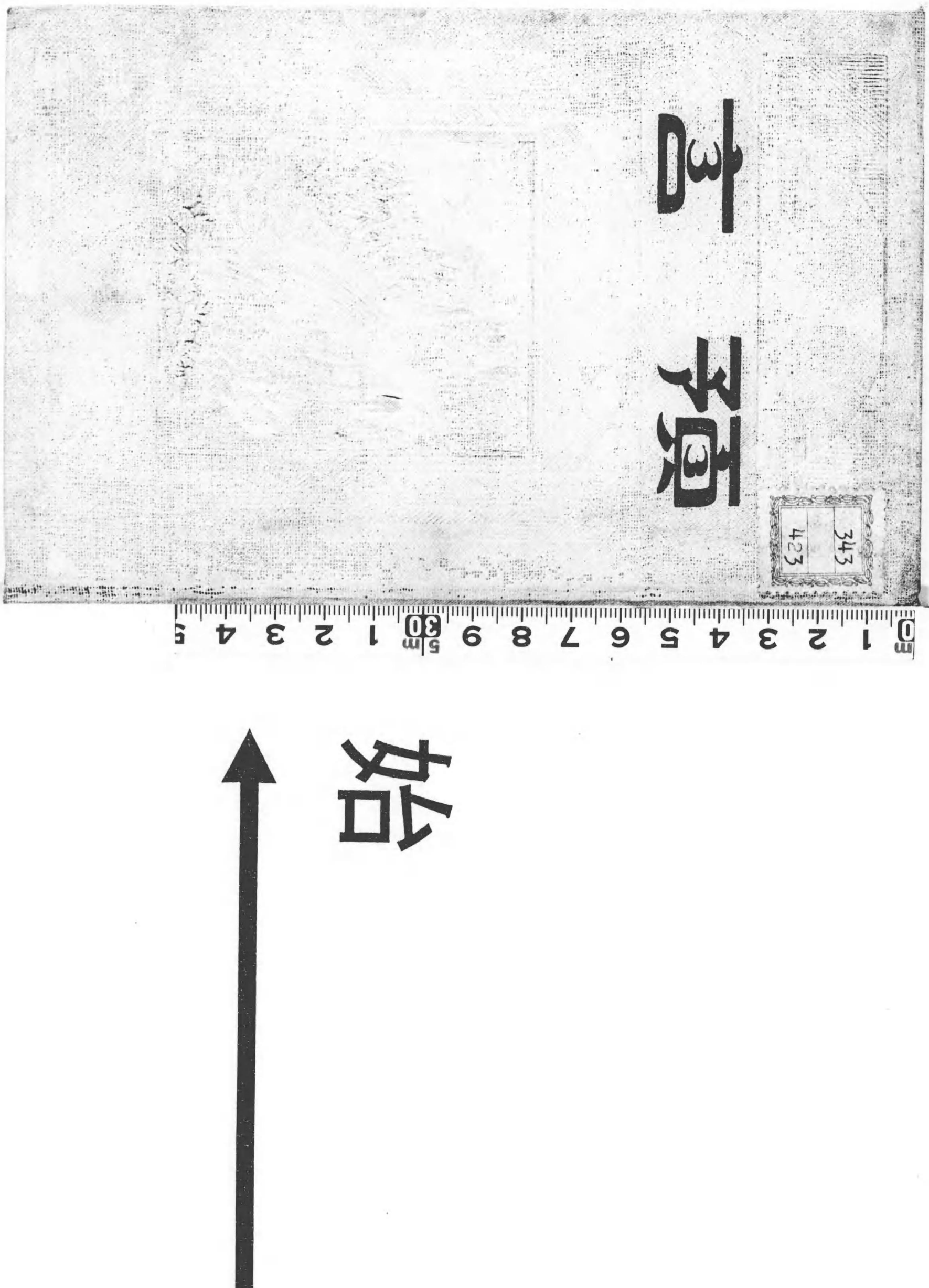

343
423

特207
944

J・F・ルサフオード著
明石順三譯

預言

聖書中の多くの奥義は簡明に平易に説明さる。エホバよりの「黎光」と現下全地の出來事は人々の前に永遠の眞理の扉を開きぬ。

發行所　萬國聖書研究會
發賣所　燈臺社

昭和七・六・一
藤川圖書

發行者の言

人間は過去數千年の長きに亘つて聖書を學び知らんと願つてゐた。多くの人々は其の時の未だ至らざる前に聖書の預言を解明しやうと企てた。併し彼等の全部は皆失敗した、何故なれば「預言は凡て已がまゝに釋くべきものに非ず」であるからである。

此の書程預言を明瞭ならしめたものは他に絶無である、何故なれば著者は預言を已が心の勝手に解釋してゐるのでなくして、たゞ神の預言と眼前の事實を最も明白に照合立證してゐるからである。

發行者は眞に生命の道を探求しつゝある人々に向つて、本書を熟讀して天地間唯一の眞理を得られん事を希望す。

發行者しるす

譯者の言

本書の著者ルサフオード氏は歐米諸國無數の牧師、神學者をして憤怒、驚愕、閉口せしめ、內外共に縱らゆる迫害と戰つて最も勇敢に神の聖書の示す眞理を宣明しつゝある人である。其の講演は每週百數十のラヂオ放送局を通じて滿天下に傳へられ、其の著書の發行部數は實に八千餘萬の甚大なる數に上る。

本書は天地全宇宙の創造者なる神エホバの眞理に對する證言であつて、生命に對する唯一無二の道を指示せるもの、其の內容の何なるかに就ては讀者の謹通と熱心なる研究によつて開かるべし。

東京市外池袋にて

譯者　しるす

預言

目次

		ページ
第一章	原因と目的	9
第二章	贖罪	32
第三章	預言者・祭司・王	60
第四章	諒解の時	76
第五章	神の組織制度	96
第六章	サタンの組織制度	154
第七章	試目	215
第八章	民衆の審分	274
第九章	行伍を立つる時	305
第十章	戦争	340
第十一章	平和	367
第十二章	エホバの聖名	387

預言

第一章　原因と目的

最高至上の全能の神エホバは全ての善き事の作製者に在す。エホバは永遠より永遠迄神に在して之に比ふべき者は他に絶無である。エホバは光を以て自らを掩ひ給ひ、すべての光明は皆エホバより發す。エホバは諸天を造りて之を幕の如くに伸べ、之に榮光を滿たし給ふ。エホバは隅の首石を固く置ゑて地の基となし、其の聖旨のまゝに之を作り給ふ。地球の若かりし時に神は暗を以て襁褓となして地球を包まれた。エホバは天に太陽を置きて日を司らしめ、月と星とを以て夜の光となし給ふ。エホバは星の數を算へて悉く之に名を與へられた。神に於ては全ての事に秩序ありて其處には混亂が絶無である。神は空間に諸星の軌道を定め

てそれを絶えず歩まし め給ふ。神は山々を海中より高く起し、鷲を翔け上らしめ、その強き所に巣を設けしめ給ふ。神は青空を以て地を包み、其の上に獣類や空の鳥類を住まはしむる大森林を滿たされた。

神は人間を完全に創造し、彼をして地上に在る全被造物の上に君たらしめられた。神は萬物の運命を其の御手の中に收め給ふ。其の智慧と聰明の富の深き事と、權勢と慈愛の高き事は人間の測り知る能はざる處である。然れど此の全能の神は人を召してエホバの道を學び知らしめ給ふ。神を知りて之に服從する事は平和と幸福裡に於ける永久の生命を意味す。然らば人間は此の全能の神の默示を除きて他の何處に於て知識と智慧とを曉り得べきか。神の言は知識と智慧の源泉であつて、それを飲む者に盡きざる歡喜と生命とを供給す。エホバは永久の生命の源泉に在し給ふ。

神エホバは全ての眞の預言の起原と源泉に在す。之を示して斯く記さる、『エホバ、イスラエルの王、イスラエルを贖ふ者、萬軍のエホバ斯く云ひ給ふ、我は始なり、我は終なり。我の外に神ある事なし。我は古代の民を設けしより以來誰か我の如く後の事を示し、又告げ、又我が前に言ひつらねんや。試みに成らんとする事、來らんとすることを告げよ』（イザヤ書四十四章六、七節）。

義と眞理を愛し、神を愛する全ての者は何れも己が全部を以て神に歸順し、何等懼れなくその努力に對して充分の報賞を受ける事を確信して其の御言の研究に來る。其の人は御言を慎重に學ぶ時に啻に自ら歡喜するのみならず、更に進んで神の善き事と御慈愛とを他の人々に語り告げんとするのである。之等の全き献身者に向つて神は示し給ふ。『汝等懼るゝなかれ、慴く勿れ、我は古代より聞かせたるに非ずや。告げしに非ずや。汝等は我が證人なり。我の外に神あるか。我の外に磐あらず、我はその一つだに知る事なし』（イザヤ書四十四章八節）。

神の預言を諒解して之を感謝して受けたる者は此の貴き眞理を喜んで他の人々に語り告ぐ。彼等も亦生命の道を發見して歡喜するのである。神は絶對無私に在す、故に其の御手の仕事に成る被造物を愛し給ふ。神の御仕事の全部は完全である。神は人間を自らの像に肖せて完全に創造し給ふた、（詩篇百十一篇三節）。神は罪と惡を絶對に承認し給はず、罪人とは神の律法を破る者を謂ふ。自ら悔ひ改めて神の示し給ふ道によつてその恩惠を探し求むる者を神は憐憫み給ふ。罪は常に悲みを伴ふ。惡しき者とは一度光を受けて後に、光に對して意識的の罪を犯せる者を謂ふ。サタンは惡しき者である。彼は己が醜き慾望を完成せんが爲に意識して神の信任を裏切つた。彼はそれを爲さんがために人間の權利と、神に對する嚴肅なる責

任を無視した。此の故に彼は眞理の光に逆行し、充分に意識して行動せんとする己が邪惡の精神を發揮したのである。一度光を受けて後に故意にサタンの道を求めて之に入つた者は皆惡しき者である。惡しき者は自らの手の惡しき行爲を以て蹄に陷るのである、（詩篇九篇十六節）。神は惡しき者の全部を滅ぼし盡し給ふ、（詩篇卅四篇十六節。百四十五篇廿節）。「エホバは惠深くして直く在せり、斯かるが故に道を罪人に教へ給ふ」（詩篇廿五篇八節）。アダム以後地上に生存せる人類の全部は罪に生れ、邪曲にありて孕まれた、（詩篇五十一篇五節）。此の故に神は罪人を御自身に復歸せしめて彼等をして神との間に全き和解を得しむるの方法を備へられたのである。

最初の預言はエデンの園に於てエホバにより語られた。此の大預言は惡の出現の最初より、人間の服從者を回復する時までの全期間を掩ふてゐる。同時に之は人間をして罪を犯さしめて、之を墮落せしめた處の惡しき者の壞滅さるゝ事が預言されてある、（創世記三章十四―十九節）。

聖書中に記錄されある最後の大預言は神エホバがその愛子イエス・キリストを通じて示し置かれたる處のそれである、（默示錄廿一章一―七節）。之は人類の爲に新しくして榮ある正義の政府が運用さるべき事を預言してゐる。最初の大預言は悲嘆と病氣と慟哭と死に於ける人

間の道の開始となり、最後の大預言は、神が全ての人の眼より涙を拭ひ取り、悲嘆と慟哭は罷みて、死と墓が永遠に滅ぼされ、萬物が新しくなり、服從者の全部が回復されて、全人類が神の子とされて永久に祝福を受くる時の到來する事を豫告してゐる。

以上示した期間中に語られたる眞の預言は神エホバの代辯者として用ひられたる被造物を通じて示されたるものであつて、眞理と生命を探し求むる人の利益となる爲に與へ置かれたるものである。神の預言を研究する事は即ち人間の携はる總らゆる研究事項の中で最も光明あり、利益ある處のものである。預言が至高き神エホバより發し、その被造物に對する神の愛の發露の結果として記錄されあるものなるを知る時に、全ての敬虔なる人々は、此の預言は永遠の生命と無限の歡喜に彼を導くものなりとの確信を以てその研究に進むのである。

人類が惡しき道を歩み降り行く時に、神は示して、或る未來に於ける豫定の時至るに及びて偉大なる代理執行者を聖き天使等と共に遣はして、全人類の上に大審判を執行すべき旨の預言を與へ置かれた、（ユダ書十四、十五節）。エノクは此の預言を語つたのであるが、之が即ち人間によつて語られたる最初の預言であつた。然る後、豫定の時至るに及びて神の預言はアブラハムに向つて語られた。此の大預言は神が、「裔」を造り、之を通じて地上全人類を祝福さるゝ時の到來する事を明示してゐる、（創世記十二章三節。廿二章十八―廿二節）。以後の諸

々の預言は皆以上神の聖旨を實現せしむるに關聯して語られたのであつて、それ等が人間によつて諒解されるのは唯神の豫定の時に於てのみ可能であるとされてゐる。預言の研究者は常に左の元則によつて指導さるべきであつて、即ち、預言はそれが一部分若くは全部成就するか、又は成就の途上にある時に、神に全き献身を爲せる者のみによつて諒解されるのである。故に其の諒解は唯神の豫定されたる時に於てのみ許される譯である。

預言者と先見者

預言者とは何か。預言者とは他の人々の爲に語る處の者を云ふ。預言者なる名稱はそれが眞僞の如何を問はず、神より發せられたりと思考さるゝ音信を傳ふる者に向つて用ひられあるを常とする。即ち神が其の民に音信を傳達せしむる者の上に用ひられる處の名稱とされてゐる。斯かる者は眞の預言者である。神の名によつて語ると自稱しつゝ實は然らざる者は僞預言者である。エノクは大洪水以前の大昔にあつた神の眞の預言者の一人であつた。

聖書中に二種のヘブル語原字が混亂的に「預言者」と「先見者」の兩種に飜譯されてゐる。即ち nabi と roeh の二字であつて nabi の使用されてゐる回數の方が多い。そして roeh は多く比較對照の場合に於て用ひられてゐるのであつて多數の場合「先見者」と飜譯されてゐる。此の nabi の字は nabah の字に密接なる關係あり、「泉の如く迸り出る」若くは「水の源

の如く湧き出でる」と云ふを意味す。神の預言者の語る示しは、其の辭句を愼重に選定して語られるものでなく、「我が心は麗はしき事にて溢る」（詩篇四十五篇一節）の狀態下に於て「迸り」出づるのである。神の預言者は此の調子で語る。彼は神が彼に與へ給ふ言を其の儘に傳達するのである。預言者が其の用ふる言葉に全く無統制であると思惟するは誤りである。惡鬼の惡しき靈力下に語る僞預言者の言葉には統制がない。神の預言者に於ては決して然らず。預言者自身はその語る言を選擇する事は出來ぬ、然し彼は神の僕として或る特殊の纒つた仕事をなし、又或る特殊の纒つた音信を他に傳達するべく任命を受けてゐるものであつて、それをなすに際し、神の聖靈は彼の心の上に働きて神が彼をして語らしめんとさるゝ處を聖旨のまゝに語らしめられるのである。彼の心は神の仕事の上に全く歸してゐなければならぬ。彼は單なる自働寫字器に非ずして神がその爲さんとさるゝ事を彼をして爲さしめらるゝのである。

然し先見者は之とは多少相違す。先見者は一個の預言者である場合もあるが、然し必ずしも常にさうでなければならぬと云ふ譯ではない。先見者は神の聖旨を諒解してそれを解明するを許される者である。而して先見者は時々一の音信を民に傳達する爲に用ひられる事がある、（歴代志略上廿五章五節）。然し之は必ずしもその者を預言者の階級にまで引き擧げなけれ

ばならぬと云ふ必要はない。ガデはダビデ王の先見者として呼ばれると共に又一個の預言者と呼ばれた、（サムエル後書廿四章十一節）。ヤコブは其の臨終の床に於て彼の子等と、彼等より發生せんとする事に關して神の聖旨を諒解してそれの解明をなした、（創世記四十九章一―廿七節）。

神の選民なるイスラエル人時代の末期に於ては預言者等が殊に異彩を放つてゐた。イスラエルの預言者を定めるに際し、神がその預言者をイスラエル人以外の異邦人に遣はされたる事であつた。イスラエルの一除外例があるが、之は即ちヨナがニネベの人々に遣はされたる事であつた。イスラエルの初期に於て、神はその民を埃及より救ひ出さんとされし時に、モーセに語り、民を壓迫者の下より救濟すべき奉仕の機會を與へられた。モーセは己が無口の人である事を理由として此の仕事を嫌つた。然る時に神はアロンをして彼の預言者たらしむべしと告げられた。其の時モーセはアロンに對して神の立場にあり、そしてアロンはモーセの示す處に從ひて語つたのである。之が即ち他の者の爲に語る者が預言者の名を以て呼ばれたる事を示す最初の例であつて、未來の事を豫告する事とは全く無關係であつた、（出埃及記四章十五、十六節。七章一節）。

サムエルは正式の預言者として最初の人であつた。故に使徒ペテロは『サムエルより以來語りし所の預言者も皆……』（使徒行傳三章廿四節）と示して之を裏書してゐる。サムエルは

未來の出來事を豫告するのみの者として用ひられず、其の當時の人々の爲と同時に未來の事の爲にも事へたのである。エホバの力と指揮に從つてサムエルはイスラエル王國の準備をなした。彼はその時代に於て神に奉仕する爲に特別に用ひられた。サムエル以前に神の預言者として又僕として有名であつたのはモーセであつた。モーセの仕事がイスラエルの民を指導する者として用ひられたる以上、彼は未來の出來事を豫告する上に更に大なる範圍を有したのである。彼はイスラエルの上に來るべき事を一般的に豫告した。彼はエホバの名によつて語り、最も重要なる豫告的演說をなした。彼は己自身を以て模型とする處の大預言者の到來する事に就て豫告した。モーセは預言して、此の來らんとする大預言者は彼の兄弟等の中より出で來るべく、即ち一個のイスラエル人として現はれるのであつて、民は皆彼の告ぐる全ての言に聽きて從はざるべからず、之に聽きて從ふ者は皆神に嘉さるべしと告げた、（申命記十八章十五、十八節）。モーセにしてもサムエルにしても共に神エホバの代辯者であつた。然し神の爲に單なる一個の代辯者たる事が預言者たる事の全部ではない。神の爲に代辯し、民の爲に直接事へ、民に關する神の聖意を解明する事に於てサムエルは一個の預言者として知られる前に、先づ彼は一個の先見者であつた、（サムエル前書九章九―十一、十九節）。

イスラエル人は神の選民であつて、未來に於て神の民に成されんとする神の御目的を豫示

すべき模圖を作成するに用ひられた。イスラエル人は靈的イスラエル即ち、その信仰と神の聖旨を爲すべく献身する事とに依て神の子とされる所の者等の將來を豫表する爲に用ひられた。此の故にイスラエル人は地上全人類の上に來らんとする未來の出來事を豫示する爲に用ひられたのである。イスラエル人に起きた諸々の出來事は未來の爲に重要なる知識を供給する處の倉庫たる役目をつとめた。神は地球を構成するに際し、石炭、油、礦石を人間の爲に準備貯藏された。イスラエル人の歴史に於て神は眞理を探求する者の爲に知識の大寶庫を準備されたのである。

神は其の僕即ち預言者等を民に遣はして音信を傳達せしめ、その音信を彼等イスラエル人の後に來る者、特にキリスト・イエスの眞の追隨者の利益の爲に記錄せしめて置かれた。斯くの如く遣はされたる音信は即座に用立てられる事も屢々あつたが、然し多くは未來の爲に適用さるべき性質のものであつた。之等音信の多くは其の時には餘り用ひられず、預言者自身も亦之等を諒解する事が出來なかつた。之等の預言は唯神の豫定されし時に於てのみ諒解されるのである。而してその神の豫定の時は遂に到來した、故に今、神の預言を愼重に研究すべき時となつたのである。

十六人の預言者の活動せる時代、即ちイスラエル王國の崩壞前後から、民がバビロンより復

歸する迄の時代に於て、神は預言者マラキを用ひて最後の預言をイスラエルの民に遣られた。聖書中に記錄されあるイザヤよりマラキ迄の預言者等は彼等自身の時代の爲に用ひられたる神の僕であつた。然し彼等の記述せる處に依て「豫言」（預言も同じ意味）なる意味が成立する、何故なれば彼等は未來の出來事を豫告したからである。イスラエル人がバビロンに配流さるゝ以前に住んだ預言者等はアツスリヤとバビロンの諸權が崩壞する事を豫告した。彼等は又エルサレムの沒落を豫告したが之は彼等にとつて甚だ苛い役目であつたに相違ない。彼等は又イスラエル人が排棄され迫害されて後に其の故郷に復歸させられて神の恩惠に全く回復される迄の遙かの未來を預言し、亦今日此の時我等の眼前に於て發生しつゝある出來事に就ても預言したのである。

之等の預言は今既に成就し、又成就の途上に在るが故に今日主の側に在る者は最も近き未來に何が到來するかを明かに看取する事が出來る、而して之等の出來事は全人類の上に最も密接なる關係を有するのである。故に今日此の時に於て世界の歴史を研究するは最も興味あり、その絶妙なるに思はず肉躍り血沸くものがある。之等の預言は其の人の至高き神エホバに對する理解を更に廣くならしめ、神が人類の爲に顯はし示し給へるその驚くべき御慈愛の高さと深さ、長さと廣さとを悟り知る事を得しむるのである。

イスラエルの預言者はエホバの名によつて語ると稱してゐた。彼等はその音信を傳へるに際して『主エホバ斯く言ひ給ふ』と冒頭した。他の人々も民の前に練り歩きて語り、神の名と權威によつて語ると稱したが、然し彼等はエホバの名に於て語るべく何等の任命をも受けてゐなかつた。其の預言者が眞物か僞物かの何れかを判別する事が民にとつて最も重要であつた。神は民をして預言者の眞僞の如何を試ましむる爲に一の元則を示し置かれたが、此の元則は常に有効である、此の試みの方法は聖書中に斯く示し置かる、『汝或ひは心に言はん、我等如何にして其の言のエホバの言ひ給ふものに非ざるを知らんと。然ば若し預言者ありてエホバの名をもて語る事をなすに、其の言成就ず、また効あらざる時は是エホバの語り給ふ言に非ずして、其の預言者が縱肆に語る處なり。汝その預言者を畏るゝに及ばず』（申命記十八章廿一、廿二節。同時に申命記十三章一―五節を見よ）。

聖書の明示する處に依り、神の眞の預言者にして代表者なる者を識別し、決定するに三種の事が必要となる、即ち、（第一）彼は神の名によりて語らなければならぬ事、（第二）其の預言が若し近き將來に關して語られあるものとするならばそれが是非共成就されなければならぬ事、（第三）彼の言は人々を神より離反するに用ひらるゝ事なく、常に彼等を敎へてエホバ

に忠誠なるべきを示す事である。假令預言者と稱する者がエホバの名に於て語り、その預言は實現する事ありとも、その言が人々を神エホバより離反せしむるの性質を帶ぶる時は、その預言者が即ち僞物であつて、之を人々より遠ざけて殺さなければならぬ事となつてゐる。

此處に一の實例がある。神の預言者エレミヤはイスラエル人に向つて預言し、彼等がバビロンに囚はれ行き、バビロン人が諸國の全部を統治せんと示した。神の預言者なりと自稱したるハナニヤは預言して、エレミヤの言と全く正反對の事を語り、イスラエル人に告げて彼等は平和に住まはんと示した。其の時エレミヤは答へて斯う云つた、『泰平を預言する所の預言者は、若しその預言者の言就げなばその誠にエホバの遣はし給へる者なることを知るべし』（エレミヤ記廿八章九節）。エレミヤは斯くの如く神の目的を再び示した。神は既にエレミヤを遣はして民の前に眞の預言者たらしめられた。ハナニヤは今、自分を以て民の前に眞の預言者たる事を立證せんとす、『ハナニヤ諸ての民の前にて語り、エホバ斯く言ひ給ふ、我二年のうちに是の如く萬國民の頸よりバビロン王ネブカデネザルの軛を碎き離さんと云ふ。預言者エレミヤ遂に去りぬ』（エレミヤ記廿八章十、十一節）。ハナニヤの語つた言はエレミヤの言と全く正反對であつた、そして民をして神より離れ遠ざからしめんとするを目的としてゐた。

神は預言者エレミヤをして斯く預言せしめられた、『汝行きてハナニヤにエホバ斯く云ふと

告げよ、汝は木の軛を碎きたれども之に代へて鐵の軛を作れり。萬軍のエホバ、イスラエルの神斯く言ふ、我鐵の軛を此の萬國民の頸に置きて、バビロンの王ネブカデネザルに事へしむ。彼等之に事へん。我野の獸をも之に與へたり。また預言者エレミヤは預言者ハナニヤに言ひけるは、ハナニヤよ、請ふ、聽け、エホバは汝を遣はし給はず、汝は此の民に嘘僞を信ぜしむるなり。此の故にエホバ言ひ給ふ、我汝を地の面より除かん。汝エホバに叛く事を教ふるによりて今年死ぬべしと。預言者ハナニヤは此の年の七月死ねり』（エレミヤ記廿八章十三―十七節）。ハナニヤは其の僞預言者たるの正體が曝露されて殺されたのである。

その如く今日に於ても然り、教職者等は神エホバの名によりて語ると自稱す。然し彼等の吐く言そのものは彼等が僞物であつて、眞に神の代表者に非ざる事を明かに立證してゐる。聖書は示して、神は愛なりと教ふ。然るに牧師、神學者、傳道師と自稱する彼等教職者は人々に告げて、神は火と硫黄の燃ゆる永劫苦惱の場所を準備して置いて、教會に於て彼等教職者等の教ふる所に一致して聽きて信ぜざる者は其處に永劫に苛責苦惱を受くべしと教ふ。此の故に彼等の言は正直なる人々を神エホバより離れ遠ざからしむるものである。教職者等は人々に告げて、多くの亡者が今尙ほ煉獄内に在り、若し彼等の爲に祈禱するならば之等亡者は其の煉獄より出で來る事が出來るのであつて、その祈禱を爲し得る者は即ち彼等教職者で

あると主張す。斯かる言は全く嘘僞であつて、人々を邪導し、神は人間を永劫苛責に遭はし不完全なる人間の教職者の祈願によつてその亡者を解放する者であると誤信せしめて、正直なる人々を神より離れ遠ざからしむ。

彼等教職者は又人々に告げて、イエスの血には何者をも贖ふの價値なく、人々はイエスを以て單に一個の善人と見做し、教會の會員となつて、教會の教ふる處に聽き從つてゐさへすれば自らを助ける事が出來ると教ふ。之等の言は眞實ならず、同時に人々をして彼等教職者の教ふる如き神より離れ遠ざからしむるものである。又他の或る種の教職者等は人々に告げて、神は人間を完全に創造せず、從つて人間が罪の爲に墮落したと云ふが如き事はなくして、贖價の犧牲の如きは嘘僞であると教ふ。彼等教職者は亦人々に示して、人間は進化の動物なるが故に、彼自身の努力によつて完全なる狀態にまで自己を向上せしむる事が出來ると說く。之等の言は全く嘘僞であつて、人々を神エホバより離反せしむる爲に用ひられてゐるのである。

又彼等教職者は人々に三位一體の教理を教へて、父なる神と子なる神と聖靈なる神の三者は一體にして、此の一體は三位神たり此の三位神は同位、同等、同格、同一の永遠者なりと示す。斯かる言即ち預言は何人にも諒解する事の不可能にして、混亂そのものなるのみな

らず、神エホバを汚瀆し、普通の理性ある人々をして唯一位の神エホバより離れ遠ざからしむるものである、（イザヤ書四十二章八節。四十五章五、六節）。

彼等教職者は亦人々に告げて、「聖書は難解の書なるが故に之を研究するの必要なし」と教へ、彼等教職者のみが聖書を諒解し得る者であつて、人々は宜しく彼等教職者の教導に聽き從つてゐればよいと示す。斯かる言こそ人々をして神エホバより離れ去らしめ、又神の言を棄て去らしむる處のものである。

彼等教職者は人々に告げて、今日の殘忍暴戾醜惡なる自稱「キリスト國」に屬する諸國は地上に於ける神の國を形成するものなるが故に人々は如何なる困難を耐へ忍んでも喜んで之等諸國に隷屬しなければならぬと主張す。彼等は斯くの如き言を以て人々を神エホバより離反せしめてゐるのである。

又彼等教職者は示して、主イエス・キリスト再臨在を立證する證據は皆無にして、エホバが地上全人類に萬物復興の祝福を與へらるゝが如き理由は絶對になく、教會の會員として救はれたる者のみは天に昇る事夢疑ひなきも、彼等教職者の教ふる處に聽き從はざる者は皆地獄に於ける永劫の苛責苦惱に陷ると敎ふ。斯かる言は嘘僞にして人々を神エホバより離反せしむるに用ひられるのである。

又現代派と自稱する教職者は人々を教へて、人々は偉大なる神エホバを愛し、崇敬し、拜し、其の聖名を崇むるの必要なしと說く、故に彼等は之等の言によつて見るも僞預言者なる事が明瞭である。彼等は主の名によりて語ると自稱するも、其の中には神の聖名を宣揚せんとするが如き意志が絶無である。神の示し給ひし方則に基いて、彼等教職者が僞預言者なる事は極めて瞭かであつて、主イエス・キリストは其の豫定の時至るに及びて之等僞預言者の全部を「切り殺し」、之を全ての僞善者と同じき者として報はんと示してゐられる、（マタイ傳廿四章五十一節）。

預言者等が試みられる處の方則によると、彼等がエホバの御名によりて預言したる事の或るものが、其の言を出した時より暫らく後に成就し實現する事によつて判別される事となつてゐた。然し其等の出來事の或るものが實現した事のみを以ては未だ其の者を眞の預言者とするには不充分である。豫定の時至るに及びて其の全部的成就が實現しなければならぬ。エホバが未來の爲に何事かの音信を發せんとさるゝ時には、預言者エレミヤの用ひたる如く、「視よ、日來らんとエホバ言ひ給ふ」と示し置かれ、又預言者イザヤの用ひし如く「其の日斯く成らん」と示し置かれる。之は預言を研究するに際して甚だ重要なる點であつて、研究者は常に此の點に留意しなければならぬ。その試みの方法はエホバによつて準備されてゐる。

而して總ての預言を試むる爲には常に神の示し給ふその元則に從はなければならぬ。今一例を擧げて見ると、預言者イザヤは示して、神が地上に義の一政府を建設し、其の政府の運用をメシヤの肩上に置かれんとの旨を預言した、（イザヤ書九章六、七節）。亦地上の全諸族はエルサレムに赴きてエホバを學び、神の政府を通じてその敎示を受け、戰爭の事を最早學ばざるに至るべしと預言した、（イザヤ書二章二—四節）。エレミヤは示して、神はイスラエル人との間に新しき契約即ち新約を約び、其の契約の條件に基いて死者と生者の兩者に對して祝福の一機會を與へらるべしと預言した。若し之等の預言が今迄に成就されず、又成就さるゝ可能性が既に過ぎ去つたものとするならば、之等の預言は瞭かに僞物である事を立證してゐる。

彼等敎職者は以上の預言等を邪用して、神がイスラエル人を復興し、キリストによつて全地に神の義の政府を建設さるゝ事を否定してゐる。彼等敎職者は之等の預言を語りし人々を以て眞に神エホバを代表したる者に非ずと主張するのである。斯くして彼等敎職者は神エホバを以て嘘言者となすか若くは之等の預言者を以て僞預言者であるとなすのである。然し今、己が全部を以て神に歸順してゐる者は、此の地上に於ける現下の狀勢に見て、之等の預言の多くが今日此の時に於て成就の途上にある事を容易に看取する事が出來るのである。神

は預言の成就するを立證する爲に或る種の事實が其の時に發生すべき事を聲明し置き、之等の事實に基きて研究者はその預言が實現成就しつゝある事を知るべきやうに定め置かれた。之等の實證は神の預言者等の語りし預言が眞實である事を立證すると共に、近き將來に於て預言の全部が神の聖旨のまゝに必ず成就すべき事を示してゐるのである。

現代的牧師等は舊約書の預言者の言を否定し、之を以て今日若くは未來の上に適用する事を否認してゐる。彼等は人々の前に自らを勿體らしく裝はんが爲に、之等古代の預言者は眞實と信じて語れるには相違なきも、結局誤つてゐるのであつて、現代の牧師、神學者等は之等古代の預言者等よりも更に多くの智慧を有してゐると說く。彼等敎職者はイエスが當時のパリサイ人や學者に關して言はれし事を今自ら行つてゐるのである。即ち彼等敎職者は「盲人が盲人の手引きをしてゐる」のである。彼等は無知無識にして、神が先づ「約束の裔」（基督）を集めて後に、其の「約束の裔」を通じてイスラエル人を復興し、地上全人類に對して生命の復興を以て祝福を與へんとされる神の聖旨を知らないのである。此の故に彼等敎職者は神エホバの聖名を汚瀆し、人々をして神エホバより離反せしむるものである。

今日此の時、提唱されたる重大問題は、「エホバは全能の神なりや、それとも他にありや」と云ふ點である。「聖書は神の言なりや、それとも單なる人間の言なりや」と云ふ點である。

此の問題は神エホバの豫定されし時至るに及びて其の何れかゞ決定される事となつてゐる。神は其の御言を語らしめて之を記述せしめて置かれた。而して豫定の時至るに及びて其の聖言と聖名とを擁護さるゝのである。此の故に神は今此の時に地上に於て神の聖名と聖言とを忠實に宣明する或る人々を有し給ひ、其の結果として神を知らんと探し求めつゝある人々に對し、エホバが唯一の神に在す事を知らしめ、神が古代の預言者をして語らしめ給ひし預言の全部を實行せんとしてゐられる事に對して一般の人々の注意を喚起せしめられるのである。

預言者と呼ばれたる古代の聖き人々は己自身の音信を記述したのではなかつた。彼等は神の預言者として神の靈導下に之等を記述したのである。神の靈即ち聖靈は人間の肉眼に見る事能はざる力であるが、神は之を用ひて神に全く献身してゐる人々を感動し、指導さるゝのである。エホバの見えざる靈力は預言者即ち古代の聖き人々の上に働き、彼等をして其の受けし異象を記述せしめたのであるが、之等は皆今日此の地上に在る者の利益となる爲であつた。『預言は素より人の心によりて出でしに非ず、神に屬する聖き人、聖靈に感じて語りしものなればなり』（ペテロ後書一章廿一節）。

預言が聖書中に記錄されある目的は單に現代的批評家をして其の人間智を基礎として解剖研究せしめんが爲ではない。贖價の大犧牲を否定して人間進化論を喋々する僞教師の爲でもない。エホバの聖名を無視して他の被造物の名を崇め尊ぶ者の爲でもない。クリスチヤンと自稱しつゝ神エホバを捨てゝ、その聖名を高く宣揚する代りに人間の名を崇拜する者の爲でもない。クリスチヤンと自稱しつゝ人間同志の間に賞讃阿諛の稱號を交換し會ひ、神と其の御言よりも寧ろ人間に指導されん事を願ふ者の爲でもない、（ヨブ記卅二章廿一、廿二節）。

然らば之等の預言は何の目的で記錄されてあるのか。即ち之はキリスト・イエスの眞の追隨者の爲に記されてあるのであつて、特に「末の日」に此の地上に在りて神エホバと其の聖名の榮光を宣揚する爲に己が全部を献げ盡してゐる者等の爲である、（ロマ書十五章四節。コリント前書十章十一節）。『聖書は皆神の默示にして、教誨と督責、また人をして道に歸せしめ、また義を學ばしむるに益あり。これ神の人の完全を得て、諸々の善き事を行ふに缺け無からん爲なり』（テモテ後書三章十六、十七節）。

神エホバの前に己が全部を献げ、喜び進んで其の誡命を守る者は神の預言を諒解す、何故なれば彼等は聖書の謂ふ處の『穎悟者』であるからである。彼等は己が全部を神に献げて、神が彼等をして行はしめんとさるゝ知識を實行し、之を己がものとなすが故に智き者である。

「顕悟者」は悟り知らん、然ど惡しき者は諒解する事なかるべし、（ダニエル書十二章十節）。

エホバは其の選民なるイスラエル人を用ひて模圖即ち模型を作成された、而して其の實證が成就するのはその模圖の作成されし時より遙か後である。之等の模圖即ち模型は皆預言である。神は他の人々、例へばヨブの如き人を使用して模型となし、預言を形成する處の模圖を作成された。野に於ける幕屋にしても、又エルサレムに於ける殿にしても之等は何れも沈默的預言である。祭司職にあつたアロンと其の子等にしても、又預言者イザヤと其の子等にしても之等は皆模型であり、模圖であつて、神の義の政府の就任する直前に發生せんとする事を預言してゐるのである。神の預言を研究するに際して之等のものも皆預言として取扱はるべきである。

人間は罪の故によつて神より離れ遠ざかり、サタン即ち惡魔の支配下に置かれてゐた。神はサタンが神の聖名を絶えず汚瀆してその上に總らゆる誹謗を到來せしめ、人間を神と眞理より離反せしむる事を知悉してゐられた事は無論である。神はサタンをして其の惡を極度迄發揮せしめ、而して人間に對し、善惡の何れかを自ら選び取るの機會を與へられた。神は亦正しくして忠信なる人々に示して、エホバが最高至上の神に在す事、力と義と智と愛の最高完備者に在す事、豫定の時至るに及びて此の事實を立證し、義の政府を建設して、惡と、惡及

び不法を行ふ者の全部を擊ち滅ぼし、其の聖名を全人類の前に高く讃はして、彼等に生命の道を指示されんとの實證を與へられた。此の故に神は預言者等をして己が證者たらしめ、その預言の發しられたる時より數百年、或ひは數千年後に於て其の預言の確實なりし事を立證されるのであつた。神はその代辯者たる預言者によつて豫告されある如くに總ての出來事を成就し實現せしめ給ふ。斯くして神エホバは最初より最後までの萬づの事を豫知してゐられる事と、エホバのみが唯一の眞の神に在す事を確實に立證する處の實證を與へらるゝのである。

使徒ヤコブは神の聖靈によつて此の事實を悟らされて、「神は世の初めより其の全ての所作を知り給へり」（使徒行傳十五章十八節）と教示す。最初より最後までを知悉し給ふ神エホバは預言的證言を與へ置き、之により今、神に己が全部を捧ぐる者をして善にして義しき仕事に精勵せしむべく充分の光輝をその證言の上に照射されるのである。

第二章　贖　罪

エホバは其の御言の中に於て明示して、神が常に其の御言を高くさるゝことと、人類自身の福利の爲に神の御名を聖く保たるゝ事と、人々に對する御慈愛を固く保ち給ふ事を敎へ給ふ。預言の研究者は常に此の事實を記憶して置かなければならぬ。それと共に我等はエデンの時より今日此の時に至るまで宇宙には神に敵する元兇なるサタン即ち惡魔の實在する事を留意して置かなければならぬ。而して彼サタンの目的は常に神エホバを誹謗し、エホバの聖名を汚して人々を神エホバより離反せしむるにあつた事を記憶して置かなければならぬ。之等の事を心に確と留め置く時に研究者は神の預言の研究を進め、之を諒解する上に甚大なる利益を得る事となる。

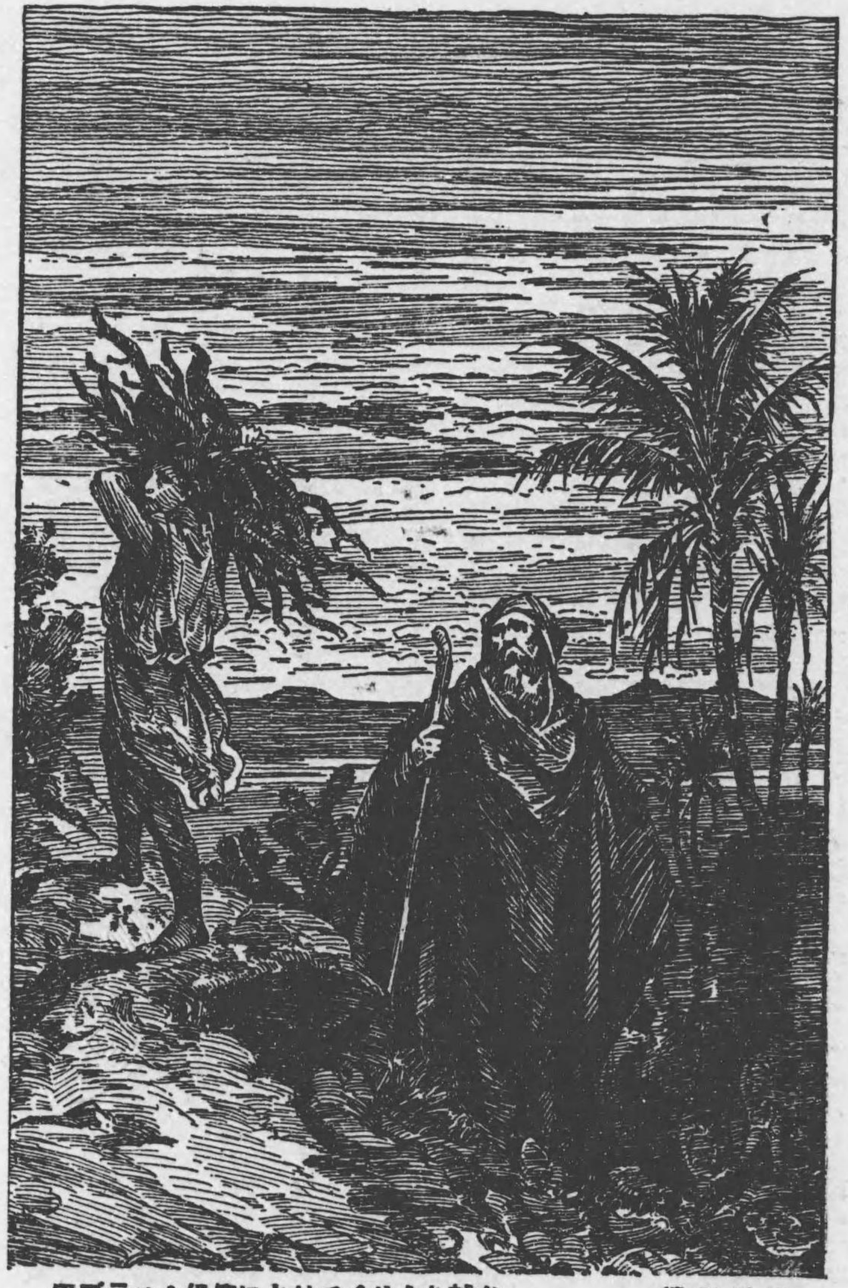
神が人間の男と女を完全に創造されたと云ふ此の事實は何時かの未來に於て完全なる此の男女の一組が同じく完全なる多くの子孫によつて取り圍まれ、地上に於て幸福に棲み、大創造者なる神に榮光を歸する時の到來すべき事を示してゐる。神は地の基を据ふる時に此の御目的をロゴスとルシファーに告げられたに相違ない、（ヨブ記卅八章七節）。叛逆の子ルシファーは神エホバに對する人間の崇拜を己が横取りして神の御目的を無効ならしめんと企てた。

其處で當然起る問題は、エホバは其の聖名と聖言の善き事を固く保たるであらうか、それとも人間を滅ぼし去つて地上に於ける創造の御仕事が全く失敗に歸した事を知らしめらるゝであらうか。サタンは斯う考へたのである、「若し神がアダムを滅ぼし去る事によつて其の律法の命ずる刑罰を執行されたならば、之即ちエホバは、貞節を持してエホバに服從する人間を創造し能はざる事を自ら承認さるゝ譯であつて、即ち創造に就ての神の努力が失敗した事を意味す。而して又、若し神が其の豫告された刑罰の通りにアダムを殺されぬならば之即ち神は自ら己が嘘言者なる事を立證する譯であつて、その全被造物よりの信頼を失ふ事となる。その何れにしても神の被造物はエホバに對する信頼を失つて、エホバより離れ去る事となるのであつて、斯くして我は人間及び他の被造物より崇敬を受ける事となるであらう」と。

神がアダムを殺されざるべしとはサタンの希望する處でもあり、又多分彼もさう信じてゐ

たに相違ない。是の故に彼は例の最初の嘘言なる『汝必ず死ぬる事あらじ』と云ふ言を平然と吐いたのである。彼サタンは啻に神を以て一の嘘言者となしたるのみならず、又神に挑戰して、神がアダムに對する刑罰を執行する事によつて己が弱點を自ら立證さるゝ事と考へてゐた。此の故にルシファーの叛逆と人間の墮落は直ちに大創造者エホバの聖名と聖言の上に重大密接なる關係を有する事となる。神は己が聖名と聖言を擁護する爲に如何なる方法を執られたであらうか。

神は人間に對して死刑を宣告されたが、然し其の宣告を即座に執行はされなかつた。神は人間アダムをエデンより放逐して聖顏を彼より離らされた。若し此の狀態が永久に續くものとするならば、人間は神より離反して永久に生存して甚大なる精神的苦痛を嘗めなければならぬ。地獄に於ける永劫苛責苦惱の僞教理は此の時にサタンによつて案出されたるものなるべく、アダムが神の御前より放逐されたる其の時より後今日に至るまでサタンは神を冒瀆しつゝ此の僞教理を活用して來たのである。若し神がアダムに對する愛着から其の審判を罷め、之を無視されたとしたならば、神の被造物の上に如何なる影響を與ふる事となるか、その時に人間は常に神の律法を破るも、神よりの刑罰を受くる事は決してないとの結論を得るに相違ない。天界の天使等も人間と同じき態度に出づるに相違ない。神がアダムの上に即座に死



第四五頁　アブラハム信仰によりてイサクを献ぐ

刑を執行されなかつたと云ふ此の事實はサタンの利用する處となつて、天界の天使の多數をしてエホバより離反せしめて、サタンに追隨せしむるに至つた事であらう。此の故にサタンは神が人間の上に即座に死刑を執行されなかつた事は神をして一個の嘘言者たらしめ、神に對する被造物の信賴を破壞せしむる處の理由をサタンと他の被造物に與へた事であらう。天使の多數がエホバより離れてサタンに追隨するに至つた原因は即ち此處にあつたに相違ないのである。

或る人々は主張して、神はアダムを免し、彼の上に憐憫を加へて其の律法に基く刑罰を執行すべきではなかつたと力說してゐる。そして彼等は己が意見を裏書する爲にペテロに對して示されたイエスの言を引用してゐる。ペテロはイエスに向つて、若し兄弟が己に向つて罪を犯したならば何の程度まで免すべきかと尋ねた。イエスは之に對して斯く答へられた、『七度を七十倍せよ』(マタイ傳十八章廿一、廿二節)。此のイエスの言を以つて、神はアダムを免すべきであつたとの己が意見を裏書せんとする者は、兄弟である二人の人たる場合と、其の完全なる被造物に對する神の場合の相違を見ざる人々である。人間アダムは完全であつて、彼は己が創造者の律法を故意に破つたのである。イエスの言は二人共に不完全なる罪人たる兄弟に向つて示されたのであつて、彼等は互ひに己が弱點を思ひやるべき立場にあつた。アダ

ムは完全なる人間であつて、彼の義務は神の律法を守るにあつた。その律法の明文は極めて簡單明瞭である、(創世記二章十六、十七節)。其の時其處にはアダムの側に於て此の律法を守るべき不文の契約が成立してゐた譯であつて、アダムも又容易にそれを爲し得る立場に置かれてゐた。故に此の場合に於て、アダムの悔ひ改めと罪の免しは全く考慮さるべき價値の無いものである。

更に又、若し人間が故意に罪を犯して尙ほ免さるゝ事ありとするならば、天界に於ける天使等も同じく罪を犯して免されなければならぬ事となる。而して神の全宇宙の基礎は全く動搖するに至る。人間を困惑せしむる之等の諸問題も大創造者エホバには些の煩ひともならない。神エホバは最初より最後までを知悉し給ふ、而して神はルシファーと彼に屬する他の被造物をして己が勝手に推論せしめ、己が好む道を歩むを放任して置かれた。神の智慧はサタンのみならず他の全被造物に對して察知すべく餘りに大であつた、(詩篇十篇五節。箴言廿四章七節。ロマ書十一章卅三節)。然し神は其の知識の寶庫を開いて、神を愛する者に智慧を與へ、彼等をして神の智慧の富の如何に深きかの或るものを見る事を得せしめ給ふ、(詩篇百十一篇十節。廿五篇九節)。神は豫定の時至るに及びて、全被造物の前に示して、サタンの推論の悉くが嘘僞であり、其の結論の全く誤れる事と、サタンの道に從ひ歩んだ者は皆惡しき者であつ

た事を確實に立證さるゝのである。而してエホバは、御自身が唯一の全智、全能、全義、全愛の神に在して、エホバ以外にエホバの如き偉大なる神なく、生命を得んとする者は神の示し給ふ道に歩まざるべからざる事を明かに立證し給ふのである。

神はアダムに對して死刑の宣告を發せらるゝと同時に、又サタンに對して死刑を宣告された。神はサタンに對する刑罰の執行をも後日に延期されたが、之も亦サタンの利用する處となつて、天界の天使等を彼の惡しき道に邪導するの具として用ひたに相違ない、そして多數の天使は斯くして邪導された。此の故に此の時以後今日に至るまでの全期間を通じての問題は、最高權威者なる神は誰か、と云ふ事である。而して此の問題は今決定を見ることゝなつてゐる。

神は義でなければならぬ、故にアダムに死刑を執行しなければならぬ。神がアダムに對する死刑執行を九百餘年間延期されたに就ては其處に充分の理由があつた。此の死の宣告はアダムの全子孫に影響した、(ロマ書五章十二節)。全人類は罪人として生れ出でたるが故に、彼等は、自力に依て神と人間との間の和解を得る事に對して全く絶望の狀態にあつた。若し人間が義とされ、其の創造者の前に正しき者として立ち得る方法がありとするならば其の方法は神によつて備へられなければならぬ。神のみが之を善く成し得る處の全智者に在し、又全

能者に在す。而して最初より最後までを知悉し給ふ神は人間の義とされ、神との和解に入れられるに必要なる方法を豫め備へ給ふたのである。神より智慧を授けられたる使徒パウロは、神が如何に義に在し、又人を義とし給ふかに就て語り示した、（ロマ書三章廿四、廿六節）。

アダムがエデンより追放されし其の日から、神は既に人間の復興に關する預言を示し始められた。神は最初より最後までを知悉し給ふ全知者なるに對し、サタン自身には斯かる能力が缺けてゐた。エホバは其の宣告をなすに際して何時かの未來に於て「裔」の出で來るべきを預告し、此の裔はアダムを通じて來るに非ざると共に、此の裔はサタンを全く征服する者にして、又死と其の力とを破壞し去る處の勝利者たるべしと示して置かれた。此の征服者なる裔が何時如何なる方法にて來るかに就て知り得る者は絶無である、神は此の聲明を發して置かれたが、之で充分である、（創世記三章十節）。

蔽　ひ

神は獸の皮を以てアダムと其妻の爲に皮衣を造つて與へられた。之は即ち預言的行爲であつた。之等の皮衣を造る爲に一頭若くは數頭の獸類が死なゝければならなかつた。此の衣は罪の故によつて備へられたるものである。斯くの如く預言的に示して、人間の罪は神の御前に斯樣にして蔽ひ隱されるが、然し之は唯他の何物かの死を通じてのみ可能である事を敎へ

られたのである。「卯を蔽ふ衣」を備ふる者の死は即ちアダムの生命に對する代償物即ち身替りでなければならぬ。エホバの此の預言的行爲は更に進んで、神が人間を贖ふ爲に人間の爲に一の代償即ち身替りを備へ給ふ事を示してゐるのであつて、此の贖ひ主たる者は甚だ高價なる者でなければならず、又彼は强くして敵を征服する者でなければならぬ事を示してゐる。神は未來に於て此の贖ひ主の到來する事を絶えず人々の前に指示して置かれた。人間が各自聖書を與へられ、又神の聖靈を受ける末の時に於て彼等は神の惠みによつて此の事を明かに悟り知る事となつてゐる。而して今、誠に感謝すべきは、人間が此の事を諒解し、神の智と愛と力の或るものを感受し得るの豫定の時が到來した事である。

贖　あがない

神は「贖ひ主」に關する預言を發して置かれたが、然らば此の「贖ひ主」たる事の意味は何であるかと云ふ事に就て正式に研究して見る。此の「贖ひ主」と「贖ふ」の意義を決定するには其の基礎を聖書に求めなければならぬ。舊約書中には一般に「贖ふ」及び「贖ひ主」と譯されある字が二種ある。此の中の（ガール）の字は親戚者によつて買ひ戻す、又は價を拂つて救ひ出すと云ふを意味す、（レビ記廿五章廿五、四十八節。出埃及記六章六節）。又他の（パダー）の字は救ひ出す、自由にする、援け出すと云ふを意味す、（申命記十三章五節。ホセア書十三章十

四節）。此の故に聖書の示す處によつて正當に諒解すると、此の「贖ひ主」なる字義は、要求されたる價を支拂ひて、奴隷となれる者を救ひ出して自由を與ふ、と云ふを意味するのである。此の方法によつて奴隷は完全に解放さるゝ事となる。

聖書は示して、アダムが罪を犯して死の繩は彼を縛め、之によつて彼の子孫なる全人類も此の罪と死の奴隷たる事を遺傳して此の中に封じ込められたと教へてゐる、（ロマ書五章十二節。八章廿一節）。若し人間が此の奴隷下から救ひ出さるゝとするならば、それは人間を買ひ取り、其の要求されたる價格を喜んで支拂ひ得る者によつてでなければならぬ。而して其の贖ひ主たる者は強くして、人類を囚へ置く所の權力を拒絶し、之を征服し得る能力を有する者でなければならぬ。此の最初の預言（創世記三章十五節）は人間を奴隷下より贖ひ出す事に關して一大爭鬪のあるべき事と、其の救濟者は必ず征服者たるべき事を示してゐる。此の預言の目的は、斯かる大贖ひ主、大救ひ主の來るべき事と、之によつて人類の救濟が完成する事を神が示し給ふ事にあつて、之は預言と預言的行爲によつて豫示されてゐたのである。

犧牲

エホバは獸類の犧牲を重んぜられた。獸類を犧牲の祭物として献げる事は、人間を奴隷下から解放するに際して神が何を求め給ふかと云ふ事を指示してゐる。アベルとカインとは共

に祭物を神に献げた。アベルの祭物は彼の有する羊の群の中の初生で肥えたるものであつた。而して神は此の犧牲を重んじられた。神エホバが此の祭物を重んじられたと云ふ此の事實は、人間を奴隷下より解放するに際して何が要求されるかと云ふ事を指示してゐるのであつて、何故なれば之は二千五百年後に神がイスラエル人に向つて同樣の犧牲を献ぐべきやうに命じられたるに見ても明瞭であるからである、（創世記四章四節。民數記略十八章十七節）。カインの祭物は神に受け容れられなかつた。其の理由は聖書研究者のよく理解する所であつて、即ちカインの祭物は單に土地の果實に過ぎずして、生命を捨てたるものでなかつたからである。一方アベルの祭物には要求されたる處の血潮が流されてゐた、『信仰によりてアベルはカインより愈れる祭物を神に献げて義しき者と證せられたり』（ヘブル書十一章四節）。之は別に神が獸類を屠る事を喜びとされる譯ではなくして、神は之によつて、アダムが捨てた生命の權を買ひ戻す贖價として一の生命を神が受け納れらるゝ事を指示されたのである。

人類の初期に於て人々が犧牲の祭物に關する眞の目的を理解してゐたとは聖書中に少しも示されてゐない。唯忠信なる人々は生命の犧牲が神によつて重んぜられる事と、之が未來の祝福に何等かの關聯を有してゐる事とを學び知つてゐた程度に過ぎないのである。神に對する彼等の信仰は神に嘉納された。神は之等の祭物を受納する事によつて預言を作成された。

エホバは獸類の犧牲を以て何等喜びとされず、又少しも滿足には思はれなかつたのであるが、然し之は人間の爲に贖價を備へんとする神の御目的を表象する處の預言的方法であつたのである。神は其の豫定の時至るに及びて之の意義を忠信者に顯はし示さるべく、之によつて彼等の神に對する信仰と信賴は益々强められる事となる、（ヘブル書十章六節）。神エホバに對して斯く信仰を保つ者は其の歩む所によつて己が信仰を立證す。

ノアは方舟より出で來れる時に獸類を屠つて神エホバに對する祭物として獻げたが神は之等の祭物を嘉納された、（創世記八章廿節）。此の時はエデンの當時から遙か後であるが、然しノアによつて獻げられたる此の祭物は罪を覺ゆる爲であり、罪人に對する代償として必要なるものであつて之が預言的行爲の一であつた事は明かである。

アブラハムは信仰によつて義とされたが、彼は獸類の祭物を獻げる事によつて神に對する己が信仰を表示した。彼はカナンの土地に達すると直ぐ之を爲したのである、（創世記十二章七節）。之は別にアブラハムが贖罪に關する神の御目的を知つてゐたと云ふ譯ではなくして、彼は神の爲し給ふ所は悉く正しとの信仰を有してゐたのである。そして神はアブラハムの行動を指導し給ふたのであつて、彼が獸類を犧牲の祭物として獻げたる事は未來に來らんとする更に善き事を指示する沈默的預言であつた。其の後神はアブラハムを指導して、未

來に於て人間を贖ふ爲に偉大なる犧牲の祭物が成さるゝ沈默的預言を作成する爲に此の祭物をなさしめられた。神はアブラハムに告げて彼の愛する獨子イサクを執つて彼を燔祭としてエホバに獻げよと命じられた、（創世記廿二章一―十八節）。アブラハムは神命に從ひて行動を開始し、今や正に其の愛子を屠らんとする其の刹那に神は彼の手を止められた。それと同時に神エホバはイサクの代りに祭物たるべき獸を備へられた。此の行爲によつて、愛子イサクが實際に殺されたるを髣髴せしむる所の力强き一模圖が作成されたのである。神は此處に於て人間を贖ひ出す爲に如何なる價を要求されるかと云ふ一の預言を示されたのみに止まらずして、更に進んで獸類の祭物が何を意味するかと云ふ事を說明されたのである。之は即ち獸類の祭物は、人類を贖ふ大贖價として一個の人間の生命が備へられる事と、此の生命はアダムに對する身替りとなるべきものなるが故に一個の完全なる人間の命でなければならぬ事とを豫め示してゐたのである。

此の預言的模圖に於てアブラハムは神を代表し、一方彼の獨子イサクは神の愛さるゝ獨子イエス・キリストを代表してゐたのである。已が愛する獨子を祭物として獻ぐる事はアブラハムにとつて非常に高價の犧牲であつたが、之は即ち、神エホバは人間の贖ひ主であつて、之が爲に非常に高價なる犧牲を拂はれる事を預言的に示してゐるのである。アブラハムが此

の祭物に關聯して爲したる行動中に、此の預言的模圖を說明したる形跡は絕無である。然し今日、聖書の研究者は神が如何にして贖價を見出して之を備へ、人類の贖ひ主たるべき爲に此の者が犧牲の死を遂げなければならぬかを預言して置かれたかを悟り知る事が出來るのである。

イスラエル人が埃及の奴隸生活にあつた事は全人類が彼等の壓制者なるサタンの支配下にあるを表象して居た、神が已の民イスラエルを埃及から正に救ひ出さんとされし時に彼等は一頭の疵なき牡の羔羊を獻げる事を神より命ぜられた。其の羔羊の血はイスラエル人の住所の門口の柱と鴨居に塗られたが、此の血は其の家の長子を死の手より保護するの役目を勤めた。過越の羔羊は獻げられた。然る後にモーセは救濟者としてイスラエル人を埃及の奴隸生活から救ひ出した、（出埃及記十二章一―十四節）。毎年七月の十日はイスラエル人が已の罪と過ちとを反省する日として定められた。之即ち彼等が毎年守るべき「贖罪の日」であつた。此の日祭司は獸類を屠り、其の血を取りて幕屋の「至聖」内に携へ入り、贖罪所の上に其の血を注ぎかけるのであつた。初めに牡牛の血が注がれて、後に「エホバの山羊」の血が牡牛の血と同樣の方法で注がれた。此の儀式は民の罪に對する贖ひとして毎年行はれるのであつた。猶太人は之等の事の行はれるのを見たには相違ないが、然し彼等は之等の祭物の眞の意

義を諒解する事が出來なかつた。此處でも亦偉大なる預言が示されたのである。此の預言は人類の爲の祭物たるべき者が見出されて、之により贖罪が如何にして完成されるかと云ふ事を示してゐる。幕屋の建物を取り卷く「庭」の中で獸類は屠られたが、此の庭は此の偉大なる祭物が作成さるゝ所の地上を表象し、又「至聖」は天界それ自身であつて、血は其處に注がれなければならぬ事となつてゐるが、之即ち、人類を贖ひ出す爲の贖價は天界に於て支拂はれなければならぬ事を示してゐるのであつて、此の贖價たるものは犧牲の祭物として注ぎ出さるゝ一個の生命でなければならぬのである。

エホバは其の選民なるイスラエル人の行動によつて未來に關する預言を示された。神は贖ひ主たるべき者は亦救ひ主でなければならぬ事を示された。パロの統治下にあつてイスラエル人を奴隸に拘禁したる埃及は、サタンを支配者として人類を罪の下に拘禁してゐる處の此の世の惡しき組織制度を表象してゐたのである。モーセは神エホバと其の御力によりて强き者となり、イスラエル人を救ひ出したが、之によつて彼の行動は一の預言を示す事となつたのである、即ち曰く「モーセよりも偉大なる者が起りて全人類に對する贖ひ主となり、救ひ主となりて彼等を敵なるサタンの手の下から救ひ出す時が必ず來る」と。其の如くダビデも又イスラエル人を敵の手より救ひ出したが、之は即ち神は一個の大能者を遣して人類を彼等

の敵の手より救ひ出さるゝ日の到來する事を豫示する預言となつてゐるのである。

然る後に神は眞に神に服從してゐる人々をして贖ひ主に關する預言を語らしめられた。之等の人々は贖ひ主に關して述べた己が言を理解してゐたのではなくして、彼等は神の感動下に於て唯書き、且つ語つたに過ぎないのである。

ヨブは其の苦惱と艱難に於て、人類の苦惱と彼等が救はれん事を切望してゐる狀態を表象した。ヨブは先づ神の善き事と、人間の無價値なる事を語り、此の人間が自力で創造者との一致に入る事の如何に不可能なるかを述べた、然る後に彼は云ふ、『また我等の間には我等兩者の上に手を置くべき仲保あらず』（ヨブ記九章廿三節）と。此の預言の意味は即ち斯うである。「神と人間との間に介在する者がなければならぬが、此の仲保たるべき者は神が人間の救ひ主として備へらるゝ者である」。然る後にヨブは左の如き預言を述べた、『我知る、我を贖ふ者は活く。後の日に彼必ず地の上に立たん。我が此の皮、此の身の朽ち果てん後われ肉を離れて神を見ん』（ヨブ記十九章廿五、廿六節）。

神は其の預言者をして斯く記述せしめ置かれた、『我彼等を墓（陰府……は曲譯）の手より贖はん。我彼等を死より贖はん』（ホセア書十三章十四節）。此の「贖ふ」と云ふ字は「價を拂つて買ひ戻す」と云ふを意味し、同時に之は「救ひ出して自由にする」と云ふを意味す。故に

此の預言は示して、神は其の豫定の時に於て自ら嘉しと見給ふ方法を用ひて人間の生命の權を買ひ戻し、一の價を以て生存權を贖つて人類を死と墓の力より救ひ出して自由にするの聖旨を有してゐられる事を告げてゐるのである。

此の問題に就て神はその預言者をして亦斯う記述せしめて置かれた、『己が富を恃み、財寶多きに誇る者、誰一人己が兄弟を贖ふ事（救ひ出して自由にする事）能はず、之が爲に贖價を神に獻げ、之を永遠に生き存らへしめて朽ちざらしむる事能はず』（詩篇四十九篇六―九節）。人間はその有する富の全部を以てするも己自身を救ひ、又其の兄弟なる人類の全部を救ひて之を自由にする事は出來ないのである。之を成し得る者は即ち神エホバのみである。而して此の預言は示して神が此の事を成し給ふを告げてゐる、『彼等は羊の群の如く墓（陰府……は曲譯）のものと定めらる。死之が牧者とならん。直き者朝に彼等を治めん。その美容は墓に滅ぼされて宿る所なかるべし。されど神我を接け給ふべけれは我が靈魂（生命）を贖ひて墓の能力より脫れしめ給はん』（詩篇四十九篇十四、十五節）。

神は其の指導下にあつた人々の執つた歩みと言によつて、アダムに對する代償として獻げられる生命によつて全人類を贖はんとの御目的を漸次的に示されたが、又預言者等を通じて此の御目的を明かに顯示された。神は全く純眞にして罪より離れたる一個の人の到來する事

と、此の人が喜び進んで自發的に死して祭物となる事、彼が自ら生命を注ぎ出して人間を死と墓の力の下より贖ひ出す所の偉大なる贖價を備ふる事、此の完全なる人は自ら罪なきに拘らず一個の罪人として死する事、神は彼を死より甦らさゝる事、エホバの御目的は彼の手によつて榮ゆる事、彼は啻に己が生命の血を以て人類を贖ひたる贖ひ主たるに止まらずして、敵に打ち勝つ所の大征服者たるべき事を預言して置かれた。神は斯く驚くべき預言を以て之を示し給ふ。

「誠に彼は我等の病患を負ひ、我等の悲嘆を擔へり。然るに我等思へらく、彼は責められ、神に打たれ、苦しめらるゝなりと。彼は我等の愆の爲に傷けられ、我等の不義の爲に碎かれ、自ら懲罰を受けて我等に平安を與ふ。その打たれし痍によりて我等は醫されたり、我等は皆羊の如く迷ひて各々己が道に向ひ行けり、然るにエホバは我等凡ての者の不義を彼の上に置き給へり。彼は苦しめらるれども自ら謙りて口を開かず、屠場にひかるゝ羔羊の如く、毛を切る者の前に默す羊の如くして其の口を開かざりき。彼は虐待と審判とによりて取り去られたり。其の代の人のうち誰か彼が活ける者の地より絶たれし事を思ひたりしや。彼は我が民の愆の爲に打たれしなり。其の墓は惡しき者と共に設けられたれど、死ぬる時は富める者と共になれり。彼は暴びを行はず、其の口には囁僞なかりき。されどエホバは彼を碎く事を喜びて之を惱ましめ給へり。斯くて彼の靈魂（生命）罪（愆……は譯註）の祭物をなすに至らば、彼は其の末を見るを得、其の日は永からん。且つエホバの悅び給ふことは彼の手によりて榮ゆべし。彼は己が靈魂（生命）の煩勞を見て心足らはん。我が義しき僕はその知識によりて多くの人を義とし、又彼等の不義を藏はん。此の故に我かれをして大なる者と共に物を分ち取らしめん。彼は强き者（エホバ）と共に掠物を分ち取るべし。彼は己が靈魂（生命）を傾けて死に至らしめ、愆（罪）ある者と共に數へられたればなり。彼は多くの人の罪を負ひ、愆（罪）ある者の爲にとりなしをなせり」（イザヤ書五十三章四—十二節）。

此の預言的實證は示して、ルシファーが叛逆し、人間が墮落した瞬間に、神は御自身に全く忠信なるを立證する一個の完全なる人間を地上に備へ、此の者がエホバに全く歸順して神の聖旨に服從し、自ら進んでアダムの身替りとなるべく死に、之によつて人間の爲に完全なる贖價を備へる事と、神は此の大能者を死より甦らして彼に神性の榮位を許し、己が聖言と聖名を擁護する爲に彼を用ひらるゝと云ふ事を明かに立證してゐるのである。

檢討

然らば我等は之等の預言が確實である事を如何にして知り得べきか。其れに對する答としては、即ち之等の預言は神の定め給ひし試驗の方法に全く合致してゐると云ふ事である。眞

理を語つた預言者の全部は皆エホバの聖名に於て語つた。故に之等の預言はエホバの御言であつた。神は證明の方法を準備し置き、此の方法によつて人々が之等の預言の眞僞を識別するの方法を立てられた。以上引用した預言の全部は必要なる諸條件を具備してゐるのであつて、即ち之等は皆エホバの名によつて語られし事、人々をエホバに惹きつけてエホバが全能の神に在す事を彼等に敎ふるものなる事、之等の預言の多くは既に成就し、又今成就の途上に在る之等の諸事實は即ち之を語りし預言者イザヤが神の預言者なりし事と、其の語りし言が神の言にして眞理なる事を明かに立證してゐるのである。斯くの如くに語られし之等諸々の預言の或る部分が既に成就を見たる事が明かなりとすれば、我等は他の部分も亦必ず成就すると云ふ事を絶對の信賴を以て期待し得る譯である

成就

イエスは神の預言者によつて豫告されし其の所に於て生れた、（ミカ書五章二節）。イエスは人間によつて生れず、神エホバの御力によつて生れたが故に彼は潔くして汚れなき完全なる人であつた、（マタイ傳一章十八節。ヘブル書七章廿六節）。イエスは神エホバの聖名に於て語るべく此の世に遣はされたのであつて、その如くに語りて使命を果された、（ヨハネ傳六章廿八、五十七節）。イエスは一個の猶太人として律法の下に生れたが、之即ちモーセの預言せし處の

「兄弟の中より一人の預言者を興さん」とあるに正しく該當する者であつた、（申命記十八章十五、十八節。ガラテヤ書四章四節）。イエスが一個の人間として其の地上に於ける任務を開始されんとした時に預言者中の最大なる洗禮者のヨハネはイエスを指し示して斯う云つた、『世の罪を負ふ神の羔羊（過越の羔羊によりて豫表されしもの）を視よ』（ヨハネ傳一章廿九節）と。羔羊がイスラエル人によつて獻げられたるその如く、イエスも祭物として獻げられるのであつて、イエスの血即ち生命は世の罪の爲に注ぎ出された。預言者イザヤは示して、イエスは「悲しむ者を慰めん」（イザヤ書六十一章一―二節）とて來られると預言した。イエスは行き巡りて善き事をなし、悲しむ者を慰め、病める者を醫し、盲目の眼を開かれた、（ルカ傳四章十八節。マタイ傳十一章廿八節）。　全人類は死の奴隷として繫がれてゐるのであつて、彼等に必要なるものは生命であつた、而してイエスは云はれた、『我が來るは彼等をして生命を得、且つ豊ならしめんが爲なり』（ヨハネ傳十章十節）と。イエスは更に示して、彼は己が生命を人間の爲に贖價として與へんが爲に來たと告げられた、（マタイ傳廿章廿八節。ヨハネ傳六章五十一節）。

イエスは迫害され、虐待された。イエスは不當の罪名を以て辱められた。イエスは惡人なるかの如くに審判され、二人の罪人の間に挾まれて十字架に釘けられたが、之等の事は皆神の預言者によつて既に預言されてゐる處であつた。イエスは神の力によつて死より甦ら

された、（使徒行傳十章廿八―四十節）。イエスは擧げられて昇天し、死の征服者として永遠に生き、今も尙ほ敵する者全部の上に征服者として神の軍の先登に進んでゐられるのである、（默示錄一章十八節。六章二節）。何故にイエスの生命の血が注ぎ出れたかと云ふ事に就て神の證者は斯く證言す、『唯我等天の使等より少しく劣らされし者、即ち死の苦みを受けしに因りて榮光と尊貴を冠せられたるイエスを見たり。其の死にたるは神の恩によりて衆の人に代り、死を嘗へんが爲なり』（ヘブル書二章九節）。

『それ神は一位なり、又神と人との間に一位の仲保あり、即ち人なるキリスト・イエスなり。彼は萬人に代り、己を棄てゝ贖ひとなせり。時（豫定の時）至らば證すべし』（テモテ前書二章五、六節）。『そは汝等贖れて先祖より傳はりたる空しき行ひより離れしは、銀や金の如き壞つるものに由るに非ず、疵なく、汚なき羔羊の如きキリストの尊き血に由れることを知ればなり。キリストは世の基を置かざりし先に定められ、此の末の時に汝等の爲に顯はれ給へり』（ペテロ前書一章十八―廿節）。

イエスは「多くの人の罪を負ふ」爲に獻げられた。「彼は己が祭物によつて罪を除く爲に顯はれた」（ヘブル書九章廿六―廿八節）。『その恩の豊なるに由りて彼に在る我等は其の血により贖ひ即ち罪の赦しを得るなり』（エペソ書一章七節）。『然れども今はキリスト・イエスに在れ

ば嘗に遠ざかりし汝等もイエスの血によりて近づけり。彼は我等の和解なり。二者を一となし、寃仇となる隔ての垣を毀ち、律法の中に命ずる所の法を其の肉體にて廢せり、そは二者を己に聯ね、之を一の新しき人に造りて和解がしめ、また十字架を以て寃仇を滅ぼし、又之を以て二者を一體となして神と和解がしめん爲なり』（エペソ書二章十三―十六節）。

『我等は其の子に由りて贖ひ即ち罪の赦しを得るなり。其の十字架の血に由りて平和をなし、萬物即ち地の上にある者、天に在る者をして彼に由りて己と和解がしむる事は是れその聖旨に適ふことなればなり』（コロサイ書一章十四、廿節）。『此の外別に救あることなし、そは天下の人の中に我等の依り賴みて救はるべき他の名を賜はざればなり』（使徒行傳四章十二節）。

偽預言者

現代の各派教會の牧師や傳道師即ち教職者等は己等が神の名に於て語る所の預言者であると自稱してゐる。彼等は其の會衆の前に於て神とイエスの名を口にする事時々あるも、其の實は神とキリストの力を否定するのである。之ぞ即ち彼等が彼等に關して告げられある處の預言を自ら成就してゐるのである、（イザヤ書廿九章十三節。テモテ後書三章五節）。彼等は人間の創造と其の罪の故による墮落に關する聖書の記錄を否定し、人間を贖ふ爲の贖價として流れたるイエスの血の價値を否定す、彼等は偉大なる贖價の全價値を否定するのである。之等

多數の現代的教職者の一典型たる英國教會（聖公會）バーミングハム教區監督神學博士バーンス牧師が一九二七年九月廿六日になした「說教」を一實例として左に擧げて見る、

「此の社會人心と道德の混亂、知識增進と不安動搖の今日に於て、人々の間の騷擾は甚しく、地上には平和が殆んどなくなり、宗教的信仰と我等の父祖の傳說は今や銳く批難を受けてゐる。

彼等は舊式の信仰に賴り縋つてゐるのであらうか。我等は寧ろ双手を擴げて種々の新しき發見を歡迎し、之等の新發見を爲した偉人等に向つて滿腔の敬意を表する者である。然し注意すべきは之等の新しき知識全部の裏面に於て生命に關する重大問題が未だ尙ほ隱されてゐる。

今日有名なる科學者等は人間は猿より進化したと云ふ意見に完全なる一致を見てゐる。人類は多分百萬年以前に於て他の方向に步み出した人類猿の中から立ち始めたのである。

其の結果としてアダムとエバ創造の物語や、彼等の無邪氣なりし事と、彼等の墮落せる事とは我等の前に全く下らない傳說となつて了つた。然しカトリック敎義を組み立てたる連中からは之等の事が動かすべからざる事實として受け容れられた。人間が特に創造されたと云ふ物語はカトリック敎會制度の僭越なる假定から出發したるものである。

ダーヴヰンの勝利は全部の神學を顚覆破壞して了つた。人間は罪なき完全なる理想の狀態より墮落したのではなくして、人間は獸が漸次的に靈的知識を得て彼の祖先より遙かに優れる狀態に自ら向上したのである」

今日の現代的牧師の如何なる人に對してもよいから、イエスの血によつて人類が贖はれたる事に就て尋ねて御覽なさい。彼等は言下に、イエスの血は贖ひの價としては流されなかつたと答へるに相違ない。彼等が贖ひ主と、罪に關する神の預言の明示する處に無知無識なると、又彼等が故意に眞理を誤傳してゐるとの如何に拘らず、彼等の言が嘘僞なる事に就ては一點の疑ひなき所である。神より示されてゐる元則によつて彼等の言ふ處を檢討せよ、先づ（第一）に彼等は神の言を否定す、（第二）に人間が自力によつて自らを向上せしめ、救ふ事が出來ると云ふ彼等の主張は今日までに少しも事實たるを示さず、又今後も永久に失敗するに至る、（第三）彼等の敎ふる處は唯人々を神エホバより離反せしめて、無神論者と不信者を製造するのみである。故に斯かる者は皆僞預言者であつて、彼等は己が父なる惡魔を代表し、イエス在世當時に於て猶太人の間に橫行してゐた僞預言者、僞敎師等に正しく該當する者である。

猶太人に依て獻げられ、神の御目的を豫示するに用ひられた獸類の祭物を之等現代的牧師

等は甚しく嫌忌す。而して人間の罪の爲に人間を祭物とすると云ふ事は彼等によつて更に強く嫌忌されるのである。之等現代的牧師に對する難點は、彼等が人間を罪人として認めず、又人間が贖ひ救はれて生命に復興さるゝ事は一に神のみに賴る事を受け容れない所にあるのである。

人々は皆人間が不完全で、病の器であり、苦痛と死に運命づけられてゐる事を自ら見、又體驗によつて知る。又如何なる人も已が努力によつて向上し完全なる狀態即ち永久の生命の狀態に自らを引き揚げた者の絶無なるをよく知る。總ての正氣ある人々の切に願ふ處は彼等が生命を得ん事である。彼等は眞理を知らん事を欲す。神の言即ち聖書中に記されある神の言と之に一致する說明を除いて他に眞理は絶無である。之に就てイエスは斯く示された、「汝の言は眞理なり」（ヨハネ傳十七章十七節）。眞理を知つて之に從ふ事は即ち生命に至るの道を步むのである。

人類の贖ひに關する之等多數の預言と、之が成就せる事を示す實證は、神の預言者等が眞理を豫告した事を明かに立證してゐる。之等の預言は神の預言を研究する心直き人々の信仰と信賴の基礎を築くものである。此の故に人々よ、人間智所產の空しき想像談議を排して、愼重に神の眞理の御言を研究すべきである。之を爲す事によつて人々は、エホバが唯一の眞

の神に在す事と、全人類を敎へて生命の道に彼等を指導する爲の器として偉大なる贖ひ主、預言者、祭司及び王なる大救濟者を使用さるゝ事を學び知るに至る。心直き人々が之等の研究を進むる時に、知識と眞理の大寶庫は彼の前に開かれ、彼を導いて限りなき祝福に至らしむるであらう。然らば人類を罪と死の奴隸下より救ひ出して、彼等に生命の道を指示する所の大預言者、祭司、王とは抑々誰なるか。

第三章　預言者、祭司　王

エホバは其の聖名と聖言の擁護を完成するの準備を進められつゝあり、此の目的を成就する爲に大能の代理執行者を用ひ給ふ事を豫告して置かれた。神は一個の預言者をしてエホバの權威を以て聖言を語らしめ、一個の祭司をしてエホバの代理執行者の長たらしめ、一個の王をして神の豫定の時至るに及びて義を以て全地を支配せしめ給ふ。人類の贖ひ主たり、救ひ主たる者が偉大なる征服者である以上、此の大能者が神の預言者たり、祭司たり、王たるの役目を兼任する事は當然である。

預言者としてのモーセの仕事が正に成し遂げられんとする時に、神は彼をしてイスラエル人に告げしめ、彼よりも偉大なる預言者の彼等の間より出現すべき事を示された。此の故に

彼はイスラエルに告ぐ、「汝の神エホバ汝の兄弟の中より我の如き一個の預言者を汝の爲に興し給はん。汝等之に聽く事をすべし……是に於てエホバ我に言ひ給ひけるは彼等の言へる所は善し。我彼等兄弟の中より汝の如き一個の預言者を彼等の爲に興し、我が言を其の口に授けん。我が彼に命ずる言を彼悉く彼等に告ぐべし。凡て彼が我が名をもて語る所の我が言に聽き從はざる者は我之を罰せん」（申命記十八章十五、十七—十九節）。

地上全人類は豫定の時至るに及びて此の大能の大預言者の言を聽く事となる。即ちエホバ御自身が地上全人類の上に自ら手を着け給ふ事となるのである。「活ける神の手に陷るは畏るべき事なり」（ヘブル書十章卅一節）。此の故に來らんとする此の大預言者は己自身の言を語る爲に來るに非ずして、全能の神よりの音信を語らんが爲に來り、至高き神の聖旨を人々に傳達し、其の聖旨の天に成る如く、地上に於ても其の民によつて成されん事を語り告ぐるのである。

神がモーセの「如き」大預言者として示してゐられる此の事實は即ち、此の大預言者の仕事と任務がモーセによつて爲されし任務と仕事に類似し、然かもそれが更に大仕掛けなるを意味してゐるのである。モーセの爲せし仕事の特色を列擧すると斯うなる、即ち、彼はエホバによつて「任命」された。神はモーセを擧用して其の民の「救濟者」たらしめられた。彼

は「律法を與ふる者」であつた。彼は民の爲の「教師」として彼等に神の聖旨を傳達した。彼はイスラエル人の「父」であり「慰むる者」であつた。而して之等の特色にも勝つて彼は神エホバの聖名と榮光の爲に立てられてゐた。モーセよりも更に大なるべき者は之と同樣の仕事をなすにしても、其の範圍はモーセの爲せしよりも遙かに大なるものである。神がモーセを埃及に遣されし主たる理由は『彼等（イスラエル人）を贖ひ、己の民となして、大なる名（御自身の爲に）を得たま』はんが爲であつた、（サムエル後書七章廿三節）。此の故に神がモーセよりも大なる者を遣はさるゝ主たる理由は己が民を贖ひ、神エホバの爲に一の聖名をなされんが爲である。聖書は神が或る少數者を救ひ上げて、昇天せしめ、神の事業を運轉する上に神を援助せしめ給ふと云ふが如き事は少しも示してゐない。

モーセによつて告げられし此の預言が既に實際的に成就して、聖書と實證が此の大預言者の既に到來せるを確實に立證してゐるとするならば、此の預言を成就せる者こそ即ち神エホバの偉大なる代表者であつて、彼の告ぐる言は絶對に眞實なるものであり、如何なる者も之に聽き從はなければならぬ事を明瞭に示してゐるのである。それと共に亦、それが牧師、神學者等の教職者たると否とに拘らずイエスの御言を否定する者は、確實に僞預言者であつて

彼の語り告ぐる言の悉くは嘘僞である。猶太人と異邦人とを問はず、地上全人類は若し彼等が神エホバの恩惠に浴せんとせば此の大預言者の命ずる處に聽き從はなければならぬのである。

成就

洗禮者のヨハネは一個の預言者であつた。彼は神の子イエス・キリストの到來を聲明した人であつた。猶太人の學者等はヨハネに來て、汝はモーセの預言に記されある預言者には非ずやと質問した。ヨハネは然らざる旨を答へると共に、彼の後に來る者こそ即ち彼が宣明してゐる處の大預言者であると彼等に告げた。イエスが顯はれて其の仕事を始めやうとされた時にヨハネは云つた、『我に後れ來らん者は我より優れる者なり、そは我より以前に在りし者なればなりと我が言ひしは此の人なり』（ヨハネ傳一章廿一、卅節）。

ヨルダン河に於てイエスが洗禮を受けられし時に神の聖靈は彼の上に降り、且つ天より聲あつて斯う告げた、『こは我が心に適ふ我が愛子なり』（マタイ傳三章十七節）と。ヨハネは此の力の大顯示を見たと證言した、（ヨハネ傳一章卅三、卅四節）。ペンテコステの時に使徒のペテロは、イエス・キリストはモーセによつて預言されし處の大預言者である事を聲明した、（使徒行傳三章十九—廿四節）。使徒パウロもイエスを以て彼の大預言者なる事を識別した、（ロマ書

一章一―三節)。新約書中にはイエス・キリストがモーセによつて預言されし處のその大預言者なる事を示す證言が甚だ多くある。イエスは一個の預言者として神の要求を滿たしたか、然り、イエスは總ての點に於て神の條件に合致した。イエスは神エホバの聖名によつて語つた。彼の言の全部は人々をして神エホバに來りて其の聖名を崇めしめ、又イエスの告げ給ひし多くの事は既に實現成就したのである。

イエスは神の代辯者としてエホバの聖名と權威とを以て語られた。「神昔は預言者等により、多くの分ち、多くの方法を以て先祖たちに語り給ひしが、此の末の世には御子によりて我等に語り給へり。神は曾て御子を立てゝ萬の物の世嗣となし、また御子によりて諸々の世界を造り給へり」(改譯ヘブル書一章一、二節)。イエスは常に其の父エホバの榮光を求めて、己自身の榮を求められなかつた、「我わが意を行ふことを求めず、我を遣しゝ父の意を行ふ事を求むればなり」(ヨハネ傳五章卅節)。「また我自ら何事をもなさず、唯我が父の教へに從ひて之等の事を言へるを知るべし……我は我が父を尊ぶ……我若し自ら榮をなさば我が榮は虛し、我を榮むる者は我が父即ち汝等の我が神と稱ふる處の者なり」(ヨハネ傳八章廿八、四十九、五十四節)。イエスは己が名を高めんとされし事は決してなく、常に神の聖名を高く崇められた。イエスの言を聽く者はイエスを信ずるに非ずして、その爲せる行爲によりて彼を信ずる

のであつた、(ヨハネ傳十四章十、十一節)。

新約書はイエスがエホバの眞理に對する證言をなす爲に神より遣はされし偉大なる教師であつた事を立證するの記錄を滿載してゐる。此の爲にイエスは生れて此の世に來たのである、(ヨハネ傳十八章卅七節)。イエスは神の聖旨の大指示者であつた。イエスは神の代辯者として未來に來らんとする諸事象に就て聲明されたが、之等の事はその成就を見るまでは諒解する事の出來ないやうになつてゐた。

其の再臨と世の終末に關するイエスの大預言はマタイ傳廿四章中に明記されてある。其の中に記錄されある事柄は一九一四年(大正三年)より實現し始め、今やその成就への途上に在る。イエスはエルサレムの沒落と猶太人の離散及び彼等の上に再び神の恩惠が復歸するに至る事等に就て預言された。此の預言の最初の部分は遙かの昔に於て既に成就し、其の殘りの部分は今既に成就への途上に在る。イエスは示して御自身が人間に對する偉大なる贖價として死なゝければならぬ旨を證言された、(マタイ傳廿章廿八節。ヨハネ傳十章十節。六章五十一節)。此の預言は確實に成就した、(ヘブル書二章九節。チモテ前書二章五、六節)。イエスは又、神によつて自身の死より甦らされる事、昇天する事、再臨する事を預言されたが之等の預言は皆確實に成就した。イエスの預言の多くは既に成就したが、尙ほその多くは今後成就を見る

事となつてゐる。我等が今此處に示さんとする處はイエスが神の預言者としての資格を各部の點に具備してゐられた事を立證し、又イエスがモーセの預言せる大預言者に該當する者なる事を明白にせんとするに在る。

モーセがイスラエル人を埃及より救ひ出せる贖ひ主にして救濟者なりし如く、大預言者イエス・キリストは地上全人類の贖ひ主たり、救ひ主たる者である。モーセがイスラエル人に對する立法者たりし如く、イエス・キリストも又地上全人類に對する偉大なる立法者たるべき者である。モーセがイスラエルの人々に對する教師なりし如く、イエス・キリストも地上全人類に對する永久の大教師となられるのである。モーセがイスラエル人を指導せる如く、イエス・キリストも地上全人類に對して永久の大指導者となられるのである、（イザヤ書五十五章四節）。モーセがイスラエル人に對して「父」たりし如く、イエス・キリストも地上全人類に對して偉大なる生命授與者となられるのである、（イザヤ書九章六、七節）。モーセがエホバの聖名の榮光の爲に立てられてゐた如く、此のモーセよりも偉大なるキリスト・イエスは神によりて立てられ、今より後永遠に至るまで神エホバの聖名に對する榮光と尊貴となり給ふ、（ピリピ書二章九―十一節）。之等の諸實證に見るもイエスがモーセによつて預言されし大預言者なる事は一點の疑ひなき所で、イエスによつて語られし言の全部はエホバより來れ

るものなるが故に、生きてイエスの言を聽く者は皆その言ふ所に服從しなければならぬのである。

祭司

神の祭司長はエホバの重なる役者として公式にエホバに奉仕する者である。「贖罪の口」に幕屋に關聯して行はれたる儀式は預言的儀式であつた。祭司が此の儀式を司つた。此の儀式を解說すると斯うなる、「エホバに依て任命されし大祭司長が來て、此の世の人々の罪の爲に和解を爲すの公式資格を以て神の御前に祭司としての奉仕をなす。完全なる一個の人間としての生命が罪人に對する身替り即ち代償物として獻げられ、之によつて人間を贖ふに必要なる實費が備へられて、此の贖價は豫定の時にエホバの御前に提出されなければならぬ」と。然らば此の祭物の仕事をなす祭司とは抑々誰か。神の證者なる使徒パウロは此の問に答へ、キリスト・イエスを以て神によつて任命されて忠信なる大祭司長であると識別してゐる、（ヘブル書三章一―六節）。實證は示してイエス・キリストは啻に此の地上に於て神の祭司たりしのみに止まらずして、今も尙ほ天界に於て祭司長たるの高き任務に奉仕してゐられる事を立證してゐる、（ヘブル書四章十五節。八章一節）。イエスは此の高き榮位に自らを任ぜしには非ずして神エホバよりの任命を受けて此の高位を取られたのである、（ヘブル書五章五、六節）。

毎年一回、贖罪の日に於てイスラエルの祭司長は獣類の生命を犠牲の祭物として献げし事によつて、預言的儀式を行つた。而して此の預言を成就する爲に神の偉大なる祭司長イエス・キリストは一度己が生命の血を献げて、人類の爲の贖價と罪祭とを備へられた。「今キリスト既に至れり、彼は來らんとする善き事の祭司の長にして、手にて造れる幕屋即ち此の世に屬ける所のものならぬ、愈りたる大なる全き幕屋により、羊、犢の血を用ひず、己が血を以て一度聖所に入りて永遠き贖ひをなす事を得たり、況して永遠き靈により、瑕なくして己を神に献げしキリストの血は汝等に活ける神を奉事せんが爲に死の行ひを去らしめて、其の心を潔むることを爲さらんや。キリストは眞の物の模型なる手にて造れる聖所に入らず、今より永く我等の爲に神の前に顯はれんとて眞實の天に入りぬ。若し然らずば彼は世の始めより以來屢々苦難を受くべきなり、されど己を犠牲となして罪を除かんが爲に今世の末に一度顯現れたり」（ヘブル書九章十一、十二、十四、廿四、廿六節）。

贖罪の日に於ける猶太人の儀式が預言的のものであつた事を立證する更に他の一證として猶太人の祭司はレビの支派より取られ、レビの祭司として呼ばれてゐたが、イエスはユダの支派より出でられたのであつて、此のユダの支派に就ては祭司の事は何も語られてゐなかつた。其處には更に他の祭司職が用意されてゐたが、此の祭司職は神によつて「メルキセデクの位の如き」祭司と呼ばれて居た、（ヘブル書七章十一―十七節）。之に關聯して使徒パウロは預言者の言を引用して斯く云ふ、「彼は父なく、母なく、系圖なく、生命の始めなく、亦終りもなし。神の子に象られて恒に祭司たりき」（ヘブル書七章三節）。

此の言に見るに、此の祭司職はレビの祭司の如く系圖によつて來れるものに非ずして、故に之には父なく、母もなしとあり。而して此の大能者の存在の開始に就ての記錄なく、又其の祭司職として終りも示されてゐないが故に、「生命の始めなく、亦終りもなし」である。此の故にレビの祭司職は大祭司長なるキリスト・イエスの仕事を預言的に示したものであつて、即ち實體的「贖罪の日」の其間内に於て大祭司長イエス・キリストによつて行はるゝ仕事を豫表したのであるが、此のレビの祭司職は大祭司長キリストの爲すべき他の仕事に就ては何等豫表してゐなかつた。

大祭司長キリスト・イエスと其の爲すべき仕事を豫示した預言が他にもある。アブラハムがロトを救つて凱旋した時に彼はメルキセデク王に迎へられた。此のメルキセデクはサレムの王であつて、之は平和の王と云ふを意味し、同時に至高き神の祭司であつたが、彼はパンと酒とを携へ出してアブラハムを接待した、（創世記十四章十八節。ヘブル書七章一節）。此の預言的事實は、至高き神の祭司として就任し、生命を以て地上人類を「接待」する一個の大能

者の到來する事を告げてゐるのである。イエス・キリストは此の預言を成就して至高き神の大祭司長となり、その永久的代理執行者となられたのであつて、此のイエスは人類に永久の生命を齎らされたのである、（ロマ書六章廿三節）。イエス・キリストは神の最高代理執行者として神エホバの爲に其の聖名によつて萬事を執行されるのである。之に就て斯く記さる、「萬物は父より生り、萬物はイエス・キリストに由る」（コリント後書五章十八節。コリント前書八章六節）。

王

メルキセデクに關する預言によつて見るに、此の大祭司長イエス・キリストは同時に偉大なる王即ち統治者たるの役目をも有する事となる。神はイザヤをして預言せしめて、大能者の來る事、義の政治の運用が其の肩上に置かれる事、其の王は地上人類に生命と平和とを與ふる事とを示された、（イザヤ書九章六、七節）。ヤコブの臨終の時、神は彼をして未來に來らんとする事を預言せしめられた。彼はその一部として斯く云つた「ユダは獅子の子の如し。我が子よ、汝は所掠物をさきて歸りのぼる。彼は牡獅子の如く伏し、牝獅子の如く蹲まる。誰か之を起す事をせん。杖（王權）ユダを離れず、法を立つる者其の足の間を離るゝ事なくしてシロの來る時にまで及ばん。彼に諸々の民從ふべし」（創世記四十九章九、十節）。

イエスはユダの支派より出で來り、「ユダの支派より出でたる獅子」（默示錄五章五節）と聖書によつて示されてゐる。預言者によつて斯く預告されたる大能者は人類に對して統治の權を有する大立法者であつて、恰もイスラエル人に對するモーセの如き者なる事が明かである。此のシロなる名稱は「平和の君」と云ふを意味す。預言者によつて「彼に諸々の民從ふべし」と示したる如く、彼は人類の統治者たるべし。イエスは此の預言の一部分を既に成就されたが、全體的には今や成就の途上にあるのである。

エホバはその預言者をして、全地に正當の王たるべき者の誕生地を豫告して置かれた、「ベテレヘム・エフラタ、汝はユダの郡中にて小さきものなり。然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我が爲に出づべし。その出づる事は古昔より、永遠の日よりなり」（ミカ書五章二節）。イエスが誕生されし時に此の預言は部分的に、若くは縮圖的に成就した。此の預言にある「其の出づる事は古昔より、永遠の日よりなり」の語は確實にロゴスを指してゐるのであつて、萬物はロゴスを通じて創造され、此のロゴスは肉體の人間となりて人の間に住み、全地の統治者たるべき者として生れたのである、（ヨハネ傳一章一―四節）。イエスは此の地上に在りし時に王たるべき者として膏そゝがれた、故に其の時彼は既に王であつた。然しイエスは其の時に統治者の役目には就かれなかつた。イエスは、そのピラトに向つて告げられし

如く、未來に於ける神の豫定の時至るまで待ち受けられなければならなかつた、（ヨハネ傳十八章廿六―廿八節）。預言者はイエスが王として就任さるゝ時に就て示して云ふ、『此の故に産婦の産みおとすまで彼等を付し置き給はん、然る後、その遺れる兄弟イスラエルの子孫とゝもに歸るべし』（ミカ書五章三節）。

此の預言はキリストの國が生れ、彼の統治が開始される時を示すものであるが、之等の事實は既に成就を見たのであつて、之に就ては後章に於て論ずる事とする。神は預言者を通じて未來の時に關して斯く示された、『然れども我わが王を我が聖きシオンの山に立てたり』（詩篇二篇六節）。此の預言は一九一四年（大正三年）に成就し始めたが其の證據は後章に於て提供する事とする。

此の故に確實なる預言的證言は示して、エホバが人類を贖ふ爲に備へられたる者は同時に神エホバの大預言者として、エホバの絶對權威を以て語ると告げてゐる。又彼は永遠に『至高き神の祭司』として其の任務に就く事が明かである。又彼は同時に全地に君臨する偉大なる王にして統治者たり、人類の福祉の爲に彼等を義を以て治むる事が確實であつて彼は神エホバの聖靈を以て膏そゝがれし時に、之等の高き位に任ぜられたのである。

『膏そゝぐ』とは或る者に權威を與へて其の位に於て任務を遂行せしむると云ふを意味す。

「キリスト」の名稱は「膏そゝがれし者」即ち「受膏者」との意味であつて、イエスは神より膏そゝがれし時にキリストの名を受けられたのである。其の時以後イエス・キリストは「預言者」、「祭司」及び「王」の名稱を正當に受けられたのである。「メシヤ」の名稱は亦「受膏者」と云ふを意味す。神は預言者を通じて示し、「君なるメシヤは斷たれん、されど己の爲に非ずして」と預言し置かれた、（ダニエル書九章廿五、廿六節）。此の預言はイザヤの示した所の、人間の爲に贖價を備ふる爲に己が生命を死に付すべく自ら注ぎ出だしたる者に關する預言と一致してゐる、（イザヤ書五十三章八、十二節）。イエスは此の預言を成就された、何故なればイエスは受膏者であり、メシヤであつて、己が爲ならずして人類の福利の爲に己が生命を死に付すべく注ぎ出されたからである。

神エホバがイエスを死より甦らせ、彼を天界の高き位に引き擧げられた時にイエスは贖ひ主となり、罪の爲に和解を爲す者となられたのであつて、其の時イエスは「預言者」、「祭司」及び「王」の稱號を確實に己が有とされたのである。

其の時にイエスは地上に於て即座に義の政治を樹立し、大敵サタンに對する行動を開始して、彼を此の世の支配者たる權威の位より放逐し、エホバの聖名を擁護して地上全人類に服從を命ずるの權威と力とを保有された。其の時が若し神の豫定の時であつたならば、之を即

座に實行する事はイエスの喜びとされた處であるが、然し其の時は未だ神の豫定の時が到來してゐなかつた。故にエホバは預言者ダビデを通じて斯く預言して置かれた、『エホバ我が主に宣ふ、我なんぢの仇を汝の承足（足臺）とするまでは我が右に坐すべし』（詩篇百十篇一節）。使徒パウロは此の預言の成就せるを示して云ふ、『然ど此の人（イエス）は一度罪の爲に一の犠牲を献げて窮りなく神の右に坐し、其の敵を足臺となさん時を待てり』（ヘブル書十章十二、十三節）。

上記預言の意味を以て、イエスは「坐せ」と神より命ぜられた時に、拱手してボンヤリと無爲に坐してゐたと見る事は出來ないのであつて、即ちイエスは其の敵なるサタンに向つて行動を開始し、彼を天界より放逐して義の政府を建設し、父なる神の聖名を擁護すべき神の豫定の時まで待たれたと云ふ事を意味してゐるのである。其の間を通じてイエスの爲すべき仕事は多くあつた。イエスは人間として其の地上に於ける任務の正に終らんとする時に弟子等に向つて斯く告げられた、『我が父の我に任ぜし如く、我も汝等に國を任すべし。これ汝等我が國に於て我が案（食卓）に食ひ飲みし、且つ位に坐してイスラエルの十二の支派を審判かんが爲なり』（ルカ傳廿二章廿九、卅節）。斯くの如くイエスは己が忠信なる追隨者（その弟子及び同じくキリストに追隨する忠信者）はキリストの王國に參與すべしとの預言を示されたのである。

之と略同時にイエスは其の弟子達に向つて又斯う告げられた、『我汝等の爲に所を備へに行く、若行きて我汝等の爲に所を備へば又來りて汝等を我に納くべし。我が居る處に汝等をも居らしめんとてなり』（ヨハネ傳十四章三節）。之も又預言であつて、其の意味はイエスが再臨して其の御國を建設さるゝ時まで其の追隨者から隱されてゐた。而して今、此の預言は部分的に既に成就を見、又成就への途上に在り、己が全部を神に献げてゐる者は之を諒解する事が出來るのであつて、又事實これを諒解したのである。而して、諸々の預言は贖ひ主にして偉大なる預言者、祭司及び王たる者に就て預言し、之等の預言が既に成就し、又今成就への途上にあるを悟り知る時に神エホバを愛する者の信仰を確立すべく充分の證據が與へられるのである。エホバが神に己の全部を以て献ぐる人々の爲に之等の預言を記述せしめて置かれたと云ふ此の事實は即ち、神の豫定の時至るに及びて之等の預言を諒解する事を許さるゝを示す充分の確證である。

第四章　諒解の時

エホバは其の御豫定の時至るに及びて御自身とその御目的とを顯はし給ふ。故にエホバの預言はそれを諒解すべき豫定の時至る迄は之を悟り知る事が出來ないのである。其の豫定の時至る以前に試みられたる説明は要するに單なる想像談議に過ぎないのである。神は神に献身せる人々が豫定の時至る迄に之を諒解せんと探し求むる事を嘉納さるゝに相違ない。眞理を探求せんと努むる彼等の態度は常に彼等を神との一致に保ち置くからである。天界の聖き天使等も之を知らん事を求めたが神は此の爲に彼等を拒絶されなかつた。此の事實は神が眞理を探し求むる者を嫌忌されないと云ふ事を明かに示してゐる。神の預言を諒解し得るの度は、それが成就に進み、展開し行くに從つて增加するのである。此の故に今日に於て預言の

一部を諒解し得る者は後に至りて更にそれを明かに見る事が出來るのである。「義しき者の道は旭光の如し。愈々光輝を增して晝の正午に至る」（箴言四章十八節）。それと共に預言の成就は一度のみに限られてゐないと云ふことも事實である。預言は或る期間少量の部分成就して後に全部的に大きく成就する事あるは瞭かである。

多數の研究者は甚大なる誤信に陷りて、神は預言を説明せしむる爲に特に或る人々を靈導されると考へてゐる。舊約書中の聖き預言者等は彼等の上に働く神の力によつて靈導されて記述した。新約書の記者は神の指揮下に記述すべき或る力と權威を衣せられて之を記述した。然し使徒時代以後に於ては預言を記述すべく、又預言を解明する爲に何人も神の靈導を受けた者は無いのである。使徒ペテロは力説して云ふ、「汝等先づ知れ、聖書の預言は、すべて己がまゝに釋くべきものにあらぬを」（改譯ペテロ後書一章廿節）と。此の解明は豫定の時至りて神より來るのである。神の豫定の時至るに及びて實證が發生し、神に己を献ぐる者は之等の實證が預言の成就せるものなるを知り、斯くして預言を諒解するのである。眞理は人間やその他の被造物に屬するものではない。神の言は眞理である。神は其の御豫定の時至るに及びて神に己を献ぐる者の前に之等を明かになし給ふのであつて、それ以前には決して示し給はないのである。

イエスは其の忠信者に向つて斯う云はれた、『彼即ち眞理の靈の來らん時、汝等を導きて凡ての眞理を知らしむべし。また來らんとする事を汝等に示すべければなり』（ヨハネ傳十六章十三節）。神の聖靈はペンテコステの時に之等の弟子たちに與へられた。其の時以後彼等は神の聖靈の指導下に語り且つ記述する事となつたのである、（使徒行傳二章四節）。主は來らんとする事を彼等に示された、故に彼等の或る者は預言をなしたのである。使徒に後繼者があるとは聖書に少しも示してゐない、故に之等イエスの弟子即ち使徒たちは神の聖旨に一致して、諒解し、且つ語るの特殊任務を神より與へられてゐた事を確かに知る事が出來るのである。此の時彼等の或者は他に語り告ぐる事を許されざる諒解の多くを與へられたに相違ない。現にパウロは神より一の異象を示され、又言を聞いたが、之を語り告ぐる事を許されないと告げてゐる、（コリント後書十二章四節）。聖書の示す處によると、使徒の時以後、他に語り告ぐる事を許されざる異象を受けたる者は絶無となつてゐる。イエスの御言によるも、その使徒たちすら豫定の時至らざれば神の御目的を諒解するを許されなかつた事が明かである。

イエスはその弟子たちに又示された、『今その事の成らぬ前に之を汝等に告げたり。事の成らん時汝等の信ぜん爲なり』（改譯ヨハネ傳十四章廿九節）。之ぞ預言を諒解する事に對する元則の明示であつて、即ち「其の事が成つた時に汝は之を信じ諒解し得べし」と示されてゐるの

である。以上の御言中の「汝等」とあるは弟子達を指してゐるのであつて、之は神エホバに己を献げてゐる者に限られてゐるのである。人は若し神の言を諒解せんとするならば、先づ眞摯と誠實を以て己を主に献げなければならぬ、「エホバの親交はエホバを畏るゝ者と偕に在り。エホバは其の契約を彼等に示し給はん」（詩篇廿五篇十四節）。

使徒等は神の指揮の下に其の當時の教會を組織した。當時の教會の成員の爲に使徒たちの書簡が遺られて彼等を指導したが、然し之等の書簡は世の末に於ける教會の成員を援助し、慰め、彼等をして神の御目的を諒解せしめんが爲に特に書き記されたるものである、（ロマ書十五章四節。コリント前書十章十一節）。使徒等の死後、教會の上には忽ち暗黑の時代が到來した。之は長期間に亘る暗黑の時代であつて、普通に「暗黑時代」と稱されてゐる。此の長期間を通じて神の御目的を顯示すると云ふ點に於ては、主の御顏は「教會」と呼ばれたる組織制度からは全く背けられてゐた。此の暗黑時代は少くも第三世紀より第十九世紀まで繼續した。此の期間を通じて地上に於けるキリストの眞の追隨者は極めて少數であつた。キリスト・イエスの追隨者なりと稱する者は多數あるも、忠信にして眞實なる者は極めて少數である。イエスが「麥」と「稗子」とが同時に並び育つとの譬を以て語られた處の眞僞兩樣のクリスチヤンの生育したのは即ち此の期間であつた。イエスは示して之等兩種は世の末まで共に並び生育す

ると告げられた、（マタイ傳十三章廿四、廿、廿九節）。斯く共に並び育つ時に、キリストの眞の追隨者は僞物によつて甚しく邪魔にされた。教會内の教師等は我利私慾の連中であつて、彼等は政治的勢力と個人的賞讃を得る事に沒頭した。敵なるサタンの感化の下に彼等は眞理を頗る朦朧曖昧なるものとなして了つた。

神エホバより權威を受けたる大預言者イエスはその弟子に向つて斯く示された、『行きて我汝等の爲に所を備へば、又來りて汝等を我に納くべし』と。此の故に再臨は即ち神の言を更に善く諒解し得るの時の開始を意味してゐるのである。之に一致して使徒ペテロはペンテコステの時に斯う預言した、『是故に汝等罪を悔ひ、心を改めて其の罪を消さるゝ事をせよ、そは主（エホバ）の前（御顏の前）より安舒日（爽快ならしむる時）の來り、且つ豫めさだめ給ひしイエス・キリストを遣られんが爲なり。神の古昔より聖き預言者等の口に託りて言ひ給ひし萬物の復興せん時まで天は必ず彼を受け置くべし』（使徒行傳三章十九―廿一節）。使徒ペテロは此處で主の民を爽快ならしむる時の到來する事を明示してゐるが、此の時こそ即ち主イエスの再臨の時である。

之は別にイエスが親しく此の地上に其の身を以て來られると云ふ譯ではない。イエスには距離は問題とならない。イエスは今神性の靈者に在して、其の御力は無限であり、何處に其

の身を置かるゝも、遠隔の所に仕事を爲さるゝは極めて容易である。天地の全權を衣せられ給ひし主イエスは教會の全般の上に其の仕事をなし給ふ。使徒ペテロの此の言は其の豫定の時至るに及びてキリスト・イエスはエホバの神命に一致して行動し、獻身者の上に仕事を始め、彼等に「爽快」を與へ給ふ事を示してゐる。然らば其の爽快とは如何なる性質のものか。

使徒ペテロは「復興」と云つたが、之は取り去られ、隱されてゐたものが回復される事を意味するのであつた、即ち「暗黑時代」を通じて隱されてゐた眞理をも其の中に含んでゐるのである。イエスは或る時、「エリヤは先づ來りて萬事を復興せん」（マタイ傳十七章十一節。日本譯譯には「改む」とあるも之は「復興」の誤譯なり。尙ほ永井氏譯を參照せよ）と告げられた。エリヤは神の預言者であつて、其の當時に於て復興の仕事をなし、神に關する事とイスラエル人と神との間の關係に就ての知識を彼等の上に復興した、（列王記略上十八章 卅九節）。彼の爲せし仕事は一の預言であつて、即ち神が其の民に眞理を回復し復興さるゝ事を豫示してゐたのである。エリヤの死後に、預言者マラキは預言して、神は主の大なる恐るべき日の來る前に先づ預言者エリヤを遣られんと告げた、（マラキ書四章五、六節）。此の預言こそ即ち他の者がエリヤの爲せし仕事と同じ事を更に大きく、更に重要なる意味に於て行ふ事を示してゐるのである。

イエスによつて示され、又使徒ペテロによつて語られた處の此の萬物復興の仕事は暗黑時

代を通じて隠されてゐた眞理を神の民に回復するの仕事を以て開始されなければならぬ。此の復興事業はイエス・キリスト再臨在の顯現中に漸次進展して行くのである。故に預言を諒解するの日は主イエス再臨在の顯現の時に來るのであつて、爾後此の諒解は益々明瞭になり行くのである。

聖書的實證は示して主イエス・キリストの再臨在は一八七四年を以て始まつたとなつてゐる。此の事に就ては萬國聖書研究會より發行してゐる書物冊子に明記されてあるが、此の再臨に關聯して三種の異つたギリシヤ原字が使用されてゐる。之等の三種とは即ち parousia（マタイ傳廿四章三節）即ち「臨在」を意味する字と、epiphaneia（テモテ後書四章一節）即ち「臨在」と增し加はる光を以て照り輝く」と云ふを意味する字と、apokalupsis（默示錄一章一節）即ち再臨在と增し加はる光輝によつて遂に「露出」若くは「露顯」にまで至るべき事を意味する字の三種である。斯くの如く主イエスの臨在を通じて預言の開披が漸次進展し行く事が示されてゐる。之ぞペテロの謂ふ所の「安舒日」即ち「爽快ならしむる時」であつて、此の「爽快」は神の聖書の忠實なる研究者の福利の爲に與へられた、何故なれば神は其の御顏を彼等に向けられ、キリスト・イエスは其の再臨在を彼等に顯示し、彼等の爲に奉仕さるゝからである。

イエス・キリスト再臨期間を通じて、神の言の基礎的眞理の復興事業が漸次的に行はれ

る。此の故にエリヤの仕事によつて示されし預言は、神の御目的に關する偉大なる基礎的眞理の全部が復興さるゝ期間を敎示してゐたのである。此の預言は既に成就した。再臨の時までには諒解さるゝ事の少かりし三つの基礎的大眞理が特に明瞭となつた。其の基礎的三大眞理とは即ち、贖價の犧牲の眞理と、キリストと其の「體の成員」に關する神の奧義の眞理及びキリストの統治下に於て人類が復興される眞理である。

基礎的眞理の復興そのものは、預言全部の開披と諒解を意味してゐない、何故なれば預言は之までに決して諒解されてゐなかつたからである。曾つて一度も存在せず、又諒解されざりしものを「復興」する事は絕對不可能である。使徒等が以上示せる諸々の基礎的眞理を諒解してゐた事は無論である。それと共に彼等が預言の多くを當時諒解してゐなかつた事も亦確實である、何故なれば彼等がそれを諒解すべき豫定の時が未だ來てゐなかつたからである。特に之等の眞理中の一なる主イエスの再臨在に關しては、誰も諒解する事が出來ないとイエスは示してゐられる、（マタイ傳廿四章卅六節）。此の故に萬物の復興が預言の解明を意味してゐるに非ざるは瞭かである。

預言の研究者が特に留意して置かなければならぬ方則は、預言はキリストの追隨者がそれを悟り知る以前に於て既に成就の途上にあると云ふ事で、追隨者等は己れが主によつて使は

れてゐると云ふ事を知らざる間に其の預言を成就する仕事の一部に用ひられてゐる事が屢々あるのである。而して其の成就が進んだ時に神は之を彼等に示し給ふ。眞のクリスチャンは信仰によつて神の聖旨に一致せる道に己が最善を盡して精勵す、然る後に神は彼が神によつて使用されてゐた事を彼に示し給ふ。神はクリスチャンを勇氣附け、彼の信仰を增し强めん爲に之を爲し給ふ事が明瞭である。

預言の解釋に就ては今日迄に多くの人々によつて記述されたが、多數は之を以て眞實であると考へてゐた。しかる後に之等の解釋が誤つてゐた事を見出した時に、彼等は忽ち失望落膽して直ぐ聖書の研究より離れ遠ざかつて了ふ。之ぞ一般の陷る過失である。若し我等が眞理は神に屬するものであつて、人間に屬するものに非ざるが故に何人と雖も之を勝手に解釋するを許されず、唯主の眞の追隨者はそれが成就せる後か又は成就の途上にある時に於てのみ諒解するを許されると云ふ事を常に心の中に留めて置いたならば、我等は此の點に於て少しも失望落膽するの必要がないのである。然る時に彼は光榮と尊敬の全部を神エホバに獻げて、之を如何なる人間にも獻げないのである。エホバには過失をなす事が絶對不可能である。研究者が人間に依り賴んでゐる時に彼は必ず困難に逢着すべく、彼が神に依り賴んでゐる時に彼は必ず完全なる平安に置かれるのである、（イザヤ書廿六章三節）。

道の準備

神の大預言者なるイエス・キリストは己が再臨を預言された。此の預言の成就は神の御目的の如何なる部分よりも卓出したるものである。他の者を己が「祭物の契約」中に取り入れて最後に於て王國に參與せしむるの準備を進むる爲に、主イエスが其の再臨に際して彼等の爲に或る特殊の仕事をなされると云ふ事は當然である。彼等は眞理を復興させられて、主イエスの再臨在と神の聖旨を爲す事を悟り知らされなければならぬ。彼等は主が彼等をして爲さしめられんとする仕事に準備される爲に聖書の知識を得なければならぬ、（テモテ後書三章十六、十七節）。主は其の教會を組織された時に、己が學びし處の眞理を知らんと願ひ求むる他の者に傳達する者を備へ、斯くして教會の成員は相互に援助し合ふの方法を準備された。神は此の奉仕をキリスト・イエスの忠信なる追隨者に與へられた。敵なるサタンは之を妨害して、人々の心を神より離反せしめやうと企てた事は無論である。

「暗黑時代」を通じてサタンは人々を盲目ならしむる爲に特に教職者を使用したが、その爲に大多數の者が不忠信となり、眞理の全部に盲目となつて了つた。不正直なる教職者即ち牧師、傳道師、神學者等は教會の中に於て自他の人間を大ならしむるに努め、斯くして神エホバと主イエス・キリストを人々の眼から隱して了つた。サタンは此の方法に於て彼等を己

が器として用ひたのである。神の豫定の時至るに及びてキリスト・イエスは遣られ、「爽快の時」が其の忠信者の爲に開披された。心直き者は眞理によつて「安舒」を得、爽快ならしめられ、他の人々を敎へて、彼等をして主イエス・キリストの再臨在と其の御國を諒解せしむべく準備する爲に用ひられたのである。此の眞理の奉仕は使徒等に與へられたのであつて、其の他の正直なるキリスト・イエスの追隨者は皆他の人々に光を齎らすべく何等かの機會を與へられたのである。絶えず神を喜ばし奉る爲に、彼等は正直にして、神の眞理、特にキリスト・イエスによる救ひの道に就て宣べ傳ふる事を繼續しなければならぬ。

使徒パウロは斯く云ふ、『我等恩慈を蒙りて此の職を受けたれば敢て臆せず、耻づべき隱匿れたる事を捨てゝ惡しきたくみをならず、神の道を亂さず、眞理を顯はして神の前に己をすべての人の良心に質すなり。我等の福音若し隱るゝならば、滅ぶる者に隱るゝなり。此の如き人は此の世の神(サタン)その心を盲ましたる不信者なり。之神(エホバ)の像なるキリストの榮の福音の光をして彼等を照らさゞらしめんが爲なり。我等は自己の事を宣ぶるに非ず、唯キリスト・イエスの主たる事、又我等イエスによりて汝等の僕たる事を宣ぶるなり。光に命じて暗より照り出でしめたる神、我等をしてイエス・キリストの面にある神の榮光を知るの光を顯はさしめんために我等の心を照らし給へり。我等この寶を土の器に藏てり。これ大

いに優れたる能は我より出づるに非ず、神の能力なる事の顯はれん爲なり』(コリント後書四章一—七節)。此故に眞理を諒解する事が敎會に復興されたる時に最も必要なるは正直なるべき事である。眞理の中に止まり、主イエス再臨の光輝の道に進まん事を願ふ者は、光榮と尊敬とを神に歸すべきであつて、決して人間に歸してはならないのである。之ぞ即ち準備の仕事である。

エホバは其の預言者を通じて此の準備の仕事に就て預言して置かれた、『視よ、我わが使者を遣はさん。かれ我が面の前に道を備へん。また汝等が求むる所の主、即ち汝等の悅ぶ契約の使者忽然その殿に來らん。視よ、彼來らん、と萬軍のエホバ言ひ給ふ』(マラキ書三章一節)。神の預言者にして、神の權威を有する代辯者なるイエス・キリストはエホバの此の御命令を執行する處の偉大なる「使者」である。此の神命は聖書中に「エホバの前に道を備ふる仕事」として現はれてゐる。神エホバの前に道を備ふる此の仕事の中には基礎的眞理を復興し、心の直き眞理の探求者を集合して神の言を相共に學ばしめ、彼等を敎へ援けて互ひに聖き信仰を以て築き上げしむる事が抱含されてゐる。之ぞ即ちイエスの示されし「エリヤ先づ來りて萬事を復興せん」の預言に該當せる仕事である。預言者エリヤは神に關する或る知識をイスラエル人に復興するの預言的仕事を爲したが、之はキリスト・イエスの爲さゝ所のそれを預

言したのであつて、キリストの「體」に屬する忠信なる成員も此の仕事の或る部分に參與するのである。

エリヤの仕事によつて豫表された此の復興の仕事は一八七八年頃から始まつて一九一八年（大正七年）まで繼續した。此の期間を通じて、主キリスト・イエスの再臨在と偉大なる贖價の犧牲、神の奥義及び地上全人類の最後の運命に就ての福音が地上に在る眞理探求者の間に於て特に敎へられた。此の期間こそ即ち大眞理を諒解するの時であつて、彼等は其の時に至るまで之を決して諒解しなかつたのである。眞理の異象は此の期間の開始以後漸進的に增し加はつた事は確實である。然し此の期間中には神の眞理の多くは未だ顯示されなかつた、何故なればそれは未だ神の豫定されし時でなかつたからである。

其の時に顯示されたのは神の救の御目的に關する十個の基礎的大眞理であつた。既に成就せる預言を諒解する事は敎會に許されたるも、然し成就せず、又成就を開始せざりし預言は諒解する事を許されなかつた、何故なればそれが未だ神の豫定の時でなかつたからである。エホバの御前に道を備ふるの仕事は、前に述べたる定義の意味に於てキリスト・イエスの Parousia より始まり、Epiphaneia の前までに行はれた。

再びマラキの預言に就て見るに、「エホバの使者」がエホバの前に道を備ふるの仕事を終る

と共に何事かゝ發生するは容易に看取さるゝ所であつた。之に就て預言者は斯く記してゐる、「また（其の時）汝等が求むる所の主即ち汝等の悅ぶ契約の使者忽然その殿に來らん。視よ、彼來らんと萬軍のエホバ言ひ給ふ」（マラキ書三章一節）。一九一八年迄の忠信なるクリスチヤンは主が地上に於ける敎會の仕事を完成して、彼等を天の榮光に取り擧げられん事のみを待ち望んでゐた。彼等は神の御目的を更に善く諒解し始めた、そして其の理由は主イエス・キリストが突如として其の殿に來られたからである。

殿

此の故に神の殿とは何か、主イエス・キリストが其の殿に來られたとは何を意味するか、と云ふ事を知るは甚だ重要なる事である。「それモーセは將來に言ひ傳へられんとする事の證をせんが爲に僕人の如く神の全家に忠義をなし」、又キリスト・イエスは神の子の家の首位である、（ヘブル書三章五、六節）。神の殿の別名は「子等の家」と呼ばれる。神の殿は神の受膏者によつて形成され、イエス・キリスト自らそれの「隅の首石」たり、その忠信なる「體」の成員は他の「活ける石」を形成す、（エペソ書二章十八―廿二節）。使徒は之に就て更に示す、「それ汝等は活ける神の殿なり。神曾つて我彼等の中に住り、且歩まん。我彼等の神となり、彼等我が民とならんと云ひ給へり」（コリント後書六章十六節。コリント前書三章十六節）。主イエスが其の殿

に來られると云ふ事は即ち神の殿に在る者等によつて特殊の諒解が爲し始められる時であつて、諸々の實證は示して之が事實なるを裏書してゐる。

教會の「新婦」級の者がその來るを忠實に待ち受けてゐた所の者は「新郎」イエス・キリストであつた。之はイエスによつて示されし「智き處女」に關する譬によつて見るも明瞭である、(マタイ傳廿五章一—八節)。キリスト・イエスが「エホバの御前に道を備ふるの仕事」をなしてゐられた全期間を通じて其の眞に忠信なる追隨者たちは何れもイエスが來て、其の御約束の如くに主の御許に寄せ集められん事を熱心に待ち受けてゐた、彼等は喜んでイエスの來られるのを待ち受けてゐた、何故なれば彼等はイエスを喜び愛する者であるからである。之等の者こそ預言者マラキによつて示されし所のエホバの使者を喜ぶ處の者であつた。彼等は「處女」と呼ばれる、何故なれば彼等は純潔にして汚されず、主に全き信賴を捧げてゐるからである。教會はキリストに「婚約」されし純潔なる處女を以て譬へられてゐる、『我神の熱心の如き熱心を以て汝等を念ふ。我汝等を一人の夫に婚約せり、之汝等を潔き女としてキストに獻げんとするなり』(コリント後書十一章二節)。之等の者は「智き處女」である、何故なれば彼等は熱心に神の言の眞理を求めて、それに服從するからである。『智慧ある子は父の教訓を聽く』(箴言十三章一節)。彼等は神の子である、何故なれば彼等は其の生命を神より受けるか

らである。之等の者は智き處女と呼ばれる、何故なればキリストの新婦なる教會は純潔なる婦として表象されてゐるからである。

「燈火」は神の眞理の御言を象徴す、『汝の聖言は我が足の燈火、我が路の光なり』(詩篇百十九篇百五節)。『エホバ、汝は我が燈火なり。エホバは我が暗きを照らし給ふ』(サムエル後書廿二章廿九節)。『我が受膏者の爲に燈火を備へたり』(詩篇百卅二篇十七節)。主イエスは其の再臨在の時と「智き處女」等が爲すべき事に就て斯く示し給ふ、『此の童女(處女)ども皆起きて其の燈火を整へたり』(マタイ傳廿五章七節)。燈火を整へるとは、それを更に明るくして、更によく事物を見るの便宜を得んが爲である。此の故にイエスの言は、忠信者は直ちに聖書を熱心に探し始めて、神の言の上に更に大なる光を得んと努むる事を意味してゐる。故にイエス・キリストが其の殿に臨まるゝ時に智き處女級は殿の狀態に入れられて、神の言を更によく諒解すべく照射されるのである。

イエスは神より膏そゝがれて地上に於ける神の國建設の宣明を始められてより三年半の後、エルサレムに入城して自らを王として猶太人に提供し、直ちに殿即ちエルサレムにあつた「神の家」に入りて之を潔められた。神エホバは一九一四年(大正三年)に其の受膏者キリスト・イエスを王として王座に擁立された、故に此の時はキリストが王としての權威を執られ

たる時である。それより三年半後、即ち一九一八年（大正七年）に主キリストは殿即ち「神の殿」に臨まれた。主が其の殿に臨まれし目的の一つは、預言者マラキによつて示されある如く、殿級の狀態に在る者に對して、神の御目的に就ての更によき諒解を與へんが爲であつた。此の故に此の時は神の預言に就て更に明瞭なる諒解を得る時であつた、何故なれば之は神の豫定の時であつたからである。

之に就て預言者マラキは更に云ふ、「彼は銀をふき分けて之を潔むる者の如く坐せん。彼はレビの裔を潔め、金銀の如く彼等を潔めん。而して彼等は義を以て献げ物をエホバに献げん」（マラキ書三章三節）。聖書中に在る銀は眞理を表象す。故に主は其の殿に臨まれし後、眞理を潔められるのであつた、即ち殿級の者に向つて更に明かなる異象を示し給ふ事となつてる。此の故に一九一八年以後、キリストの眞の追隨者は特に預言に關して從前にも遙かに增して明かなる諒解を得たと期待するのは當然である。而して實證は示して此の事實の成就せるを示してゐるが之明かに此の預言の成就である。殿級の者は唯彼等を天に取り上ぐる爲のみに主イエスが來られしに非ずして、彼等が天の榮光に取り上げられる以前に於て、先づ此の地上に於て何をなさなければならぬかと云ふ事を明かに悟り知つた。此の故に主イエスが其の殿に臨まれし事は諒解の時の開始を意味してゐるのである。

イスラエルの祭司等はレビの支派より取られたが、之は「王なる祭司」が神エホバに献身せる者の中から取られる事を預言的に示してゐるのである、（ペテロ前書二章九、十節）。預言者マラキは示して、主イエスが其の殿に來られる時に、イエスは「レビの裔を潔め、金銀の如く彼等を潔めん」と告げてゐるが、之は主が其の殿に臨むと共に「祭物の契約」に入れられたる者と會計して彼等を潔められるのであつて、其の時に承認を受けた者が顯はれ出づべく、彼等は神の御目的に關する更に明かなる諒解を與へられ、喜び勇んで神の聖旨をなすのである。此の故に一九一八年以後、此の潔めの仕事が開始されし時に、眞の追隨者にして主の承認を受けたる者は神の言の上に更に善き諒解を得べきも、承認を受けざりし者は神の言に對して更に明かなる諒解を得なかつた譯である。實證は示して之は一九一八年に續いて發生したる確かな事實であるを立證してゐる。或る者は躓いて主と其の仕事を捨て去つた。他の者は試練を受けし後、預言と神の聖旨に關する更に明かなる諒解を得て非常に歡喜した。神の受賞者が「義の外服」と「救ひの衣」の意味を知らされて感謝したのは即ち一九一八年以後であつた。

神は預言者をして斯く記さしめられた、「我はエホバを大に喜び、我が靈魂は我が神を樂まん、そは我に救ひの衣を着せ、義の外服を纏はせて、新郎が冠をいたゞき、新婦が玉黃金の

飾を着くるが如くし給へばなり』（イザヤ書六十一章十節）。一九一八年以後、『智き處女』級の者は此の『義の外服』はエホバの承認を意味する事と、『救の衣』は之等承認を受けたる者が神に嘉納されて、聖旨を爲すべく熱心に努め勵みつゝある狀態を意味する事とを悟り知り始めた。彼等は之を悟つて大いに歡喜し、引き續き義の外服の下に包まれて、此の歡喜を持續しつゝあるのである。此の時以後、多くの預言が彼等の前に開かれ始め、之等受膏者は益々明かなる異象を得、主に在る彼等の歡喜は繼續した。

世の末とそれに續いて何事が發生するかと云ふ事に就て以上の預言に一致したる他の預言が、神エホバの大預言者イエス・キリストによつて示された。即ち云ふ『此の世の諸々の國は我等の主及び主のキリストの屬となれり。キリスト世々窮りなく之を治め給はん』（默示錄十一章十五節）。之即ち、エホバが其の愛子を王座に擁立されたと云ふ事を示す預言者の言（詩篇二篇六節）に全く一致す。之に關聯してイエスは更に斯く預言された、『諸々の國の民怒りを懷けり、汝の怒りも又至れり』（默示錄十一章十七、十八節）。一九一四年に諸國は怒りを發して、世界大戰が勃發し、四年間繼續して一九一八年に終結した。此の世界大戰と之に關聯したる諸々の出來事は主イエスがマタイ傳廿四章七—十節に示されし預言を完全に成就せるものである。此の一九一八年に主キリストは其の殿に臨まれた、『時に神の殿天に開け、殿の中に

神の約束の櫃見ゆ。又閃電と聲と迅雷及び地震と大なる雹とありき』（默示錄十一章十九節）。

神の殿はエホバより承認を受けし殿級の者に開かれた、故に彼等は天界の事に就て更に善き諒解を得始めたのである。此の時以後、殿級の者は今迄に少しも知らなかつた預言の多くを諒解するやうになつた、何故なればこれが諒解すべき神の豫定の時であるからである。主の示し給ひし電光の照射は神の眞理の解明を意味す。而して之が殿級の者の上に照射さるゝ時に、彼等は神の御目的を更に善く諒解し始めるのであつた。之ぞ epiphaneia 即ち主の再臨在と光輝の增し加はるを意味す。此の光輝の增進は apokalupsis 即ち神の國に關する神の御目的が露示さるゝ時まで繼續するのである。

イエス・キリストは己が再臨在と世の末と、己が殿に臨まれる事に就て斯う示された、『其の時人の子の兆天に顯はる』（マタイ傳廿四章卅節）と。一九一八年、即ち主キリストが其の殿に來られし時より後、人の子の兆が天に顯はれて此の預言を成就したが、然らば其の兆とは抑々何なりや。

第五章　神の組織制度

エホバは其の大預言者イエス・キリストをして之等の預言を記述せしむる爲に一の默示を與へられた。「此處に大なる異象天に現はる。一人の婦あり、日を着、月を足の下に踏み、首には十二の星の冕を戴けり」（默示錄十二章一節）。此の預言に示されたる異象はマタイ傳廿四章卅節のイエスの預言に示されたる異象と同一のものであるは確實である。此の「異象」にしても又マタイ傳廿四章卅節の「兆」にしても共に同一のギリシヤ原字より來てゐる。同時に此の異象は主キリスト・イエスが其の殿に臨まれて、殿が開かれる迄は見る事の出來なかつたのも事實である。兆即ち異象とは一の事實を建つる目的の爲に與へらるゝ證據と云ふを意味す。「大なる異象」即ち兆は預言の成就の上に何等か必要あるものである。此の異象が天界に見えたと云ふ事は即ち、天界に關する異象を示されし者が之を諒解すると云ふ事を意味してゐるのである。

エホバの御仕事には完全なる秩序が保たれてゐる。エホバには混亂が絶無である、（コリント前書十四章卅三節）。エホバは最初より最後迄の事を知悉し給ふ、故にエホバの御仕事は完全なる秩序を保つて、豫定の時にそれ〴〵の成就實現を見るのである。エホバは其の最初の預言に於て示し、エホバの御目的を完成する處の「裔」が「婦」より出づる事を告げられた、（創世記三章十五節）。此の預言はエバと彼の女の子に適用されるのではなくして、「婦」によつて表象されたる何者かと、其の子即ち「裔」を代表するものであるは確實である。聖書は明示して「裔」とは「基督」即ち神の受膏者であると敎ふ、（ガラテヤ書三章十六、廿七、廿九節）。此の「裔」に關聯して「上に在る處のエルサレム（都）は我等の母なり」（ガラテヤ書四章廿六節）と明記されてある。地上に於けるエルサレムの都は天に在る神の組織制度を表象してゐる。此の故に「婦」は神の組織制度を表象す。我等は神が一の組織制度を有してゐられる事を知らねばならぬ、何故なれば神の御仕事には完全なる秩序があるのであつて、組織されし制度なくしては何事をも秩序的に爲す事は出來ないからである。此の故に默示錄十二章一節の預言中の「婦」とは即ち神の組織制度を意味してゐる事は確實である。

神が最初より一の組織制度を有してゐられた事は事實であるが、此の地球が人間の爲のものであり、聖書は神の組織制度の爲に準備されつゝある地上の人間の爲に記述されたるものである以上、組織制度に關する上記の預言は直接人類に關するものを示してゐる事は確實である。此の預言は人類の爲に準備されつゝある一の組織制度に關聯するものであつて之を更に嚴密に云ふならば、此の預言は殿級に入れられて、神の組織制度の一部とされる所の者たちに關聯してゐるのである。大預言者イエスは其の弟子に向つて斯う預言された、「我が父の家には第宅多し。然らずは我豫て汝等に之を告ぐべきなり。我汝等の爲に所を備へに行く、若し行きて我汝等の爲に所を備へば、又來りて汝等を我に納くべし。我が居る所に汝等をも居らしめんとてなり」(ヨハネ傳十四章二、三節)。

此の「第宅」とは居る所即ち住所を意味す。神の組織制度の中には多くの「居る所」即ち住所がある。イエスの此の聲明は地上に在る忠信なる追隨者の爲に、神の組織制度の中に一の所を準備しに行くと云ふを意味してゐた。イエスは忠信者がイエス自身と共に居るべき一の所を神の組織制度中に備へに行くと云はれたのである。而してイエスは豫定の時に再臨して彼等を己に納け容れ、斯くして彼等を御自身と共に居らしめらるゝのである。イエスの昇天後、其の忠實なる追隨者の最も大なる願望はイエスの再臨と御國の到來とであつた。

イエスは己が再臨と神の國の到來を預言してゐる最中に此の天に顯はれる「兆」の事を語られた。故にキリストの忠實なる追隨者が神の國を諒解し、何時それが來るか、如何にして其の運用を開始するかと云ふ事を諒解する時が來なければならぬ。婦人が子を產むと云ふ事は即ち、其の子が生れて生命の活動を開始すると云ふ事である。此の故に天界に此の異象即ち「兆」が顯はれると云ふ事は神の國が開始されたと云ふ事を殿級の者に示す處の證據となる、(詩篇二篇六節)。而して忠信者の或る者は彼等が主の榮光に取られる以前に於て先づ之を見るのである。

默示錄十二章一節の「婦」は『日を着、月を足の下に踏み』と記されてある。神は日を造りて光とされた、(詩篇七十四篇十六節)。『神エホバは日なり、楯なり』(詩篇八十四篇十一節)。神の國に關して示されある預言の一に曰く、『其の裔は永遠に續き其の座位は日の如く恒に我が前に在らん』(詩篇八十九篇卅六節)。エホバは光を以て己が衣となし給ふ、(詩篇百四篇二節)。神の律法はその聖意の發表されたるものであつて、神を愛する者は之に導かれて義しき道を歩む、(詩篇十九篇七節。八十九篇卅七篇。百十九篇百五節)。

「婦」が日の光を着て義しき道に歩むと云ふ事は、神の組織制度が神によつて照らされて、其の聖旨に從つて歩む事を表象してゐる。婦の頭上に一の冠が見えてゐると云ふ事は即ち

「神の組織制度の首位者は、大預言者にして祭司たり、王にしてエホバの代理執行者の長たり、天地の全權を與へられたる所のイエス・キリスト（マタイ傳廿八章十八節）である」と云ふを預言してゐるのであつて、又「十二の星」とは十二人の使徒によつて代表されてゐる處の神の組織制度の十二の支派を表象してゐる、（默示錄七章五―八節）。天界に於て此の殿が開かれたる後に、地上にあつた殿級の者等はエホバの電光によつて此の大なる「異象」を見たのである。

イエスは昇天された時に神エホバより『我汝の仇を汝の承足（足臺）とする迄は我が右に坐すべし』（詩篇百十篇一節）と命ぜられた。イエスはその行動を開始して、敵なるサタンを驅逐し、父エホバの聖名を擁護するに熱心であつたに相違ない。之を爲し得る豫定の時の到來すべき事は此の預言者の記述せる通りである。此の時こそ神の國即ち政府が生れ出づる時である。故に預言は神の組織制度なる「婦」が、「既に孕み居りしが子を產まんとして甚く泣き叫べり」（默示錄十二章二節）と形容してゐるのである。イエスが其の權を執つて王國の政治を開始される時が到來しなければならぬ、何故なれば神は其の預言者を通じて、主イエスを遣はして彼を諸々の敵の中に王たらしめんと告げて置かれたからである。之ぞ即ちエホバが其の王を王座に擁立さるゝ時であつて、詩篇第二篇六節の預言の明確に成就する時である。而

して之は同時に全地を支配する王國の誕生即ち開始を意味してゐる。『婦、男の子を產めり。其の子鐵の杖を以て萬國を主理らんとす。彼神と其の寶座の下に擧げられたり』（默示錄十二章五節）の預言は此の時に成就するのである。「男の子」は神の政府であつて、之は全地の諸國民の悉くを支配統治し、如何なる者の敵對するをも許さないのである。斯くして神の國はエホバの聖旨に基いて運用さるゝ事が明示されてある。此の國こそイエスが其の弟子に向つて、『御國を臨らせ給へ、御旨の天に成る如く、地にも成らせ給へ』（マタイ傳六章十節）と祈れと示されし所の神の國である。故に此の預言は、日を着たる婦によつて代表されてゐる處の神の組織制度が御國の統治を產み出す事を示してゐるのである。

「待つ期間」の終結したのは一九一四年（大正三年）であつた、（詩篇百十篇一節。ヘアル書十章十三節）。此の時はサタンの支配の終結する時であつて、爾後彼は從來の如き干涉を受ける事なくして此の世に臨む事は許されなくなつた。其の時に世界大戰が勃發したが之は即ち主イエス・キリストの再臨在と此の世の終結に關する預言の成就を立證せるものである、（マタイ傳廿四章七―十節）。此の時に天界に戰ひが起り、其の結果としてサタンは天界より放逐された、（默示錄十二章七―九節）。然しキリスト・イエスの眞の追隨者は一九一八年以後までは「天の兆」即ち異象を見る事が出來なかつた、何故なれば主が其の殿に來られたのは即ち一九

一八年であつて、此の時以後殿級の者の爲に更に大なる光明が神の言の上に與へられたからである、(默示錄十一章十九節)。此の時に主イエス・キリストは預言されたる如く己が「體」の成員の爲に「一の所」を備へられたのであつて、今主は神の組織制度の中に一部署を彼等に割當て、而して彼等をして彼等に關する神の聖旨を善く確かめしむる爲に更に大なる光明を彼等に與へられたのである。神の國家政府の誕生、即ち神が其の王を王座に擁立さるゝ事に依て王國が開始される事と、主イエスが其の殿に臨まれる事とは神が其の民に顯示し給ふ預言の多くを開くに最も必要なる「眞理の鍵」である。

シオン

神は其の御言の中に聖旨に關する豐富な證言を準備されてゐるが、之は神に全く獻身せる者をして之によつて充分に證據を與へられて、己が信仰を確立せしむるが爲である。故に此處に示されある多くの實證は神エホバは一の組織制度を有し給ふ事を明かに立證してゐるのであつて、此の組織制度は見ゆる部分と見えざる部分との兩部に分たれ、神の聖旨に一致して運用されつゝあり、此の組織制度の中に殿級の者があるのであるが、彼等の或る者は既に天界にあり、又或る者は未だ尙ほ此の地上にある。

シオンとは神の組織制度に與へられたる名稱の一つである。エルサレムの都も亦シオンと

呼ばれてゐた。「ダビデ(愛せらるゝ者)の城即ちシオン」(列王記略上八章一節)と記さる。神はエルサレムの都を組織して己が聖名を其の上に置き、此の都がエホバ御自身に屬するものなるを示されたが、此の都は即ちエホバの組織制度を表象してゐるのである。預言者は記して、神は「ユダの支派、その愛しみ給ふシオンの山を選び給へり」と示してゐるが、神は其處に聖所を築き、ダビデを選んで其の首位者とされた、(詩篇七十八篇六十八—七十節。七十六篇一、二節)。斯くの如く神は預言的辭句を用ひて、シオンを以て神の組織制度なりと形容し、エホバの愛子なるキリスト・イエスを以て其の首位者とされた事を示してゐられる。

ダビデがオベデエドムの家より契約の櫃を移した時に、彼はそれをエルサレムの都の中なるシオンの山の上の幕屋の中に安置した、(列王記略上八章一節)。此のシオンの山こそエルサレムの都の中心であつて、權威の在る所であつた、何故なれば王ダビデが此處に住みて、彼はエホバに對する代理執行者であつたからである。其の後殿が築かれて契約の櫃は殿の中に移されたが、其の時シオンの名は其處に適用さるゝ事となつた、(列王記略上八章四—廿一節)。

契約の櫃と其の上に輝く光とはエホバの臨在即ち其の住み給ふ所を表象す、(レビ記十六章二節。ヘブル書九章五節。イザヤ書六十章十九節。出埃及記十三章廿一節)。此の故にシオンは神エホ

パの住み所なる公的家族を表象してゐる、「汝が住み給ふシオンの山」(詩篇百卅二篇十三節)。「エホバはシオンを撰びて己が居所にせんと望み給へり」(詩篇百卅二篇十三節)。

エルサレムの都の中には公的家族でない者も多數に居た。神の家族に入れられたる者の全部が神の公的制度の一部となるのではない。聖書は示して、神の王室に屬せず、然かも尙ほ王室の僕たる事によつて神の組織制度に屬する者が多數あるを敎へてゐる、(默示錄七章十五節)。此の故に「エルサレム」の名稱は敎會即ち「召し出されたる級」の者を總稱し、又「シオン」の名は神の王室に屬してキリスト・イエスと共に其の寶座に參加する者を特に表象してゐるのである、(默示錄三章廿一節)。故にエホバは其の組織制度のシオンに住み給ふと特に示されてゐる、(詩篇九篇十一節)。「エルサレム」と「シオン」の二名稱は共に神の組織制度を表象するに用ひられ、何れも聖書中に「婦」によつて表象されてゐる。

シオンの築造

神は其の預言者を通じて、豫定の時にシオンを築かんと示して置かれた、「エホバはシオンを築き、榮光を以て顯れ給へり」(詩篇百二篇十六節)。此處に「築き」と譯されあるヘブル語は他の處で「子等を生む」又は「立てる」とも譯されてゐる。默示錄十二章に關聯して更に他の預言に就て考へて見るに、エホバはその預言者を通じて、シオンが一人の男の子及び子等を生

むことを告げて置かれた、「シオンは產のなやみを知らざる前に生み、其の劬勞來らざる前に男子を生みおとせり」(イザヤ書六十六章七節)。此の預言中の「男子」と默示錄十二章五節の中の「男子」とが同一なるは一點の疑ひなき所である。エホバがシオンを築くに用ひらるゝ方法は、神の豫定されし時至るに及びて神はその胥そゝぎし王キリスト・イエスを王座に擁立される事である。之は即ちシオンの聖き山即ちシオンの最高場所にして、その首位によつて表象されてゐる、(詩篇二篇六節)。之は婦によつて表象されある神の組織制度が男子を產み、即ち主の民の利益となる處の神の國を生み出す事を意味してゐる。其の時神は愛子に命じて統治を開始し、敵を驅逐せしめ給ふたのである、(詩篇百十篇二—六節)。

其の時以前にはシオンの中に何の苦みもなかつたが、キリスト・イエスを其の王座に立てし後に「產の惱み」が始まつた。此の「惱み」はエホバの偉大なる王たり祭司たる主イエスと其の聖き天使等を一方の側にし、又敵なる惡魔と彼に屬する天使等を他の側にする之等兩者の間の戰ひであつた。此の時以前にはサタンも天に昇り、神の御前に出てゐた、(ヨブ記一章六節)。此の戰ひの結果サタンは天界から放逐された。即ち斯く預言されてゐる、「斯くて天に戰起れり。ミカエル其の使者を率ゐて龍と戰ふ。龍も亦その使者を率ゐて之と戰ひしが勝つ事能はず、且つ再び天に居ることを得ず、是に於て此の大なる龍即ち惡魔と呼ばれ、サタンと呼ば

るゝ者、全世界の人を惑はす老蛇地に逐ひ下さる。其の使者も亦ともに逐ひおろされたり。天に大なる聲あるを聞けり。曰く、我等の神の救と能力と其の國と、神のキリストの權威今既に至れり。そは我等の神の前に夜晝我等の兄弟を訴ふる者既に逐ひ下されたればなり。我等の兄弟は羔羊及び己が證せし所の言によりて之に勝てり。彼等は死に至るまで其の生命を惜まざりき」(默示錄十二章七—十一節)。

天界に此の戰ひありて後間もなくしてシオンの子等は生れたが、之大なる歡喜の時であつた、「誰が斯かる事を聞きしや、誰が斯かる類を見しや、一つの國は唯一日の苦みにて成るべけんや。一の國民は一時に生まるべけんや、然どシオンは苦しむ間もなく直ちにその子等を產めり。エホバ言ひ給はく、我產に臨ましめしに、何で產まざらしめんや。汝の神云ひ給はく、我は產ましむる者なるに、何で胎を閉ざさんや。エルサレムを愛する者よ、皆彼と共に喜べ、彼の故を以て樂しめ。彼の爲に悲める者よ、皆彼と共に喜び樂め」(イザヤ書六十六章八—十節)。

イエス・キリストが死より甦らされし時に彼が「生れ」たるは勿論である。然し「男子」は、神が其の王を王座に擁立されし時に生れ出でたる新しき國家を表象す。而して「シオンの子等」は「產のくるしみ」の「後」に生れ出でたるキリストの體の成員たちである。故にイザ

ヤの預言と默示錄十二章との預言は共に全き一致を示してゐるのである。

誕生の順序に就て調べて見ると、先つ第一に、神に忠信なる狀態にて死せるキリストの追隨者即ち使徒等及び其の他の人々と、彼等の後には地上に於ける忠信者等となる。イエスは預言して彼等に示された、「若し行きて我汝等の爲に所を備へば、又來たりて汝等を我に納くべし。我が居る所に汝等をも居らしめんとてなり」と。パウロは忠信者の一人であつた。彼は正に死なんとする直面に於て斯くテモテに書き遺つた、「われ今祭物とならんとす。我が世を去る時近づけり。われ既に善き戰ひを戰ひ、既に走るべき道程を盡し、既に信仰の道を守れり。今より後、義の冠わが爲に備へあり。主即ち正しき審判を爲す者、其の日に至りて之を我に與ふ、唯我に與ふるのみならず、凡て彼の顯著はるゝを慕ふ者にも與ふべし」(テモテ後書四章六—八節)。

忠信者の復活

此處に此の問題を諒解し得る鍵がある。パウロは彼自身が正に死なんとしてゐる事と、主イエスが來て彼を受けて下さる時まで死の狀態に止まつてゐなければならぬ事を知つてゐた。パウロの此の言は一の預言であつて、彼の復活の時を決定してゐる、即ち「其の日」と。聖書中に「其の日」と示されある時は如何なる場合にても、之が、主イエスの再臨して統治を

開始さるゝ時として受け取つて差支へないのである。パウロは更に進んで『主即ち正しき審判を爲す者、其の日に至りて之を我に與ふ』と其の時を明瞭に決定してゐる。主イエスは審判の爲に其の殿に臨み給ふのであつて、パウロが云ふ所の『冠』を與へらるゝのも即ち此の時である、(詩篇十一篇四、五節)。更に亦パウロは他の場合に於て示す、『我等主の言を以て汝等に言はん、我等のうち主の來り給ふ時に至るまで生きて存れる者は、既に眠れる者に決して先立たじ』(改譯テサロニケ前書四章十五節)。

使徒等並びに等しく忠信者として死せる者等は神の殿の一部を形成す、(コリント前書三章十六、十七節)。彼等はシオンの一部であつて、シオンの中に入れられ、シオンに築き上げられるのであるが、彼等即ち既に死せる忠信者は先づ死より甦らされなければならぬ。此の故に死せる忠信者にしても主の承認を受けし者は、主が彼等の爲に一の所を備へ、其の殿に臨まれて後に死より甦らされて、殿に入れられ、シオンの一部として築かれなければならぬ。パウロは示す、『我等は皆必ずキリストの審判の座の前にあらはる』(改譯コリント後書五章十節)と。之即ち審判を受くる爲である。死せる忠信者が死より甦らされて、シオンに入れられる事は即ち彼等に對する最後の審判を意味する者であつて、其の時に正しき審判者なるキリスト・イエスは斯くの如く承認を與へたる者に生命の冠を與へ、神の組織制度中に於て彼等

の爲に備へし所に彼等を入れ給ふのである。

審判

主が其の殿に來らるゝ目的の主なるものは審判の爲であつて、此の審判は神の家より開始されなければならぬ、(マラキ書三章一—三節。詩篇十一篇四、五節。改譯ペテロ前書四章十七節)。而して、主が其の殿に臨まれる時に尙ほ地上に在る主の民は、彼等がシオンの成員として神の組織制度の一部に編入される前に先づ審判を受けなければならぬ。彼等が其の時審判と承認を受けると云ふ事は彼等がシオンの中に築き上げられると云ふ事を意味してゐる。主が其の殿に臨まれる時は、地上に在つて主の民なりと稱する者等の上に熱火の大試煉が到來する事を意味するのであつて、之は預言者の言に見るも明かである、即ち云ふ、『汝等の喜ぶ契約の使者忽然其の殿に來らん……然ど其の來る日には誰か堪え得んや。其の顯著るゝ時には誰か立ち得んや。彼は金をふき分くる者の火の如く、布晒しの灰汁の如くならん。彼は銀をふき別けて之を潔むる者の如く坐せん。彼はレビの裔を潔め、金銀の如く彼等を潔めん。而して彼等は義を以て獻げ物をエホバに獻げん』(マラキ書三章一—三節)。

審判と執行の全權能を帶びた主イエス・キリストは審判の座に坐して、レビの子等によつて表象されある獻身者を潔め、試みらるゝのであつて、其の時に承認を受けざる者が顯はれ

出づる事となる、（ヨハネ傳五章廿二節）。此の預言中の「レビの子等」は審判の行はれる時に地上に在りて、神の聖旨を爲すべく献身する人々を豫示してゐるのである。或る者等が此の試煉に耐え切れずして落第する事は此の預言に明示されある通りである。

今此の預言の成就せるを示す實證に就て研究して見る。一九一八年（大正七年）の年に一の試みの時が神の民と稱する人々全般の上に來て、彼等全部の信仰と忠誠とを試みた。キリスト・イエスが「エホバの御前に道を備へられる」期間を通じて多數の人々が此の世の諸教會制度より脱出して來て眞理の光に基いて歩み、神に奉仕したいとの意志を聲明した。一九一八年の熱火の試煉に遭ひて、彼等の多數は主の道より落ち再び此の世に歸り去つた。彼等の多數は主が來りて彼等を天に取り上げられる事のみを望みて待ち受け、此の事が一九一四年（大正三年）の年に必ず行はれるものと自ら決めてゐたのである。事實一九一四年は特殊の時であつた、然し彼等は未だ發生せざるべき何事かを自ら勝手に瞑想してゐたに過ぎなかつたのである。

其の後、一九一八年（大正七年）に來た火の如き試煉に際して之等の人々は失望すると共に恐怖に襲はれ、己が信仰を失つて主の道より離れ去つて了つた。クリスチャンの之等献身者中の或る人々は此の火の如き試煉に善く堪えて、それを通過し、引き續いて主に對する全き

忠誠を示す事を得た。斯く忠信を立證し得たる者は承認を受けて「義の外服」（承認を表象す）の中に包まれ、殿の狀態に入れられて爾後從前にも遙かに勝して明かなる眞理の異象を受けるに至つたのである。彼等が絶對無私の忠誠を以て主の前に進み歩むに從つて彼等の眞理に對する感謝は益々増し加へられて行つた。

其の時地上に於ける自稱クリスチャンの大多數は「教會制度」と呼ばれたる各宗派に屬してゐた。一九一八年の頃、之等諸教會制度の指導者等は主と御國を棄て去りて全く神より離れ去り、其の代りに惡魔の所產である所の國際聯盟と呼ぶ一大制度を採用して、之を以て「神の國の地上に於ける政治的顯現なり」と聲明し、人類の希望する處は皆此の國際聯盟なる一大制度によつて實現さるべしと發表した。此の故に神の審判は、所謂教會制度全般の上に臨んだのである。斯くして幾多實證は示して、審判は主が其の殿に臨まれし一九一八年の年より「神の家」の上に開始されし事を立證してゐるのであつて、其の時に忠信者はシオンの中に築かれたのである。

譬

イエスは弟子等に向つて己が再臨と神の國の到來に就て語らるゝ時に常に譬を用ひて教へられた。之等の譬の多くは預言であつた。之等諸々の譬の中にミナとタラントの譬がある。

ミナの譬に於てイエスは自らを以て「或る貴人、王の權を受けて歸らんとて遠き國へ行く」者に譬へられた、(改譯ルカ傳十九章十二節)。イエスは事實に於て一九一四年(大正三年)に國を受け、其の時統治を開始すべき事を神より命ぜられた、(詩篇百十篇二節)。此の故に彼の歸り來ると云ふ事は其の時以後の事であつて、即ち其の預言されし如く、主が其の忠信者等に來りて、彼等を己に納け容れられる時を意味してゐるのである。此のミナの預言的譬に於てイエスは御自身を以て遠き國に行く人に譬へられた。而して『十人の僕を呼び、之に金十ミナを付して言ふ、我が歸るまで商賣せよ』(改譯ルカ傳十九章十三節)。タラントの譬にも之と同樣の事が語られてあるのであつて、即ち斯うある、『又或る人遠く旅立ちせんとして其の僕どもを呼び、之に己が所有を預くるが如し。各人の能力に應じて或る者には五タラント、或る者には二タラント、或る者には一タラントを與へ置きて旅立ちせり』(改譯マタイ傳廿五章十四、十五節)。

之等の預言はイエスが昇天された時より成就を始めたのであつて、イエスは己が大統治者たるべき國即ち政府の大權をエホバより受ける時まで天に於て待たなければならなかつた。主イエスの不在中、地上に於ける神の國の利害に關する持場の全部は神の聖旨を爲すべく神と契約を結んだ人々の手に委ねられたのであつて、此の中にはイエスがエホバの使者として

神の御前に道を備へてゐられる期間を通じて、眞理の知識を與へられ、獻身する者の全部が含まれてゐるのである、(マラキ書三章一節)。御國の利害問題の全部は「所有」、タラント、金錢、ミナ等によつて象徴されてゐる。

主に忠信と誠實とを持續し、此の世より離れ去つて、一意專念御國の利害を守りて主の來り給ふ時にまで及ぶ者は抑々誰なるか、イエスの來り給ふ時その忠信なるを承認さるゝ者は誰なるか、其の時預言は答へて云ふ、「然るに其の地の民彼を憎み、後より使を遣はして、我等は此の人の王となる事を欲せず、と云はしむ」(改譯ルカ傳十九章十四節)。所謂「キリスト國」の指導者なる牧師、神學者等の教職者は自ら主の御國の市民なりと稱してゐる。此の預言の上記一部分は諸教會制度を指導する教職者等が世界統治の方策として國際聯盟を建設し、彼等の相棒たる大資本家、大政治家と共に之を支配すると聲明したる時に美事成就したのであつて、斯くして彼等はキリストによつて己等が統治さるゝ事を自ら拒絶するに至つたのである。

イエス・キリストは國を受けて一九一四年(大正三年)に其の統治を開始された。其の時より間もなくしてイエス・キリストは之等の預言の如くに己が民の上に歸來されたのである。何の爲にか。イエスは之に答へて其の「僕ども」と會計せん爲であると示してゐられるが、之

即ち彼等を審判せんが爲である。此の預言的譬に於て斯く示さる、『貴人、王の權を受けて歸り來りし時、銀を付し置きたる僕どもの如何に商賣せんかを知らんとて彼等を呼ばしむ』(改譯ルカ傳十九章十五節)。『久しうして後、この僕どもの主人來りて、彼等と計算せしに……』(改譯マタイ傳廿五章十九節)。其の僕等と會計する事は即ち古昔の預言者によつて示されたる如く審判若くは試煉を意味してゐるのである、(マラキ書三章一―三節。詩第十一篇四、五節)。

而して此の預言的譬は會計、計算即ち審判の結果が如何なるものなるかを示してゐるが、今之を逆の順序によつて調べて見る。先づ最初に『仇』即ち教職者と其の群の長等に關して斯く記さる、『而して我が王たる事を欲せぬ彼の仇どもを、此處に連れ來り、我が前にて殺せ』(改譯ルカ傳十九章廿七節)。事實は示して、此の預言が一九一九年(大正八年)に成就せるを示してゐる。此の年に國際聯盟は教職者と其の『群の長たち』によつて受け容れられ、彼等は之をキリストが統治者たるべき神の國の代用物として承認したのである。此の時此處で彼等は彼等が神の國に參與する機會と特權の全部を喪失して了つた。彼等は他の譬の中で『秤子』に譬へられ、燒却されん爲に一束に集められる者として示されてゐる、(マタイ傳十三章廿節)。神の眞理がその忠實なる僕たちによつて、大仕掛けに勇ましく宣明される事に對抗する爲と、

彼等教職者の無責任に吐き散らす空しき人間智の故によつて、諸教會制度は『教會聯盟』制度の下に結束するの已むなきに至つた。斯くして彼等がキリストの國に參與する特權は永久に失はれて了つたのである。

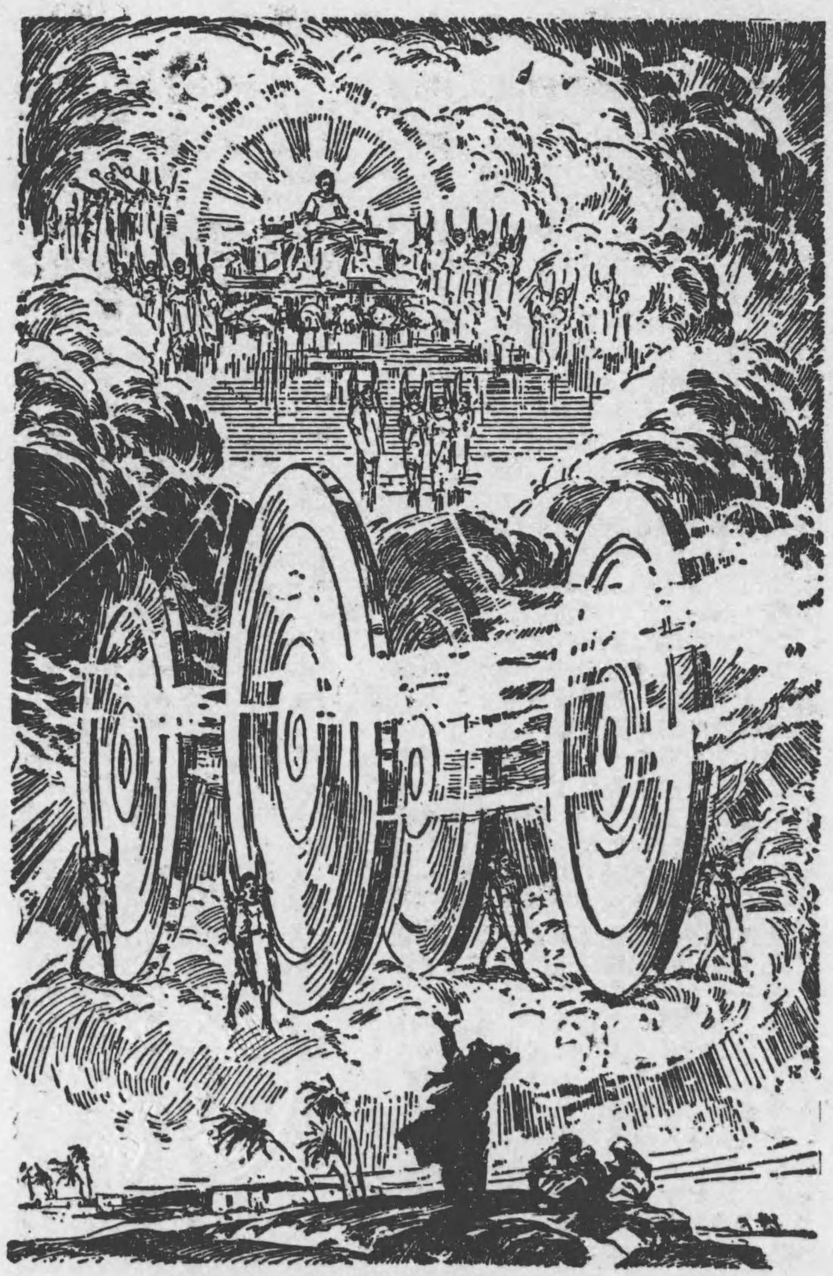
ミナとタラントによつて表象されてゐる御國の持ち場に對する己が責務を其の與へられし機會に於て正當に行使せざりし僕は、主が計算に來られる時に審判を受け、其の折角委ねられしものを沒收されるのであつて、主は之を忠信者として主の承認を受けたる者の手に與へらるゝのである。主は不忠實なる僕を『無益なる僕』と呼び、之等を一束にして外の暗黑に投げ出だされんと預言して置かれる、(改譯マタイ傳廿五章廿四―卅節、改譯ルカ傳十九章廿―廿四節)。實證は示して、預言の此の部分は一九一八年より以後に成就してゐる事を示してゐる。主の仕事を熱心に努めず、人々の間に主を確實に代表する事を拒絶し、怠つた者は王國に對する興味を失つて了つて、彼等は最早神の御目的を諒解し得るの異象を有する事が出來なくなる。斯くして彼等は暗黑に置かれるのである。

大預言者イエス・キリストは示して御自身がその殿に臨まれる時に其處に忠信者の級が見出さるべしと告げられた。之等忠信者より報告を受けて後に　は『云ふ、善いかな、良き僕、汝は小事に忠なりし故、十の町を司るべし』(改譯ルカ傳十九章十七節)。『主人言ふ、善いか

な、善且つ忠なる僕、汝は僅かなる物に忠なりき。我汝に多くの物を掌どらせん。汝の主人の歡喜に入れ」(改譯マタイ傳廿五章廿一節)。忠信者級を形成する彼等は主より承認を受けて、主の歡喜に入れられたのである。此の忠信者級に對して主は地に於ける御國の利害の全部を委ね給ふ。神に奉仕する機會と特權の全部は彼等不忠信者より沒收されて、忠信者の手に渡されるのであつて、之等忠信者は「遺殘者」として形容されてゐる。

主は己が再臨して忠信者等を神の組織制度の中に取り入るゝ事に關して他の預言を示された。イエスは火の試煉を以てノアの時の洪水に譬へられ、ノアと其の家族を以て主の忠信者達に譬へ、彼等が主を待ち受けて、其の示されし任務に忠實に精勵する事を告げられた、(マタイ傳廿四章廿七—廿九節)。然る後にイエスは更に示して、二人の者があつて、共に畑にて働き、共に神を代表すると稱してゐる時に其の中の一人のみが承認を受けんと告げ、而して斯く附け加へられた、「此の故に汝等の主何れの時來るかを知らざれば怠らずして守れ。時に及びて糧を彼等に與へさする爲に主人が其の僕どもの上に立てたる忠義にして智き僕は誰なるか。其の主人の來らん時に斯くの如く動むるを見らるゝ僕は幸福なり。我まことに汝等に告げん。其の所有を皆彼に督らすべし」(マタイ傳廿四章四十二、四十五—四十七節)。

實證は示して此の預言は一九一八年以後に成就を見たるを告げてゐるが、其の時キリス



エゼキエルの見し神の組織制度の象徴　第一四七頁

ト・イエスの眞に忠信なる少數の人々があつて、彼等はエホバの聖名と其の王キリスト及び其の御國に就ての證言を爲すに精勵してゐた。之等の忠信者は智き道を執つて歩んだ、何故なれば彼等は主の命に聽き從ひ、神の示し給ふ道に從ひて己が歩みを持續したる人々であつて、彼等こそ主イエスによつて「忠義にして智き僕」として形容されたる人々であつた。それと共に其の時に其處には之と全く正反對の道を歩みて、主の仕事と、神エホバの聖名及び其の御國に就ての證言をなす總ての仕事に反對する級の者等があつたが、之等こそ即ち「惡しき僕」級の者であつた、(マタイ傳廿四章四十八―五十一節)。「忠義にして智き僕」級を形成せる者こそ「シオンの子等」であつて、神の組織制度の中に築かれたる者である。

「遺殘者」

エホバは預言者を通じて其の民の間に「遺殘者」のあるべきを告げ置かれた、「其の日萬軍のエホバ、その民の遺殘者の爲に榮の冠となり、美はしき冠となり給はん。審判の席に坐する者には審判の靈を與へ、軍を門より追ひ返す者には力を與へ給ふべし」(イザヤ書廿八章五、六節)。イスラエル人は預言的民であつた。預言の多くは此の民の上に部分的又は縮圖的に成就した、然し完全なる成就は靈的イスラエル即ちイエスの御跡を追隨すべく契約せる者等の上に於て成るのである。猶太人は少數の人々のみを殘して他の大多數が神エホバより離

れ去つたが、此の遺殘者に關しては使徒パウロの證言せる通りである、（ロマ書十一章五節）。イザヤは此の少數の「遺殘者」のみが殘らんと預言した、（イザヤ書一章九節）。彼は又示して、彼と其の子等は『イスラエルの中の兆となり、奇しき標』となる爲に與へられたと告げた、（イザヤ書八章十八節）。「兆」にしても、又「異象」にしても共に未來に於ける何物かを指示する處の信號を意味す。エホバはイザヤの子等の命名を命じられた。其の一人の名は、主が其の民と稱する者等の上に臨まるゝ時に下さるゝ嚴しき審判を表象してゐた、（イザヤ書八章一節）。他の一人の名は「遺殘者歸り來らん」と云ふを意味し、彼等が忠信の故によつて主の祝福を受ける事を表はしてゐる、（イザヤ書七章三節）。此の預言はイエスがミナとタラントの預言的譬の中に示されし處と全き一致を示してゐる。

遺殘者とは大多數が取り去られた後に跡に殘る者を謂ふ。主イエス・キリストが一九一八年其の殿に來られし時に始まつた審判は、多數の者を除き去りて、其の後に、引き續き神に忠誠を持續せんと誓ひ願つた少數の遺殘者が殘つた。遺殘者は承認を受けたる者の級であつた。彼等は義の「外服」の中に包まれ、各自が「救ひの衣」を受けたのである、（イザヤ書六十一章十節。マタイ傳廿二章二—十四節）。そして彼等は同時に婚禮の禮服を着したのである。主イエスは其の殿に來て審判を行はるゝ時に闘して斯く云はれた、『人の子來らん時に信を世に見

んや』（ルカ傳十八章八節）。ミナとタラントの譬の中に示されある主の預言に見るも、多數の者は忠信なる狀態に止まらずして、唯少數の遺殘者のみが忠信なる狀態に止まるは明かである。イエスは又他の場合に預言して、不信不法の自稱クリスチヤンを集めて投げ出さるゝ時、其處に遺殘者級の者が殘るべしと示された、（マタイ傳十三章四十一—四十九節）。

神は其の預言者イザヤを通じて示された、「此故にわれ彼をして大なる者と共に物を分ち取らしめん。彼は强き者と共に掠物を分ち取るべし」（イザヤ書五十三章十二節）。此の「强き者」とは熱火の試練を經て强く主に留まる忠信者を意味す、（詩篇百十八篇十三、十四節。エペソ書六章十節）。斯かる級の者こそキリストの王座に參與して全地諸國の上に權威を行使する者である、（默示錄二章廿六、廿七節。三章廿一節）。之等こそ天に於てキリストと共に王たる者である、（默示錄廿章六節）。キリストの追隨者なりと自稱して、其の名によりて語る者の全部が神の國に入るのではない、（マタイ傳七章廿一—廿三節）。「忠信にして眞實」なる者のみが遺殘者を形成し、御國に於てキリストと共に「物を分ち取る」のである。他の者は皆震ひ落さる事は聖書の示せる通りである、（ヘブル書十二章廿六、廿七節）。此の震ひと分離は一九一八年以降引き續いて進行中である。シオンの一部として築き上げられ、神の組織制度となつたのは即ち此の遺殘者級の者である。

集合

エホバは其の預言者を通じて忠信者を御許に集合せしめらるゝ事に就て斯く示された、「祭物を以て我と契約を立てし我が聖徒を我が許に集めよ」(詩篇五十篇五節) と。此の「祭物の契約」とは神がイエスに神性を與へんと約束されし時にイエスとの間に立てられし契約であつて、之はイエスがヨルダン河に於てバプテスマを受けられし時に作成されたのである。他の者等は此の契約の中に入るべく招待されたのであつて、其の條件とする處は死に至るまで神エホバに忠誠なるべき事である、(ルカ傳廿二章廿八—卅節)。多くの者は神の聖旨を爲さんと同意したが、然し單なる契約だけでは未だ充分ではない。惠みによつて此の契約に入れられる者は此の契約に於ける己が部署を忠實に受け持つて己が忠信と眞實とを立證しなければならぬ。預言者の此の言の意味に見ても、或る者は忠信であり、又或る者は不忠信である事が明かである。之等の者がエホバの御許に集合せしめられる事は、主イエス・キリストが其の殿に臨まれて彼等を試みに遭はされた時に實現を見た。此の時に承認を受けたる者は神の御許に集められて、シオンの一部として築き上げられ、神の組織制度の一部とされたのである。忠信者はエホバの愛し、いつくしみ給ふ者である、何故なれば神に己が全部を献げて神の愛の對照となるからである。

此の聖句は Rotherham 氏譯では斯うなつてゐる、即ち、「汝等は我が許に集れよ、汝等は我が祭物の契約を正しく行ひて我に愛しまるゝ者なり」と。神の豫定の時至るに及びて、忠信者等は己が執りて歩む所の智くして忠信なる道の故によりて不忠信者より分離す。試驗が行はれて、主が忠信者なりと認められし者は取りて彼等を他の者より分離し、之を御自身の目的の爲に使用すべく一の集團に組織し給ふのである、(イザヤ書四十三章廿一節)。故に之等の者は遺殘者級を形成す。敵なるサタンと其の全軍が特別に攻擊を加ふるは即ち此の遺殘者級に對してゞある、何故なれば彼等は地上に於て神を代表する唯一の忠信者であつて、彼等は喜び進んで己が全部を「主の日」に献げ、神が彼等に命じてなさしめ給ふ處の事を喜んで爲すからである、(默示錄十二章十七節。詩篇百十篇三節)。

「隱れたる所」

神エホバは其の預言者を通じて示し、主の御許に集められる之等の者の爲に一の「隱れたる所」を備へ給ふ事を告げられた、「至上者の所なる隱れたる處に住まふ其の人は全能者の蔭に宿らん」(詩篇九十一篇一節)。此の預言は、地上に於ける教會に關するものとしては主イエスが其の殿に臨まるゝ迄は成就を見なかつたのである。何者も神の組織制度の一部とならずして、至高き神の「隱れたる所」に入る事は出來ぬ。試驗が行はれて忠信者として承認された

る時に主は彼等を神の組織制度中に取り入れられるのであつて其處にて彼等は安然に保護されるのである。若し彼等がその忠信を持續するならば彼等は其の安然なる場所に永久に留まる事となる。故に預言者は云ふ、『汝曩に言へり、エホバは我が避け所なりと。汝至上者をその住居となしたれば災害汝に至らず、苦難汝の幕屋に近づかじ』(詩篇九十一篇九、十節)。

至高き神エホバの隱れたる所に在ると云ふ事はキリスト・イエスをシオンの首位とする神の組織制度の中に居ると云ふを意味す。如何なる者も先づ神の子として生れ、エホバの聖靈を以て膏そゝがれ、その契約に忠信なる事を立證し、主の殿の中に入れられて神の組織制度の一部とされざる限り、エホバの「隱れたる所」に入る事は絶對に不可能である。此の預言は更に示す、『そは至上者なんぢの爲に其の使者等(天使)に命せて汝が行む諸々の道に汝を守らせ給へばなり』(詩篇九十一篇十一節)と。此の「守る」と云ふ字は或る者に命令して他の者を守護せしむる事を意味す、(ヒカリヤ書三章七節)。天使等を任命して之を使用し給ふ者は神エホバである、故に之等の天使が神の組織制度に屬してゐる事は明かであつて、遺殘者級を形成して至高き神エホバの「隱れたる所」に入れられたる者等は、神がその天使を用ひて備へ給ふ特別の守護下に置かれるのである。聖書は敎へて、神は己が使者として天使等を使用し給ふのであつて、彼等は神の組織制度の一部であると示す。而して忠信者が神の組織制度の一部

となる時に彼等は此の特別の保護を受けるのである、(ルカ傳一章十九節。詩篇卅四篇七節)。

イエスが正に暴徒の手に捕へられやうとした時にペテロは暴徒の一人の耳を擊ちて削ぎ落した。イエスは其の時ペテロに向つて斯う云はれた、『我いま十二軍餘の天使を我が父に請ふて受くる事能はずと汝等思ふや』(マタイ傳廿六章五十三節)。其の時天使の諸軍がイエスを助けんとて總ての準備を整へ、命令一下直ちに活動を開始せんと待ち構へてゐた事が瞭かである。神エホバは其の忠實なる遺殘者級の者に對して特別の援助と保護を與へ給ふのであつて、彼等が神の組織制度中に取り入れられた事は預言者の此の言に見ても極めて明かである、『彼我を呼ばゞ我答へん。我その苦難の時に偕に居りて之を援け、之を崇めん』(詩篇九十一篇十五節)。彼等が神の保護を受くるには充分の理由があるのであつて、之に就ては後日に述べる事とする。

石

神はソロモンに示して、エホバの聖名の爲にエルサレムに於て一の家即ち殿を建つる事を命じ給ふた、(列王記略上五章五節)。而して神は此の家を建つる爲に材料の準備を命じ給ふた、『家は建つる時に、鑿石所にて切り整備へたる石にて造りたれば、造れる間に家の中には鎚も鑿も其の他の鐵器も聞えざりき』(列王記略上六章七節)。ソロモンの殿の建造は一の預言

的行爲であつた。之はキリスト・イエスを以て其の首位者とする「靈的家」即ち神の殿の建造を預言した、(ヘブル書三章六節)。神の「靈的家」は活ける石を以て築き上げられる、(ペテロ前書二章三—五節)。神は其の預言者をして斯く記述せしめられた、「此の故に神エホバ斯く言ひ給ふ、視よ、我シオンに一つの石を置き其の基となせり。これは試みを經たる石、貴き隅石、固く置きたる石なり。これに依り賴む者は慌つる事なり。われ公平を準繩とし、正義を錘とす。斯くて雹は嘘僞にて造れる避所を除き去り、水は其の匿れたる所に漲り溢れん」(イザヤ書廿八章十六、十七節)。

此の預言が「隅の首石」を置うる時に行はるゝ審判の時に關して發しられてある事實を見逃がしてはならぬ。預言に依つて示されし此の石を置くと云ふ事は神の組織制度に關係があるのである。然らば此の石とは何ぞや。聖書は屢々示してイエス・キリストを王として呼ぶ。神の家即ち神の組織制度に屬する者となる事は、神の御國に參與し、エホバの王室の一部となると云ふを意味す。彼等は神の殿の柱とされる。神の國(天國も同じ意味)と云ふ字の意味はキリストに適用される事が屢々ある、(マタイ傳廿一章四十三節)。此の故に聖書によつて云ふと、預言者イザヤの言ひし「石」とは即ち神の膏そゝぎ給ひし王キリストを表象す。又聖書は或る場合にイエス・キリストを「神の國」の名で呼ぶ、(ルカ傳十七章廿一節)。斯かる場

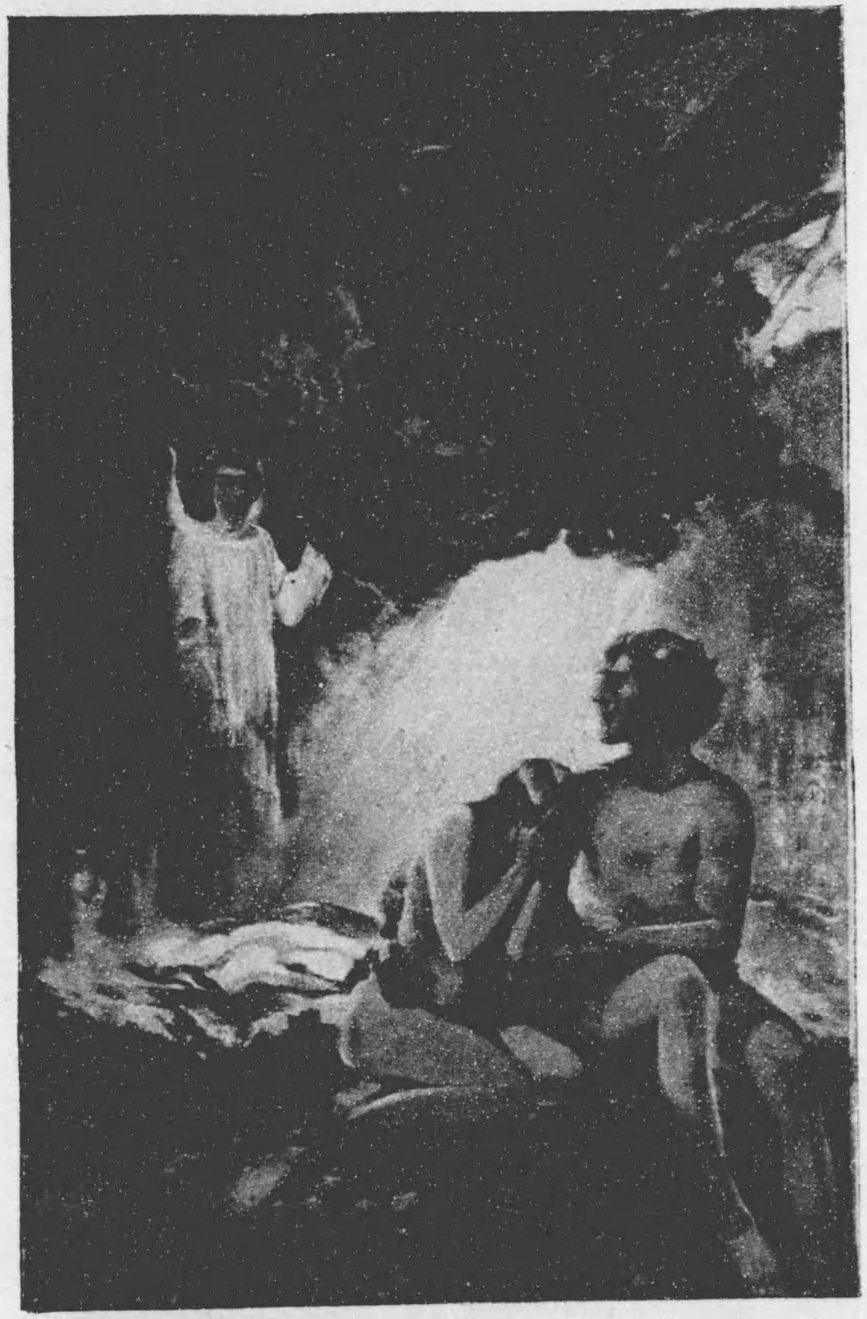
合に於ける神の國は王を意味するのである。使徒ペテロはイザヤの預言を引照して「隅の首石」即ち首位者はイエス・キリストなりと決定的に示す、(ペテロ前書二章一—八節)。使徒パウロも亦同じ預言を引照してイエスを以て首石なりと識別す、(ロマ書九章卅二、羣三節。エペソ書二章廿、廿二節)。故に此の「石」とは神の膏そゝぎ給ひし王を意味するのであつて、其の石が置かられたと云ふ事は神が神の子と稱する人々の前に彼等の支配者として受膏者なる王イエスを提供されたるを意味してゐる。

イザヤ書廿八章十六節の此の預言は二重に成就すべきものである。最初の緒圖的成就はイエスが地上に居られた時に行はれた、そして之の完成的成就はイエスが後日其の殿に臨まれる時に行はれるのである。イスラエル人は神の模型的民、即ち預言的民であつた。イエスは彼等に遣はされた。そして彼等以外には地上に於ける何者にも道を傳へられなかつた。イエスは王として膏をそゝがれた、而して直ちに御國に關する宣明を開始された。然し其の時には未だ此の「石」は置かられたのではなかつた。猶太人(イスラエル人)はイエスを以て彼等の王として受け容れる機會を得なければならぬ。そしてイエスは先づ試みられなければならぬ、何故なれば預言は示して之は「試みを經たる石」と告げてゐるからである。イエスは三年半の奉仕期間中に於て最も峻嚴なる試みに付され、敵なるサタンは總らゆる方策を盡してイ

エスを滅ぼさんと努めた（マタイ傳四章一一十節）。イエスは熱火の試練下に於て神に忠信にして眞實なる事を立證された、此の故にイエスは「貴き石」である。豫定の時至るに及びてイエスはエルサレムに入城して御自身をイスラエル人の王として彼等の前に提供された。之ぞ即ち此の預言の縮圖的成就であつた（マタイ傳廿一章一一十節）。

教職者と政治家及び商業家の諸權者を以て合成されたるイスラエル人の代表分子はイエスを王として受け容れる事を拒絶し、一般民衆をも自分等と同じ行動に出でしめんとした。其の時より間もなく主イエスは殿に行き、兩替する者を殿より追ひ出し、彼等を以て神の國に反對する者であると叱責された（マタイ傳廿一章十三節）。其の翌日イエスは無花果の樹に向つて呪ひの聲を發しられたが、之によつて猶太人には最早望なく、彼等に對する恩惠が閉ざられる旨を宣言されたのである。その同じ日、イエスは猶太人の支配階級に向つて語られて居る時に、詩篇百十八篇の預言を引照して斯く告げられた、「聖書に工匠の棄てたる石は家の隅の首石となれり。之主の爲し給へることにして我等の眼に奇しとする處なり」と錄されしを汝だ讀まざるか。此の故に我汝等に告げん、神の國を汝等より奪ひ、その果を結ぶ民に與へらるべし」（マタイ傳廿一章四十二、四十三節）。イエスは此處で彼等に示して、御自身を王として彼等の前に提供するも、彼等はイエスを受け容れる事を拒絶すべく、それによつて御國に

メビロン　　第一五七圖
ヤムンの組織制度の宗教的分子を表象す



第四〇頁　ふ與にパエとムダアを衣皮パホエ神

犧牲の祭物に依つて罪の蔽はるゝ事を預示す

参與するの特權が彼等より取り上げらるゝ旨を告げられたのである。

ソロモンが家を建てる前に先づ其の建築材料を集めたる如く、神も又イエス・キリストによつて、ペンテコステの時よりキリストの再臨の時までの間に神の靈的家を建つるに必要なる材料を集められたのである。ペンテコステの記念すべき日に忠信なる猶太人の弟子等は聖靈を受けて、神の家の成員たるべき候補者とされた。其の時に彼等は其處で家を建つる爲の材料とされ、豫定の時に殿の建つ時まで保存さるゝ事となつたのはパウロが示したる通りである、(テモテ後書四章六―八節)。ペンテコステの時より引き續き主イエスの再臨迄の全期間は神の家を建つるに用ふる「活ける石」を準備する爲にエホバによつて用ひられた。之に就て斯く記さる、「汝等も亦靈的家を築くに用ひらるゝ活ける石である」と、(ペテロ前書二章三―五節)。天界に於て神の王室即ち神の國の成員たるべき受膏者の全部は「活ける石」であつた。彼等はキリスト・イエスの如くに準備され、豫定の時に於て神の家の中に置ゑられるのである。それ等の「活ける石」の置ゑられる仕事は極めて靜肅になされて此の世の注目を惹かざるは、恰も建築材料がソロモンの殿に置ゑつけられた時に何等器具の音響や混亂の無かつた事と同樣である、(列王記略上六章七節)。

一九一四年（大正三年）、神は其の膏そゝぎし王を王座に立てゝ、敵の眞つ只中に於て支配を開始せん事を彼に命じられた、（詩篇二篇六節。百十篇二節）。それより三年半後即ち一九一八年（大正七年）に主イエスは其の殿に臨まれた。其の時イエス・キリストは彼の民と稱する人々の前に自らを彼等の王、地上の正當なる統治者として提供されたのである。此の時イエス・キリストは既に「試みを經たる貴き隅の首石」であつた。天界に於て行はれたるキリスト・イエスと敵なるサタンとの間の大戰に於てキリスト・イエスは大勝を獲られた、故に彼は試みを經たる後に「忠信にして眞實」なる大征服者となられたのである、（默示錄十二章七―十節）。此の預言の完成的成就に於てイエス・キリストが自らを王として提供されし時に、主イエスを信じて受け容れたる者の歡喜は甚だ大なるものあり、主イエスは彼等にとつては全く「貴き隅の首石」であつた。

其の時に、「隅の首石」を置くと云ふ預言の成就は完了した。然る後に眞理の顯示と宣明は續々と行はれ、之はサタンが人々の眼を盲ます爲に築き上げ居たりし嘘僞の避け所を摘發して之等を洗流すに用ひられた、（イザヤ書廿八章十七節）。使徒ペテロは此の預言を引照して云ふ、『そは聖書に錄して我選びし所の貴き隅の首石をシオンに置く。これを信ずる者は辱しめられじとあればなり』（ペテロ前書二章六節）。

神の膏そゝぎし王キリスト・イエスはシオンの基であり、又隅の首石である。建築物の礎石たるものは其の建築物の全重量を擔ふ。建築が進行するに從ひ、建築の角度や外廓の決定さるゝ時が來る。其の建築物に對する礎石が置ゑられる時に、錘線が其の上に降下され、他の總ての石材は其の礎石に一致して切り整へられるのである。ソロモンによつて建てられる神の家の建築用石材は、石切場に於て豫め切り整へられてあつた故に、建造に際しては其處で何等の音響も聞かず、又鐵器や鎚の音も聞こえなかつた。其の如く神の榮光の家に於ても然りであつて、其の「活ける石材」は豫め切り整へられありて、何等の音響もなく混亂も見ずして共に集められて建てられるのである。建物の礎石が置ゑられて、他の石材は皆之に一致して切り整へられる、何故なれば之等の石材は隅の首石の形狀に肖せられなければならぬからである、（ロマ書八章廿九節）。

讀　き

エホバの預言者は此の「貴き隅の首石」に就て斯く語る、之は『イスラエルの兩の家には躓く石となり、妨ぐる磐とならん』（イザヤ書八章十四節）と。イスラエルの家は二分されてゐる。其の（第一）は南部に於ける支配階級であつて彼等は神の律法を知ると稱し、又イエスの事を聞いてイエスがメシヤなる事の證據を充分に提示されたる者等、又（第二）は一般の民

衆にして主として國の北部に住める者である。イスラエルの指導者等は口を以てエホバに近づけども其の心は神より遠かに離れてゐた。民衆に向つて神の言を敎ふる事は彼等の責務なりしに拘らず、彼等はそれを爲さなかつた。民衆は王の來るを待つやうに告げられてゐた。そして彼等はイエスの事を聞き、若しイエスがそれを避けられなかつたならば、彼等はイエスを强いて王位に上げんとしたのである、(ヨハネ傳六章十五節)。イエスが自らを王として彼等に指示された時にイスラエルの支配階級はイエスを拒絶し、又民衆の殆ど大部分も亦イエスを拒絶したのである。「兩の家」即ちイスラエル人の兩部分はイエスをメシヤとし、王として受け容れる事に躓いた。唯イスラエル人の中の「遺殘者」がイエスをキリストとして受け容れ、爾後忠信を持續したのである。之即ち此の預言の縮圖的成就であつた、(ロマ書九章卅二、卅三節。十一章五節)。

ペンテコステ以來、主イエスの再臨迄の期間に福音が宣べ傳へられて多くの人々が之を聞いて信じた。之等は又「兩の家」即ち兩部に分類された。敎職者は「キリスト敎」と呼ぶ彼等の宗敎制度を組織し、此の制度の中に於て政治家や軍人、富豪を「群の長たち」となした。多數の貧しい人々が此の敎會制度に加入した。然し彼等は貧しくして無知であるとの理由で後方に押し込められて了つた。

而して一八七八年、神がその民に基礎的眞理の復興を始められた時に、多くの人々は諸敎會制度より出で來り、神の御言を研究し、最も聖き信仰を築くべく互ひに援け合ふ爲に集まつた。之等の人々はイスラエルの他の靈的家を形成した。此の「家」の中にも兩種の分類が顯はれた。其の一は敎會の指導者であつて、敎會內に於ける知識と位置の勝れたるの理由によつて、他よりも多くの惠まれたる光榮の場所を得るを當然とする者、而して他の一つは眞理を愛して、彼等が天に擧げられ、主の御許にとり上げられる時を期待する人々であつた。之等兩部の人々の間には又、眞に神を愛して、其の試煉に耐え得たる人々もあつた。

神の齊そゝぎし王、即ち「石」なるキリストは一九一八年に其の殿に來て、自分を王として提示された時に「置うる」事が完了した。其の後に「躓き」が發生した。所謂「キリスト敎會制度」は名目的キリスト敎會制度と呼ばれてゐる。一九一八年に之等の諸敎會制度はキリストを王として受け容れる事を拒絶し、其に替ふるに國際聯盟と云ふ一制度を以てした。此の故に彼等は「石」に躓いて倒れたのである。而して之等の諸敎會制度より脫れ出でゝ主イエスの再臨在の實證を悟り知つて受け容れたる者等の上にも火の如き大試煉が來た。

之等の多數は此の時、主イエスの再臨在と、其の統治の開始されたる事、其の殿に臨まれし事に就ての證據を受け容れる事を拒絶して、彼等も亦躓き倒れて道より離れ去つたので

ある。唯此の試煉に耐えて、熱火の試みを經て出で來れる者のみが潔められて「遺殘者」を形成した。之等の者こそ神の組織制度の一部とされたのであつて、他は皆脱線して離れ落ちて了つたのである。故に實證は示して、イスラエルの「兩の家」が共に躓き倒れて其處に「遺殘者」が殘つた事を立證してゐる。一九一八年に於ける大試煉は、主イエスが其の殿に來られて、「隅の首石」を置く事が其の時に完了した事を立證する更に他の證據である。

「其の日」

預言の中には「其の日」と云ふ語が屢々用ひられてゐるが、之は神がシオンを築かるゝ時の期間を特に意味してゐるのである。「其の日」とは主の日である、何故なれば神エホバが其の王を王座に擁立し、シオンを築く爲に彼を遣はし給ふ日であるからである。其の證據として神の預言者の此の言に聽け、『我が爲に義の門を開け、我その内に入りてヤハに感謝せん。こはエホバの門なり。義しき者は其の内に入るべし』（詩篇百十八篇十九、廿節）。

一九一四年（大正三年）、神エホバが其の王を王座に擁立されし時（詩篇二篇六節）に神の國は其の權威を行使し始めたが、其の時に「門」として示されある入口が開かれ、此の門を通じて義しき者が神の組織制度の中に入る事となつたのである。之に就て預言者は又示す、『我汝に感謝せん、汝我に應へて我が救となり給へばなり』（詩篇百十八篇廿一節）。預言の此の部分

は、主が其の承認せし者を義の外服の中に包み、彼等に救の衣を與へて、之により彼等が神の組織制度に屬する者なる事を識別せしめられた時に特に適用されるのである。然る後に預言者は更に云ふ、

『工師の棄てたる石は隅の首石となれり』（詩篇百十八篇廿二節）と。神の膏そゝぎし王キリストは神の民と稱する者等の前に提示されたが、多數の者は此の王を拒絶し、唯「遺殘者」のみによつて受け容れられた。王を受け容れたる「遺殘者」は主イエス・キリストが今其の殿に居給ふ重大眞理を悟り知り、感謝して斯く云ふ、『これエホバの成し給へる事にして我等の目に奇しとする所なり。これエホバの設け給へる日なり。我等はこの日に喜び樂まん』（詩篇百十八篇廿三、廿四節）。イエスは此の預言を御自身に適用されたが、此の預言に見ても「其の日」が何時であるかを明瞭に決定してゐる。神がキリスト・イエスを通じて己が聖名を擁護するの仕事を開始し給ふ時は即ち此の「其の日」である、故に之は「主の日」と呼ばれる、（詩篇百十篇二―五節）。

預言を研究する時に預言中に「其の日」と云ふ語が顯はれてゐたならば、研究者は之が其の預言の成就を開始する時であると考へればよい。「其の日」が何時であるかを一度決定したならば、「其の日」が「石」に關する場合に於ては一九一四年以降でなければ開始を見ず、又主イ

エスの忠信なる參與者に關する場合に於ては一九一八年より後でなければ開始を見ないと云ふ事が明瞭となる。其の時に殿級の者等は「婦の裔」と「蛇の裔」との間に戰ひがある事を悟り知ると共に、主に忠信なる者として勝者たらん事を切望して、歡喜と熱心の裡に斯く祈る、

「エホバよ、願はくは我等を今救ひ給へ。エホバよ、願はくは我等を今榮えしめ給へ。エホバの聖名によりて來る者は幸福なり。我等エホバの家より汝等を祝せり」(詩篇百十八篇廿五、廿六節)。

支配者

神の預言者は嘗に支配者たるイエス誕生の場所を預言したるのみならず、又主イエスが統治を開始する時と、シオンを築いて、遺殘者に對して神の組織制度の中に於ける一の場所を與へらるゝ時に就て預言した、「是の故に產婦の產み落すまで彼等を付し置き給はん、然る後、その遺れる兄弟イスラエルの子孫と共に歸るべし」(ミカ書五章三節)。此の時は、シオンが產の苦みをなして神の國を產み落し、之が活動を開始する時に相當するのであつて、此の時に遺殘者は神の組織制度の中に入れられるのである。

「彼はエホバの力により、其神エホバの名の威光に依て立ちて其群を牧ひ、之をして安然に居らしめん。今彼は大なる者となりて地の極にまで及ばん」(ミカ書五章四節)。シオンの首位

なる王キリスト・イエスが立ちて、其の民を牧ひ給ふ事は此の預言の示す通りであつて、イエスは之を神エホバの聖名と威光とによつて成さるゝのである。之即ちイエスの御言と全き一致を示してゐる。即ち云ふ、「主人來りて其の目を醒まし居るを見なば此の僕は幸福なり。誠に我汝等に告げん、主人自ら腰に帶し、僕を食に就かせ、前みて之に給仕すべし」(ルカ傳十二章卅七節)。

キリスト・イエスは全地の支配者として、又大預言者、祭司、王として立ちて「なくてならぬ糧」を以て己が家族を養ひ、彼等に預言の解明を與へて、歡喜せしめ給ふのである。神は敵前に饗宴を設け、御慈愛を以て遺殘者の爲に備へ置きし歡喜の糧を以て彼等を饗應し給ふ、(詩篇廿三篇五節)。彼等は此の糧をエホバの聖名に於て受けて光榮と尊貴の全部を神エホバに歸するのである。此の預言は一九一八年以後主の民の上に特に成就を見た。

「七つの目」

神エホバは預言者をして斯く記述せしめ置かれた、「其の日、エホバの枝は榮えて輝かん。地より生り出るものゝ實は勝れ、又美はしくして逃れ殘れるイスラエルの益となるべし」(イザヤ書四章二節)。此の預言は、不忠信者より分離して神に對する忠誠と忠信とを示したる者に關するものなるは瞭かである。義の外服の內に入れられ、神の組織制度の一部とされた

る事によつて彼等はエホバの「枝」の一部とされ、「僕」級の者とされたのである。之に就て他の預言者は記す、『我必ず我が僕たる枝を來らすべし』(ゼカリヤ書三章八節)と。此の『僕』級はキリスト・イエスを其の首位者となし地上にある『忠義にして智き僕』の成員を以て形成される、(イザヤ書四十二章一節。マタイ傳廿四章四十五節)。『我が僕なる枝』とは神の組織制度を預言したものであつて、特に主イエス・キリストが其の殿に臨みて、シオンを築かるゝ時のそれを指示してゐるのである。然る後に預言者は記す、『ヨシュアの前に我が立つる所の石を視よ、此の一箇の石の上に七箇の目あり。我自らその彫刻をなす。萬軍のエホバ之を言ふなり。我この地の罪を一日の内に除くべし』(ゼカリヤ書三章八、九節)。

「七」の數字は完全若くは全部を表象し、又「目」は智慧を表象す。『此の一箇の石の上に七箇の目あり』とは受膏者なる王キリスト・イエスは全部の光と智慧とを有して、其の殿級の者を照らし、彼等を智くされると云ふ事を表象してゐる。預言者の示す如くシオンの榮えある首位者はヨシュア即ち殿級の成員の前に置かれて、キリスト・イエスは彼等の上に眞理の光を照射し給ふのである。之ぞ即ち預言が今開かれ始まる事を示す理由であつて、主イエスが其の殿に臨みてシオンを築かれたる後に預言の解示が始まる事を示す理由である。殿級の成員は今、神の組織制度中に於ける一部署に任命された。而して若し彼等が殿の狀態に留まり、地上に於ける己が歩みの最後まで神に對する忠信を持續するならば、彼等は神の組織制度中に一の永久的場所を與へられ、天使等よりも高き位置を其處に占むる事となるのである、『萬軍のエホバ斯く言ひ給ふ、汝若し我が道を歩み、我が職務を守らば我が家を司どり、我が庭を守る事を得ん。我また此處に立てる者ども(天使等)の中に往來する路を汝に與ふべし』(ゼカリヤ書三章七節。尙ほルカ傳廿二章卅節を見よ)。

「光輝」

シオンが築かるゝ時にシオンに在る者は神エホバの榮光を顯し示すのであつて、敢て人間の榮光を顯すのではない。神はその預言者をして斯う記述せしめて置かれた、『エホバはシオンを築き、榮光を以て現はれ給へり』(詩篇百二篇十六節)。多くのクリスチャンは甚大なる誤謬に陷り、エホバの榮光よりも寧ろ人間を讃頌するの愚を演じてゐる。聖書は告げて、エホバはその聖名を崇めしめんが爲に一の民を召し出されたと明示してゐるが、斯かる民はエホバの榮光を讃頌しなければならぬのである、(使徒行傳十五章十四節。ペテロ前書二章九、十節)。若しクリスチャンと稱する者にして人間を讃頌しつゝあるならば、其の者は神の組織制度に屬し居らざるを自證するものにして、又若し彼が神の組織制度の中に在りとするならば、彼は當然その中より放逐さるべき者である、(ヨハ記卅二章廿一、廿二節)。『その殿に在るすべて

の者呼ばはりて榮光なるかなと云ふ」(詩篇廿九篇九節)。此の故にエホバの榮光を語る事を怠り、又は拒絶して、人間を教師として宣揚する者は殿級に屬せざる者である。

多くの自稱クリスチヤンは其の教ふる者を片隅に押し込めて了つた。教職者は常に之を成し、又他の者をも斯くの如くに邪導したのである。神の民を教ふる者は神エホバと其の愛子イエス・キリストである。子イエスは常に其の光榮を父エホバに歸し給ふ。殿の狀態に入れられてエホバの榮光を讃頌しつゝある所の遺殘者は如何なる艱難に遭遇するとも彼等の師なるエホバとキリストを片隅に押し込めて了ふが如き事をなさぬ、「主は汝等に艱難の糧と苦痛の水とを與へ給はん。汝を教ふる者再び隱れじ。汝の目はその教ふる者を常に見るべし」(イザヤ書卅章廿節)。其の時、殿に在る者は皆神の榮光を語るのである。

之に一致して神の預言者は亦記す、「神は美麗きの極みなるシオンより光を發ち給へり」(詩篇五十篇二節)。シオンが築き上げられ、キリスト・イエスを以て首位者とする榮ある「枝」が父なる神エホバの榮光を照り輝かし、シオンの成員が皆エホバを讃頌する時に、エホバは己が組織制度なるシオンより光を輝かし給ふのである。之等の者が神を讃頌し、神の組織制度より光の照り輝く時に此の世の人々も又それを見る事が出來るやうになる。

エホバはその預言者によつて、「其の日」に神の殿に立ちてエホバの聖名を讃頌する者に對し、彼等を己が組織制度の成員として斯く豫告し置き給ふ、「エホバは地の極より霧をのぼらせ、雨の爲に電光を造り、其の庫より風を出し給ふ」(詩篇百卅五篇一—七節)。預言者エレミヤは之と同樣の言を用ひて語り、更に其の前後の關係に於て此の言が「其の日」主がシオンを築かるゝ時に適用さるゝ事を示してゐる、(エレミヤ記十章十三節。五十一章十六節)。

電光は空中電氣の發射に伴ふ光輝である。此の故に電光は神の眞理が照射さるゝ事を表象してゐる。

電光の全部はエホバより發す、「汝等春の雨の時に雨をエホバに乞へ。エホバは電光を造り、大雨を人々に賜ひ、田野に於て草蔬を各々に賜ふべし」(ゼカリヤ書十章一節)。

電光には普通雷鳴と降雨を伴ふ。電光先づ閃きて暗き中に既に在りし事物を照射す。之即ち神の電光はエホバを待ち望む者の爲に其の聖言を照射し、神と其の組織制度に敵對する者の正體を曝露するを表象するのである。故に此の預言は、主が其の臨在を己が民に顯示し、雨を以て表象されある眞理を以て彼等を爽快ならしめ、神の言の上に大なる光輝を與へて彼等に對する聖旨を顯示し、それと共に敵對者の正體を曝露せしめらるゝ時に成就するを示してゐるのである。

雷鳴はエホバの御聲を象徴す、『汝は力の如き腕ありや。神の如き聲を以て轟き渡らんや』(ヨブ記四十章九節)。『汝の雷鳴のころは暴風の中に在りき。電光は世を照らし、地は震ひ動けり』(詩篇七十七篇十八節)。『榮光の神は雷鳴を轟かせ給ふ』(詩篇廿九篇三節)。雨は爽快なる眞理を象徴し、神の民の心に歡喜と爽快とを與ふるものである、『彼等は我を望み待つ事雨の如く、口を開きて仰ぐこと春の雨の如くなりき』(ヨブ記廿九章廿三節)。『神よ、汝の嗣業の地の疲れ衰へたる時、豊なる雨を降らして之をかたくし給へり』(詩篇六十八篇九節)。『エホバに感謝して歌へ、琴に合せて我等の神を讃め歌へ。エホバは雲を以て天をおほひ、地の爲に雨を備へ、諸々の山に草を生えしめ給ふ』(詩篇百四十七篇七、八節)。

以上の諸聖句は何れも眞理と共の照射がエホバより發する事を示してゐる。神の言は眞理である、(ヨハネ傳十七章十七節)。故に諸々の預言は示して、神は豫定の時至るに及びて電光と雷鳴と降雨を來らし、己が民に神の眞理を顯示して彼等を爽快ならしめ給ふ事を告げてゐる。神が斯くの如き方法を以て預言の意義を顯はし示し始めらるゝ時は、主イエスが其の殿に來てシオンを築かれた後である、『時に神の殿天に開かれ……又電光と聲と迅雷……ありき』(默示錄十一章十九節)。

若し人が暴風雨間近き暗闇の中に坐してゐる時、突如電光の閃きを受けるならば、彼は暗

の爲に今まで見えざりし周圍の事物を見る事が出來る。最初の一閃では左程明瞭に見えざりしものも、次ぎの一閃では更に明かとなり、電光の閃きの加はる毎に其の目的物は益々明かとなり行く。神の言に於ても又然りである。神の殿が開かれて光輝の閃きが神より來た後、其處には眞理を表象する「大降雨」があつたが、其の時、神に己が全部を献げてゐた神の民は最初異象の或る物を示された。然し此の異象即ち諒解の度は愈々明かとなつて行つたのであつて、恰も電光の照射毎に周圍の事物が明かになり行くと同樣である。之ぞ即ち今日、神の眞理が從前にも勝して遙かによく諒解される處の理由である。今日は眞理が諒解さるべき神の御豫定の時であつて、神の組織制度に屬する者等の爲に特に豫め定め置かれたる時である。愈々開かれ行く多くの預言に關する眞理の上に他の人々の注意を喚起し、彼等をして又之を諒解せしめ、勇氣と希望を持たしむるは神の組織制度に屬する者に與へられたる大なる特權である。「天に於ける人の子の兆」即ち神の大組織制度を顯はし示したのは即ち神エホバより照射する處の此の電光であつた。

神の組織制度の具象

エホバは常に一の組織制度を有し給ふた、そして大昔の時よりロゴスはエホバの組織制度の主役であつた。サタンの叛逆と人間の墮落せる爲に神はロゴスを地上に於ける一個の人間

とされた。イエスがヨルダン河で洗禮を受けし時より後、神の「新被造物」が始まつたが、之は神が地上全人類を己に和解せしむる目的の爲に使用さるゝ器となるのである。イエス・キリストは試煉下に置かれて、己が忠信と眞實とを立證された。そして彼はエホバによつて天の最高位に擧げられ、再び神の組織制度の首位者として永遠に及ぶ事となつた。而して之は預言の成就であつた、(詩篇百十篇四節。ヘブル書七章十七節)。

神は模型的シオンを組織されたが、之は眞のシオンの來る事を預言してゐたのである。神はキリスト・イエスを首位者として眞のシオン即ち眞の神の組織制度を組織された。キリスト・イエスの忠信なる追隨者等はシオンの中に築かれて其の一部とされ、地上人類に關する神の聖旨を執行するに用ひられるその組織制度に屬する者とされた。主イエスは神の代理執行者として己が忠信なる追隨者の爲に神の組織制度中に一の場所を備へられたのである。

神の預言者エゼキエルは一の異象を示されて之を記錄した。エゼキエルは神に全く獻身してゐた若者であつて、彼は『末の世に遇へる』人々の爲に預言を記錄すべき預言者としてエホバより用ひられた。その異象の中に四箇の「生物」が顯はれて何れも四つの面と四つの翼を有してゐた、「その面とその翼は上にて分かる。その各々の翼二箇は彼と此と相つらなり、二箇は身を覆ふ。各々その面の向ふ所へ行き、靈の行かんとする方に行く。又行くに廻ることなし。その生物の形は熱れる炭の火の如く、松明の如し。火、生物の中に此處かしこに行き、火輝きて其の火の中より電光出づ。其の生物走りて電光の如くに往來す」(エゼキエル書一章十一—十四節)。

エゼキエルは此の異象中に於て又よく相似たる四箇の輪を見た、「我生物を見しに、生物の近邊にあたりて、その四箇の顏の前に、地の上に輪あり。其輪の形と作は黃金色の玉の如し。その四箇の形は皆同じ。その形と作は輪の中に輪のあるが如くなり。其の行く時は四方に行く。行くに廻ることなし。その輪輞は高くして畏ろしかり。輪輞は四箇ともに皆遍く目あり。生物の行く時は輪その傍らに行き、生物地を離れて上る時は輪も又上がる。凡て靈の行かんとする所には、生物その靈の行かんとする所に行く。輪また其の傍らに上る。之生物の靈、輪の中にあればなり。之の行く時は彼も行き、之の止まる時は彼も止まり、これの地を離れて上がる時は輪も共に上がる。これ生物の靈、輪の中にあればなり。生物の首の上に畏ろしき水晶の如き穹蒼ありて其の首の上に展開がる。穹蒼の下に其の翼直く開きて、之と彼と相連なる。又各々一箇の翼あり、その各々の二つの翼、此方、彼方にありて身を覆ふ。我その行く時の羽音を聞くに大水の音の如く、全能者の聲の如し。其の聲音の響は軍勢の聲の如し。其の立ち止まる時は翼を垂る。その首の上なる穹蒼の上より聲あり、その立ち止まる時

は翼を垂る』(エゼキエル書一章十五—廿五節)。

其の時預言者は其の異象の中に穹蒼を見、その穹蒼の上、萬物の上に榮光の者の坐す寶座の如きものあるを見た、『首の上なる穹蒼の上に靑玉の如き寶座の狀式あり、その寶座の上に人の如き者在す。又我その中と周圍に磨きたる銅の如く、火の如くなるものを見る。其の人の腰より上も、腰より下も火の如くに見ゆ。其の周圍に光輝あり。その周圍の光輝は雨の日に雲に現はるゝ虹の如し。エホバの榮光かくの如く見ゆ。我これを見て俯れ伏したるに語る者の聲あるを聞く』(エゼキエル書一章廿六—廿八節)。

「四」は全部若くは完全を表象する爲に神の用ひ給ふ今一つの數である。故に此の異象は完全なる何物かを預言してゐるのである。之は豫定の時に於て必ず成就する處の異象即ち預言である。此の異象中に現はれてゐる生物や、其の他のものは一致して、一の戰車の如き組織制度が天にまで屆き、其の全部の上にエホバが指揮し給ふ事を示してゐる。此の組織制度中にエホバの次ぎに位する者として現はれてゐるのは、神の大祭司長にして代理執行者たるキリスト・イエスである。主イエスと共に天界に於て此の偉大なる活ける組織制度の一部を形成しつゝある者は既に死して、神の組織制度中に主イエスが備へられたる其の「一の所」に甦らされ、主が殿に來り給ひし時に報賞を受けたる使徒等及び忠信なる追隨者等である。

其の組織制度中にはエホバの聖旨を執行するケルビムあり、彼等は神の組織制度に屬する者として現はれてゐる。又純潔にして大能の天使の全軍あり、神の組織制度中に各自その部署を與へられて己が責務を遂行す。下方なる地上には「キリストの足」を形成する處の「遺殘者」ありてキリストの體の成員として地上に立ち、神の與へ給ふ部署を守つて神の組織制度の中を行き歩む。而して神が彼等に示し給ふ所を爲す者は皆その組織制度に屬する者である。

此の異象中に示されたる全組織制度は神の智慧の中に廻轉し、天より示さるゝ神の完全なる智慧に指導さる。故に此の異象は神の完全なる大組織制度を預言したるものである。預言者は此の異象中に言ふ、『其の火の中より電光出づ』と。之ぞ即ちエホバがその眞理を神の組織制度を通じて遣はし給ふ事を意味するのであつて、電光とはエホバより來る眞理の照射を表象す。此の異象は預言である、而して之は今成就の途上に在る、何故なれば主イエスが其の殿に來られし時に神の組織制度が活動を始めたからである。

幸福なるかな、其の成員よ

今地上に在りて神の組織制度の成員となり居れる者は、其の數に於て甚だ少く、又四面を敵なるサタンと其の代理者によつて包圍されてゐる。彼等は恐るゝ必要を有しない、何故なれば彼等は恐怖を有さないからである。彼等は完全なる愛を以てエホバを愛す、而して完全

なる愛は恐怖を取り除く、（ヨハネ第一書四章十八節）。彼等に勇氣を與ふる爲に神はその預言者をして斯く記さしめ置かれた、「嗚呼、エホバよ、我がたましひは汝を仰ぎ望む。我が神よ、我汝に依り賴めり。願はくは我に愧を負はしめ給ふ勿れ。我が仇の我に勝ち誇ることなからしめ給へ」（詩篇廿五篇一、二節）。

彼等は主に全く献身するが故に其の敎ふる者なるキリストを片隅に押し除くる事を再び爲さないのである、（イザヤ書卅章廿節）。彼等は全く恐怖を知らない、何故なればエホバは其の御手を彼等の上に加へて保護してゐられるからである、（イザヤ書五十一章十六節）。エホバは彼等を己が家の中に入れられた、斯くして彼等は「至高き神の隱れたる所」に住ひつゝあるのであつて、神は彼等に向つて斯く示し給ふ、「幽暗には行む疫癘あり、日午には害ふ劇しき疾あり、然れど汝恐るゝ事あらじ」（詩篇九十一篇六節）。

エゼキエルの見たる異象と其の成就は示して、パウロ及び其の他の忠信者は既に甦らされ、天界に於ける神の組織制度中の己が部署にそれ〴〵就いてゐる事を立證してゐる。地上に於て「遺殘者」を形成する者等は、神の組織制度の見えざる榮光の場所に入る前に先づ復活の變化を經なければならぬ。此の變化は死によつて來る、何故なれば彼等は祭物の契約の中に在るからである。彼等は忠信を持續する限り死を恐れない、何故なればイエスは一の預言

を示して其の預言が神のシオンを築き給ふ後に於て成就する事を告げられたからである。即ち云ふ、「今より後主に在りて死ぬる死人は幸福なり、靈も亦云ふ、然り、彼等は其の勞苦を止めて息まん。其の功これに隨はん」（默示錄十四章十三節）。

之等の忠信者こそ主に在り、神の組織制度の地的部分に屬する者であつて、彼等がその復活の時まで己が忠信を持續する時に、彼等の變化は「瞬く間」に來るのである。斯かる者に向つて主は今、斯く示し給ふ、「汝死に至るまで忠信なれ、さらば我生命の冠を汝に與へん」（默示錄二章十節）と。故に今日、イエス・キリストの證言を保ちて神の組織制度の中に在りて其の與へられある持場に精勵しつゝある者は實に幸福なる者である。

第六章　サタンの組織制度

エホバの偉大なる預言者は天界に於ける二つの大なる異象が殿級聖徒に顯はれる事に就て預言して云ふ、『亦一の異象天に現はる。一條の大なる赤き龍あり、之に七つの首と十の角あり、其の七つの首に七つの冕を戴けり。其の尾にて天の星三分の一を曳き、之を地に墮せり。此の龍、子を產まんとする婦の前に立ち、產むを待ちて其の子を食はんとす』（默示錄十二章三、四節）。此の聖句は一の預言であつて、此の預言は「婦」が男の子を產み落す事の預言の成就する時に同時に之が成就する事が瞭かである。而して若し此の結論が正確ならば、我等は之の成就する時の事實をも發見指示し得る筈である。

此の預言は赤き龍が婦の產み落さんとする男兒を呑み食はんと用意してゐる光景を示す。

「龍」とは神が惡魔に與へられし名稱の一である。之はサタンと彼の代理者の全部に適用される。赤色は火を意味してゐるのであつて、即ち破壞的のものを意味す。「龍」とは「呑み喰ふ者」と云ふを意味す。此故に「赤き龍」とは、正義を以て全地を統治せんとする新國家政府即ちシオンの生み出せる男兒を、シオン諸共に呑み喰はんとする極惡無道の組織制度を表象するのである。

故に此の預言中に在る『大なる赤き龍』は即ち神の組織制度に敵對する處のサタンの組織制度を表象してゐる。サタンの組織制度には見ゆる部分と見えざる部分がある、何故なればサタンは靈者であつて人間の肉眼には見えないからである。「七」の數は肉眼には見えざる處の「完全」若くは「全部」を表象し、「十」の數は肉眼に見ゆる處の「完全」若くは「全部」を表象す。此の二種の數は神の定められし象徵的數であつて、此の預言中に二種の數が使用されてゐると云ふ事は即ち見ゆる部分と見えざる部分とを抱括する處の惡魔の全組織制度を表象してゐるのである。『七つの冕』はサタンが已の組織制度の上に行使する處の人間の肉眼に見えざる全權能を表象す。サタンが其の全組織制度の上に行使する權能は人間の肉眼には見る事が出來ないのである。『十の角』は惡魔が全地諸國諸民の上に行使する統治の全權能を表象す。イエスは其の弟子達に示してサタン即ち惡魔は此の世の見えざる支配者であつて、神と

キリストに敵する者であると告げられた、(ヨハネ傳十四章卅節)。使徒パウロも之と同じ證言を與へてゐる、(コリント後書四章三、四節)。

サタンの組織制度の見えざる部分は各部に分類され、其の各部はそれ〴〵部長によつて整然と運用されてゐる事は聖書の示す通りである。我等は此の事實を見ゆる部分の組織方法に見て推知する事が出來る、何故なれば見ゆる部分は常に其れを支配する處の見えざる部分の反映であるからである、然のみならず神の預言者は示して『ベルシヤの君』と『ギリシヤの君』が主の天使に敵對する事を告げてゐるが彼等は瞭かに惡魔を代表してゐるものである、(ダニエル書十章十三、廿節)。そして惡魔は彼の組織制度の分子なる地上諸國に君臨する人間をして己を代表せしめてゐる事を明示してゐる。使徒パウロは「幽暗を宰る者たち」(注意…原語は復數)は神の組織制度の成員に敵對する者であると告げてゐる、(エペソ書六章十二節)。

多くの人々はサタンに關して全く誤り告げられて、彼は差程問題とするに足る者でなく、既に遠き昔に縛られて了つたのであつて、彼は別に己の組織制度などを持つては居ないと敎へられてゐる。同時に多くの人々は欺かれてサタンなる者は角と蹄とを有し、石綿製の耐火火搔棒を以て彼の地獄の火を搔き廻して彼の手中に落ち込んで來た靈魂を永劫に苦惱せしめてゐると云ふやうな道化物語を妄信してゐる。斯くの如き嘘說妄談の發案者はサタン自身であつて彼の代理者である敎職者等は之を用ひて人々を混亂し、彼等をして眞理の道に眼を盲きしめて居るのである。

聖書はサタンを以て、狡猾で詐術に富み、胡麻化す事の上手な詐欺的の僞善者で、正義に對する敵であると說明してゐる。彼は自ら光の使者の如くに顯はれ、眞理の少量を以て其の恐るべき嘘僞を巧みに塗り隱して不注意なる者を欺くのである、(コリント後書十一章十四節。テサロニケ後書二章九節)。彼の遣り方が餘りに狡猾で巧妙である爲に多數の善良なクリスチヤンは欺き去られて、サタンは此の世の諸國政府とは無關係であると考へ、唯極めて少數者のみがサタンとその組織制度を有してゐる事實を看破してゐるに過ぎない。此の故にサタンの組織制度に關して其の發生と生育、目的に就ての諸實證を闡明するは此の際最も重要なる事である。

パビロン

ルシファーをして神に叛逆せしめてサタンとなし、神の敵とならしめた處の動機は强慾そのものであつた。彼は萬物に君臨する位を欲した。そして彼は萬物が神エホバの前に跪いてエホバを拜する如き崇敬を自らも獲得せんと欲したのである。彼は早速天界の靈者と地上の人間の間に己が組織制度を完成せんと着手した。地上に於ては彼は人類を先づ宗敎制度に組

織した。然る後彼は商業制度を造り、武力の權を以てそれを支持擁護せしめ、其の後に政治的制度を組織した。彼は己が組織制度中の商業、政治兩部の有力なる指導者たちを同じ組織制度の宗教部に屬する『群の長たち』となし、之によつて金權、教權、政權の三者を以て成る合成體を組織したのである。バビロンはサタンの組織制度の教權をよく代表し、アッスリヤは政權を、エジプトは金權を代表してゐる。之等三大世界強國の代表する金權、教權、政權の三要素は支配權として常に目立つて有名である。

バビロンはハムの子のクシの產めるニムロデより始まつた、『彼の國の起源はシナルの地のバベル、エレク、アッカデ及びカルネなりき』(創世記十章六－十節)。ニムロデと云ふ名は「叛逆者、若くは統治する者」(Cruden氏)を意味す。ニムロデは祖父のハムに與へられし土地を離れて、北方に在るセムの地を襲ひ、シナルの地に定住した。之に依て彼はサタン特有の强慾と叛逆的精神を顯はしたのである。神は豫定の時至るに及びて忠信者を召して約束のカナンの地に遣られるのであつて、神はアブラハムを召し出して彼をサタンと其の代理者の支配する組織制度中より取り去られた。即ち神はアブラハムをサタンの組織制度發生の地より携へ出されたのである。

Babylon 即ち Babel は本來の語原から云ふと Bibil と綴られるのであつて「神の門」と云ふ

を意味す。ヘブル語の Babel は混亂を意味す。『是の故に其の名はバベル(混亂)と呼ばる、是はエホバ彼處に全地の言語を亂し給ひしに因りてなり、彼處よりエホバ、彼等を全地の表に散らし給へり』(創世記十一章九節)。之は亦セシヤク(エレミヤ記廿五章廿六節。五十一章四十一節)とも呼ばれてゐるが、之は「月の神」と云ふを意味す。バベルの邑はニムロデ(叛逆者)によつて建設されたが、之明かに眞の神エホバを排斥して彼等自身によつて名を成さんが爲であつた事を示してゐる、(創世記十一章四節)。其の邑に Babil 即ちバビロンの名の附されたるは之がエホバを無視して建てられたる事を立證するのであつて、敵なるサタンの組織制度の發因となつたのである。此の邑は斯くの如くに全能の神エホバを愚弄輕蔑して建てられたのである。

聖書は示して叛逆の邑の守護神は Bel であつたと敎ふ、(イザヤ書四十六章一節。エレミヤ記五十章二節。五十一章四十四節)。聖書語學の權威ストロング博士等はベルの名は Baal の略稱であつて主公、夫、神、君を意味してゐると聲明す。エホバは主なる神に在して其の民と其の組織制度に對しては「夫」である、(イザヤ書五十四章五節)。サタン即ち別名ベル若くはバアルはニムロデを以て見ゆる首位者として建設されたる地上の組織制度の夫であり、主であつた。ニムロデは己が實母の夫となつた。此の故にサタンはバビロンなる己が組織制度を創設

して之と婚姻したのである。サタンの行動の全部は彼の貪婪を滿たさんが爲である。エホバは其の預言者を通じて示し給ふ、「多くの水の傍に住み、多くの財寶を持てる者よ、汝の終り、汝の貪婪の限り來れり」(エレミヤ記五十一章十三節)。エホバはサタンに「龍」の名稱を與へられたが之ぞ「呑み喰ふ者」と云ふを意味し、エホバは斯くしてバビロンの首位者なるベル即ちバアルを識別せしめ、此の邑即ちバビロンの組織制度は他のものを「呑み喰はん」とする處の惡魔の組織制度である事を示して置かれるのである、(エレミヤ記五十一章卅四節)。

バアル崇拜は惡魔の宗教を建設した。惡魔崇拜者は惡魔の命ずるまゝに行動した、(列王記略上十六章卅一—卅三節。十八章十九—四十節)。宗教はバビロンの邑の組織制度中に於て特に優れてゐた部分であつた。此の理由は即ち人々の心をエホバより離反し、彼等をして惡魔と其の造りしものを崇拜せしめんが爲であつた。

或る語學者は「ビル」とは「混亂者」を意味し、言語の混亂されたるはバビロン人がベルを崇拜したる結果であつて言語の混亂は直接エホバに因るに非ずと主張してゐる。シナルに於ける言語の混亂(創世記十一章一—九節)はサタンと其の代理者の惡行爲の結果であつて、此の故にサタンは當然混亂者と呼ばるべきである。サタンは宗教と其の方法を混亂し、人々をして眞理に盲目ならしめた。神エホバは其の忠信なる證者に命じて惡魔と其の組織制度に對して

斯く宣言せしめ給ふ、「汝等國々の中に告げ、また宣れ示せ。旗を樹てよ、隱す事なく宣れ示して言へ。バビロンは取られ、ベルは辱められ、メロダクは碎かれ、其の像は辱められ、其の木像は碎かるると」(エレミヤ記五十章二節)。

ニムロデは此の惡しき邑の最初の王であつて、彼は巨人にして野獸狩りの名人であり、大遠征家であつて至る處で土地を征服し、己自身を高く上げて人々の前に己を神エホバよりも大となした。此の故に彼は宗教家と資本家と政治家の三特色を兼ね備へてゐた。然し乍ら其の當時バビロンの邑の組織制度の主なる目的は惡魔崇拜の宗教を樹立して神エホバの聖名の上に誹謗を到來せしむるにあつた。

其の後に至りネブカデネザルはバビロンの王としてニムロデの位を繼いだ。彼は惡魔の宗教の擁護者であつた、「バビロンの王其の道の首處、その路の岐處に止まりて占トをなし、箭を揺り、テラピム(偶像)に問ひ、肝を察べ居るなり」(エゼキエル書廿一章廿一節)。「玆にネブカデネザル一箇の金の像を造れり。其の高さは六十キユビト、其の横の廣さは六キユビトなりき。乃ち之をバビロン州のドラの平野に立てたり」(ダニエル書三章一節)。彼は殘忍惡逆の暴君であつた、(ダニエル書四章廿七節)。エホバの預言者はバビロン王のネブカデネザルを「龍」に譬へて語つた、「龍の如くに我を呑みたり」(エレミヤ記五十一章卅四節)。此の故に神は

其の預言者を通じてバビロン王のネブカデネザルが惡魔の代理者なる事を示して彼に惡魔の有する名稱の一つを與へて置かれたのである。預言者エレミヤは又此のバビロン王を呼んで『セシヤク王』(エレミヤ記廿五章廿六節)と言ふ。

預言者イザヤはルシファー即ち惡魔を以て瞭かにバビロンの支配者なりとして上記エレミヤの云ふ處を支持してゐる、『汝この歌を唱へ、バビロン王を攻めて云はん、虐ぐる者いかにして息みしや。金を徵發る者如何にして息みしや。あしたの子明星(ルシファー)よ、如何にして天より隕ちしや、諸々の國を倒しゝ者よ、如何にして斫られて地に倒れしや。汝さきに心の中に思へらく、我天に上り我が位を神の星の上に擧げ、北の極なる集會の山に坐し、高き雲漢に上り、至上者の如くになるべしと』(イザヤ書十四章四、十二、十三節)。之即ちニムロデが南方の代りに北に於けるバビロンに己が組織制度を建てた事實と一致す。此の故に彼は己が制度を成立する爲に他の人々の居住したる土地を攻略したのである。

斯くして諸實證はバビロンの王、支配者、神、夫がサタン即ち老蛇と呼ばるゝ惡魔である事を明白に立證してゐる。此の故にバビロンはサタンの「妻」であつて、其の爲にバビロンは惡しき淫婦を以て譬へられてゐるのである。

從來バビロンは名目のみの教會制度を表象してゐるのであつて、此の教會制度は本來神の

榮光に入るの門なりしも、墮落して誤信と混亂に入るの門となり、「稗子」と僞善者を主として合成されたる一混合集團であると信じられてゐた。然し聖書は此の結論を支持してゐない。

バビロンは決して神とキリストに屬する名目のみの制度でなかつた。バビロンは決して神エホバの側に立つた事なく、此の惡制度はエホバを愚弄して惡魔の宗教を行ふ爲に造られたものであるから、從つて之は本來神より離れ去つたと云ふが如き事は斷じてないのである。此の故に表象的バビロン制度はキリスト教に從ひし事もなく、又今日に於ても從ひ居らず、之は終始惡魔の宗教であつて惡魔に屬する組織制度である。所謂キリスト教以外の諸宗教が惡魔の組織制度に屬してゐると云ふ問題は此の場合全然切り離して取扱はるべきである。

此の組織制度がシナルの平野で成り立つた時よりエホバは之をバベル即ち「混亂」と呼ばれた。此の故にバビロンは榮光に入るの門である所の組織制度を一度も表象した事はないのである。エホバは之を「混亂」と呼ばれた、何故なればエホバは其處で人々の言語を亂されたからである。バビロンは最初から惡魔を崇拜して來た。之等の諸證に見るもバビロン(バビル)はエホバの大敵なるサタン即ち惡魔によつて成立せる組織制度なる事が極めて明かである。此のバビロンの名稱は最初から惡魔の組織制度に與へられて今日まで引き續いてゐるのである。神がバビロンを「處女」の名で呼ばれた事は單なる嘲弄的反語と見るべきである、(イザヤ

書四十七章一節)。

聖書は示して惡魔の組織制度には二樣の部分あり、其の(一)は人間の肉眼に見えざる最高幹部であつて全組織制度を事實上に支配し、其の(二)は人間の肉眼に見ゆる部分である。此の組織制度はサタンを神として戴く處の「今の惡しき世」と形容されてゐる、(ガラテヤ書一章四節。コリント後書四章三、四節)。見えざる部分を「天」と呼ぶ、何故なれば天界は地上人間の眼で見る事が出來ないからである。一方見ゆる方の部分は「地」と呼ばれてゐるが之は人間の肉眼に見ゆるからである、(ペテロ後書三章七節)。『アモツの子イザヤが示されたるバビロンに關する重負の預言……我惡しき事の爲に世を罪し、不義の爲に惡しき者を罰し、驕れる者の誇りをとゞめ、暴ぶる者の傲慢を低くせん……斯くて亦われ萬軍のエホバの忿恚の時、烈しき怒りの日に天を震はせ、地を動かして其の處を失はしむべし』(イザヤ書十三章一—十三節。默示錄十七章三—五、十八節)。

古代のバビロンの都は天界と地上の兩方面を共に表象してゐた。エデンの泉から湧き出づる流れはユフラテ河となつて流れてゐたが、之はアダムがエデンの園から放逐された後の人間の狀態を表象してゐる。バビロンの都は此の河の兩岸に建てられた。河は北より南へ向けて流れてゐて都を兩分してゐる。河の一方には寺院が建てられ、他の一方には王の宮殿あり、此の兩部は一の美しき橋と地下隧道を以て連絡されてゐる。河によつて兩分された都は兩岸に接し、河流は此の中間を流れて行く。此の故に河は惡魔の支配する其の組織制度の見ゆる部分と見えざる部分との中間に在る人類を表象す。惡魔は此處で其の統治をなし、彼の組織制度は民衆の支持を受ける事によつて成立す。バビロンは聖書の中で「淫婦」を以て形容され、預言者は此の大淫婦の坐する處の水は『諸民、群集、諸國、諸音なり』(默示錄十七章十五節)と示してゐる。

惡魔默錄

バビロンの都即ち惡魔の組織制度は聖書中に於て姦淫、不貞、魔術、殺人其の他の諸罪を以て斷罪されてゐる、(默示錄十七章五、六節)。大なるバビロンは『その姦淫に因りて干るゝ怒の酒を萬國の民にも飲ましめたり』(默示錄十四章八節)。『そは萬國の民かれが奸淫に因りて干るゝ怒の酒を飲み、地の諸王かれと淫を行ひ、地の商賈彼が甚しき奢華に由りて富を致せばなり』(默示錄十八章三節)。『今汝少き時より勤め行ひたる呪詛と多くの魔術とを以て立ち向ふべし。或ひは益を得る事あらん。或ひは敵を恐れしむる事あらん。汝は謀畧多きによりて倦み疲れたり。かの天を占ふ者、星を見る者、新月を占ふ者、若し能はゞいざ立ちて汝を來らんとする事より免がれしむる事をせよ』(イザヤ書四十七章十二、十三節)。『そは汝の

中の商人は地の尊貴者なればなり。また萬國の民汝の魔術に惑はされたればなり』(默示錄十八章廿三節)。『之は偶像の地にして人々偶像に迷へばなり』(エレミヤ記五十章卅八節)。『諸の地を醉はせたり。國々その酒を飲めり。こゝを以て國々狂へり』(エレミヤ記五十一章七節)。

『かの淫亂に因りて世界を汚したる大淫婦』(默示錄十九章二節)。

之等の諸聖句は何れも酒と淫婦とを聯結してゐる。此の酒は牧師や禁酒論者の騷ぐが如き本來の酒そのものでない事は明白である。神は斯く明示し給ふ、『然れど彼等も酒によりてよろめき、濃き酒によりてよろほひたり』(イザヤ書廿八章七節)。『彼等は醉へり、然れど酒(實際の酒)の故にあらず、彼等はよろめけり、然れど濃き酒の故に非ず』(イザヤ書廿九章九節)。彼等は惡魔が發案して彼等教職者をして他に教へしむるの方法を執つた處の惡行に泥醉してゐる事が明かである。それは淫婦の酒であつて、神の組織制度の眞の酒に對する僞物である、『智慧は……其の獸を屠り、其の酒を混ぜ合せ、其の饗筵を備ふ』(箴言九章一、二節)。

從來は『此の淫亂の酒』(默示錄十七章二節)とは、名目のみの教會制度が政權と姦淫したる結果『新郎』イエスに對する不貞を顯はしたる事を意味するのであると信じられてゐたが、斯かる事は決して有り得べからず。實際のバビロンにしても又象徵的のバビロンにしても新郎イエスと婚約關係にあつた事は決して無かつた。此の意味に於て教會は姦淫の罪を負はな

いのである。バビロンは惡魔と婚約し、婚姻したのであつて、彼女が宣布する教理は他の者をして彼女と共に姦淫の罪を行はしむるを教ふるに在る。地の諸王は彼女と共に此の姦淫の惡事を犯した。

バビロンが惡魔の力の所產である以上、彼女は神の御前に於て全く不義不淨、不德なる組織制度を表象する處の不潔なる淫婦に過ぎなかつた。地の支配階級が彼女と結合して其の宗教を受け納れてゐる以上彼等も又不潔の罪を以て斷罪さるべきである。而して如何なる制度にても一度は曾つて神の組織制度に屬したものが彼女と結合し、誘惑されたならば其のものは不義不貞の姦淫罪を以て律せらるべきである。特に一度は神との契約關係にあつた者が偶像崇拜を爲すならば之瞭かにバビロン特產の姦淫、不淨、不義、不潔を以て自らを汚瀆したものである。『彼(ユダの王ヨラム)またユダの山々に崇邱を作りてエルサレムの民に姦淫を行はせ、ユダを惑はせり』(歷代志略下廿一章十一節)。エルサレムの民は神との契約關係にあつた民であつた。然し彼等が惡魔の宗教を受け納れた時に彼等は惡魔の組織制度即ちバビロンと姦淫の罪を犯したのである。此の方則は靈的イスラエルにも適用さるべきである。彼等は曾つては一度神との契約關係にあつたが後に惡魔の酒即ち僞教理を以て自らを汚瀆して「淫婦らの母」なるバビロンと姦淫の罪を犯した。而してバビロンの名は之等姦淫者に附せられ

る、何故なれば彼等は彼女の家族に入籍したからである。

エホバはバビロンを以て『地の淫婦らと憎むべき者との母』（改譯默示錄十七章五節）と命名された。事實彼女はエホバの御前に憎まるゝ處の總ての事の母である。彼女は『預言者ダニエルによつて云はれたる所の殘暴憎むべき者』（マタイ傳廿四章十五節）の母である。バビロンの名稱は本來はサタンの組織制度に屬するものであるが、此の惡組織制度所產の「子孫」にして之を代表する處の全部にも適用されるのである。

惡魔の本來の目的は神エホバを讒謗し、人々をして神エホバより離反せしめてサタン自身を崇拜せしむるにあつた。サタンは神の被造物が神を愛して之を讚頌する者である事を知つて、彼は己が組織制度を開始すると共に最初から宗教を以てその主體となし、然る後に其の組織制度に商業と政治とを加へて彼等をして惡魔の宗教を採用せしめた。惡魔が人々をして眞の神エホバより離反せしむるに用ふるのは主として其の宗教の部分であるから、此の宗教の部門が最初から最も重要なものとして造られた事は瞭かであつて、之が又エホバの御前に於て最も憎まるべきものとなるのである。

ルシフアーも其の心の中に惡の見ゆるに至るまでは神の組織制度に屬してゐた。彼は其の貪婪と强慾の念を起して他の被造物より崇敬を己に受けんと欲した時に惡しき宗教を創設した。彼は己が產業の多きによりて暴力を產出し、他の被造物を支配せんとする我慾を滿たさんが爲に政治的權力即ち支配權を產出して己が組織制度の中に滿たしたのである、（エゼキエル書廿八章十四—十八節）。

ルシフアーをして神に叛逆せしめ、惡しき組織制度を造つて其の「夫」とならしめたる原因は全く彼の不忠背信に在つた。此の故にバビロンは不貞不義の大淫婦であつて、不潔不淨の組織制度を表象し、全ての「淫婦」制度の母である。サタンの組織制度の見ゆる部分即ち地上の諸國政府は「獸」をもつて象徵されてゐる、何故なれば之等は殘酷、粗暴で壓制的であるからである。此の「獸」はサタンの組織制度を支持運用し、人々の上に坐して地の諸國を支配するのである、（默示錄十七章三、五、十五、十八節）。神の預言者は惡魔の組織制度を以て『諸々の國の主母』（イザヤ書四十七章五節）と呼ぶ。之瞭かに反語である。以上の諸事實に見るもバビロンとは惡魔によつて組織されたる處の惡魔の組織制度の全部を指示するのである。

埃及

バビロンは最初に組織されたりとは云へ、埃及は偉大なる支配力を有したる最初の國であつた。埃及の主權力は其の武力にあつたが、之は政府の商業的要素を擁護するものである。武力設立に對する眞の目的は領土の保全にある。殆んどの戰爭の目的は他國の領土を奪取せ

んとする貪婪と強慾にあつた。而して之を爲さしむる者は其の國家の支配階級の一部である資本家即ち商業的分子であつた。エホバが其の民に命じて戰はしめられたる戰爭は惡行爲に對する神の審判の執行であつて、其の聖名を保持し、常に善き結果を得んが爲であつた。神は生命の授與者に在すが故に其の嘉と見給ふ時には何時でも生命を取り上ぐるの全き權能を有し給ふ。然しエホバ以外の者に於ては決して然らず。惡魔の組織制度は我慾と不義の目的の爲に戰爭をなし、其の目的の爲に大なる武力制度を設けてゐるのである。

Egypt とはギリシヤ人と羅馬人によつて呼ばれてゐる名稱であつて、ヘブル語の名稱は Miraim で、「海を圍む者」と云ふを意味す。多分最初のパロ即ち埃及王がナイル河を改築した結果此の名稱が起つたものか。之はサタンに向つて發しられた言によつて支持されてゐる、『汝云ふ、河は我の有なり、我自己の爲にこれを作れりと言ふ』(エゼキエル書廿九章三節)。此の名稱はヘブル語の Mizor より變化したるもので「緣取つたもの、堤、包圍、艱難」を意味してゐる。ヘブル語の Mizor は埃及の名稱に用ひられてゐる、(英文改譯イザヤ書十九章六節。舊七章廿五節。ヨカ書七章十二節欄外參照)。

Rahab とは「傲慢」を意味し、埃及に與へられたる宗教的名稱であつて、神エホバに對して尊大傲慢なる其の態度を表象してゐるのである、(詩篇八十七篇四節。八十九篇十節)。埃及は

亦「ハムの地」と云ふ別稱を有してゐるが、之即ちハムの子のミツライムより來たのであらう、(創世記十章六節)。

古代埃及の地は非常に肥沃であつて特にナイル河の流域が然りであつた。其の農產物は毎年定つて氾濫するナイル河の水に賴つてゐた。從つて人々はナイル河を偶像的に崇拜したのであるが、之ぞサタンが人々を眞の神エホバより離反せしむる爲に用ひた奸手段であつて、人々をして彼等の神々即ちサタン所產の偶像を崇拜せしめて、其等の神々がナイル河に由て人々に祝福を與ふるのであると迷信せしめたのである。聖書は埃及に降雨なきを示してゐる、(申命記十一章十、十一節)。雹や電光、電鳴等は神がエーセを埃及に遣はして其の地に災禍を與へられる時迄埃及の地では未曾有の現象であつたに相違ない。『モーセ天に向ひて杖を舒べたればエホバ雷と雹を遣り給ふ。又火出でゝ地に馳す。ホホバ雹を埃及の地に降らせ給ふ。斯く雹降り、又火の塊雹に雜りて降る甚だ厲し。埃及全國には其の國を成してより此のかた未だ斯かるもの有らざりしなり』(出埃及記九章廿三、廿四節)。此の未曾有の火の現象は即ち電光を意味するのであつて、地上に紫電飛び、其の地の人々をしてエホバが眞の神なる事を悟らしめたのであつて、斯くして神は埃及の地に其の聖き御名をなされたのである。

埃及人は皮膚病に惱まされたが又其の血液の惡しき狀態を表示するのであつて、生命が血そのものである以上、之は彼等が罪の爲に甚だ惡しき健康狀態にあつた事を表象してゐる。神はイスラエル人に示して若し彼等が熱心にエホバの言を求め、義しきを行ふならば神は曾つて埃及人の上に加へたるが如き病氣を少しも與へざるべしと告げられた、(出埃及記十五章廿六節。申命記七章十五節)。神に不從順であつた時にイスラエル人は埃及人が苦んだ如き忌はしき病氣に惱まされた、(申命記廿八章廿七、六十節)。斯くして神は其の民に示してエホバのみが災禍と罪とを除き去るの權威を保有する唯一者に在す事を敎へられたのである。

埃及人は馬を使用するので有名であつた、「ソロモンの馬を獲たるは埃及とコアよりなり……埃及より上り出づる戰車一輛は銀六百にして馬は百五十なりき」(列王記略上十章廿八、廿九節。同時にエゼキエル書十七章十五節を見よ)。馬の本來の使用目的は軍事のためである。戰車は馬に曳かれるのであつて戰爭の爲の道具である。之等のものが埃及に備つてゐたと云ふ事は即ち埃及が當時の偉大なる武斷國であつて、他の諸國を脅威してゐた事を明かに立證してゐる。斯くの如く馬が誤用されてエホバに對する信賴が破壞された事に就て、エホバは馬に對して好意ある言を與へては居られない、「助けを得んとて埃及に下り、馬に依り賴む者は禍ひなるかな。戰車多きが故に之に賴み、騎兵甚だ强きが故に之に恃む、然れどイスラエルの

聖者を仰がず、エホバを求むる事をせざるなり」(イザヤ書卅一章一—三節)。

エホバが馬を使用する事を好み給はざる事は、神がヨシアに命じて馬を除き去らしめし事に見て瞭かである、「またユダの王等が日(日の神)の爲に捧げてエホバの家の門における馬を移せり。此の馬はパルリムにある侍從ナタンメレクの室に居りしなり。彼また日の車を皆火に焚けり」(列王記略下廿三章十一節)。

イスラエル人の敵は馬と戰車とを備へて神の民を攻めんとて襲ひ來る、「時にエホバ、ヨシユアに言ひ給ひけるは彼等の故によりて懼るゝ勿れ、明日の今頃われ彼等をイスラエルの前に付して盡く殺さしめん。汝彼等の馬の足の筋を截り、火をもて彼等の車を焚くべし」(ヨシユヤ記十一章六節)。「足の筋を截り」とは即ち馬の動作を止めて之を無用ならしむる事である。ダビデもペリシテ人の馬に對して同樣の事を行ふた、(サムエル後書八章四節)。

從來馬を以て敎理を表象してゐると信じられてゐたがそれは誤りであつて、馬は戰爭と武力政策、好戰、宣傳等武力的制度を表象してゐるのである。

埃及が武斷國であつた事は其の國人が牧畜等平和な職業を嫌忌してゐたに見るも瞭かである、「牧者は皆埃及人の穢らはしとするものなればなり」(創世記四十六章卅四節)。馬や武具を多く使用する處の人々や組織制度が牧畜の如き平和な職業を嫌ふ事は一般知悉の事實であつ

て、之は最初埃及人によつて示され、神は其の事實を其の御言の中に記錄して置かれるのである。

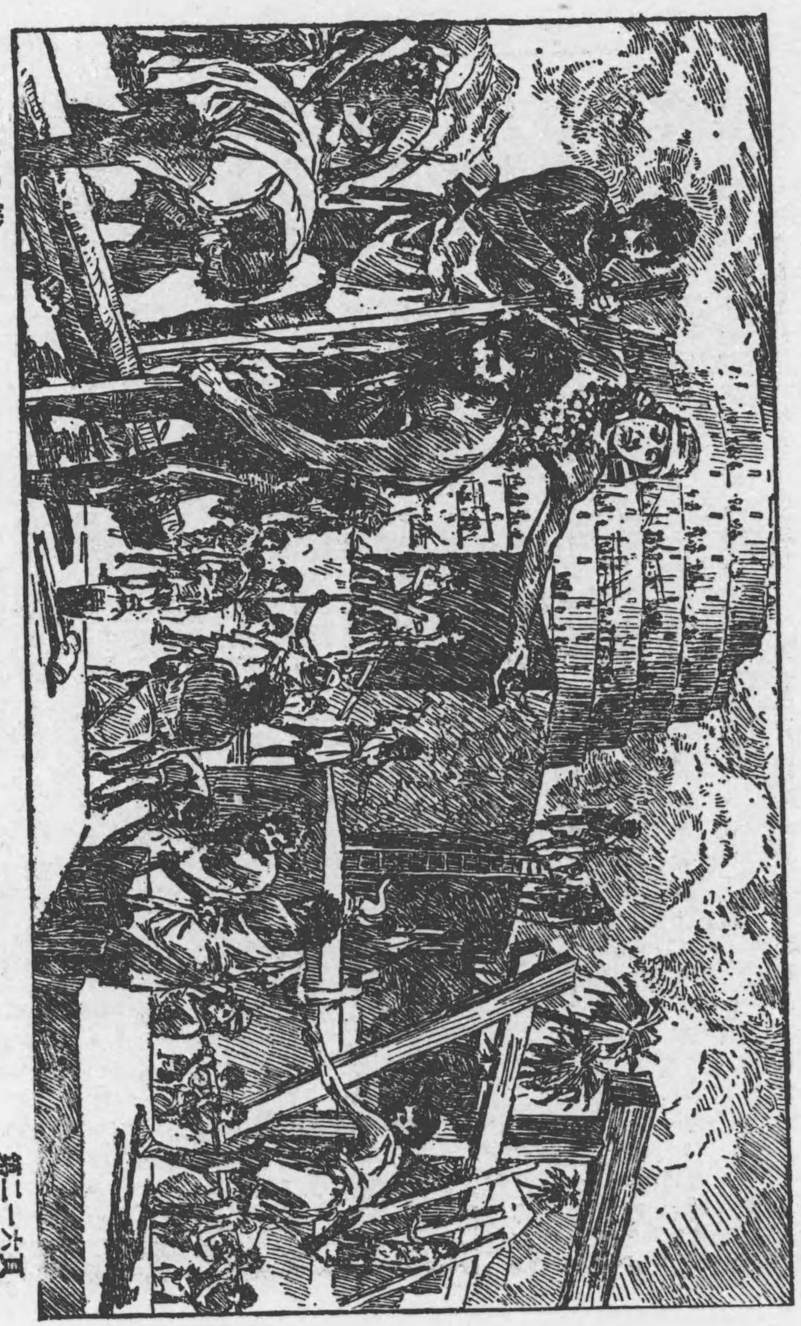
埃及人は惡魔を崇拜し、惡魔の宗教を行ふた。埃及の魔術者は其の學者や星占家であつて魔法の線を描いて其れにより見えざる靈が人の運命を支配すると稱した。金櫃者即ち武斷の權力家は何れも惡魔の宗教に歸依し、政治家即ち支配者も同じく之を信奉した。埃及の支配者たちは皆神エホバに敵對して其の民を壓迫した。埃及王パロは激怒してモーセに言つた、

「エホバは誰なれば、我その聲に從ひてイスラエルを去らしむべき」(出埃及記五章二節)。

埃及の宗教が惡魔を信奉してエホバに敵對した事は左の聖書的立證に見るも瞭かである、

「埃及の諸々の神に罰を蒙らせん。我はエホバなり」(出埃及記十二章十二節)。「パロ朝に及びて其の心安からず、人を遣はして埃及の法術士と其の博士を皆悉く召し、之に其の夢を述べたり。然れど之をパロに解き得る者なかりき」(創世記四十一章八節)。「埃及人のたましひ失せて其の中空しくならん。我その謀略を滅ぼすべし。彼等は偶像及び呪文を唱ふる者、巫女、魔術者に求むる事をせん」(イザヤ書十九章三節)。「彼は埃及の地のベテシメシの偶像を毀ち、火をもて埃及人の諸神の室を焚くべし」(エレミヤ記四十三章十三節)。

埃及の支配階級は王と侯伯、宗教博士、武官及び建築家を以て成り立つてゐた、「パロの



バベルの塔

獸はサタンの建築を阻止する事に由つて己が最高至上者なるを顯示し給ふ

大臣等彼(サラ)を視て彼をパロの前に讃む」(創世記十二章十五節)。又ぞ埃及王が其の大臣即ち政治家をして己が身の廻りの事にまで容喙せしめてゐた事を示す。亦埃及に於けるヨセフに關して斯く記さる、「王は人を遣はしてこれ(ヨセフ)を解き、諸々の民の長は之を釋し、之をその家司となし、其の財寶を悉く司らせ、其の心の儘々にかの國の君たちを縛め、長老たちに智慧を敎へしむ」(詩篇百五篇廿-廿二節)。

宗敎營業者の爲に特別の保護が準備された、「但祭司の田地は購ひ取らざりき。祭司はパロより祿を賜はり居ればパロの與ふる祿を食みたるによりてその田地を賣らざればなり」(創世記四十七章廿二節)。惡魔の宗敎に於ては常に其の宗敎家の生活が保護されるやうに組み立てられてある。斯くして惡魔は常に其の宗敎と宗敎家とを優遇するのである。

パロは大戰車隊と其を曳く軍馬及び騎兵を多く所有してゐたと記さる、(出埃及記十五章四節。十四章七、九節)。「馬を車に繫ぎ、馬に乘り、盔を被りて立て。戈を磨き、甲を着よ。埃及はナイルの如くに湧き上り、其の水は河の如くに逆まくなり。而して云ふ、われ上りて地を蔽ひ、邑と其の中に住める者とを滅ぼさん。汝等馬に乘り、車を驅り馳らせよ。勇士よ、楯を執るエテオピヤ人、プテ人及び弓を張り挽くルデ人よ、進み出づべし」(エレミヤ記四十六章四、八、九節)。エテオピヤ人、プテ人、ルデ人は何れも埃及人の仲間であつて彼等の住む所

は埃及の國境である。

彼等埃及人が大建築家であつた事に就て斯く記さる、『督者を彼等の上に立て彼等に重荷を負はせて之を苦しむ。彼等パロの爲に府庫の邑ピトムとラメセスを建てたり』（出埃及記一章十一節）。偉大なる三角塔と寺院の建築されたのは埃及の國内であつた。而して之等の建てられたるは即ちサタンの命令に因つてであつた。埃及の支配階級に屬する者は何れも傲慢、横柄にして血に飢ゑ、暴壓、僭越、不敬であつた、（ヨブ記廿一章十四、十五節。イザヤ書十九章十一節）。

之等の諸實證は埃及がサタンの組織制度であるを確實に立證し、其の組織制度の見ゆる部分を支配する者は金權者であつて、彼等は己が我慾を遂行せんが爲に武力を設け、政治家をして其の持場を爲さしめんとする事を明かに示してゐる。埃及の宗教家は惡魔に屬して他の支配階級の上に怪しき感化を及ぼした。此處にも亦人々をして神エホバより離反せしめ、埃及に於ては其の王パロに依つて代表されてゐる處の惡魔に隷屬せしめんとするの奸手段を示す明白なる證據がある。此の事實を立證する爲に神は更に其の聖言の中に示して、埃及は全地を我慾のまゝに支配せんとするサタンに依て創設されたる惡魔の組織制度即ち「龍」であると告げて置かれる、『主エホバ斯く言ひ給ふ、埃及の王パロよ、視よ、我汝の敵となる。汝

その河に臥す處の鱷（龍……が正譯）よ、汝云ふ、河はわれの有なり。我自己の爲に造れり（エホバの干渉は御免を蒙る）と』（エゼキエル書廿九章三節）。

埃及の普通人民は皆其の支配階級に隷屬した、それは恰も今日サタンが己の組織制度に屬する支配者階級を使用して一般民衆を己自身に隷屬させてゐると同樣である。當時の民衆は其の支配者等がイスラエルの民に對して亂暴であつた程はイスラエルの民に亂暴ではなかつた。之は今日に於ても然りであつて、一般民衆は現在の支配階級者が爲す程は神の民に對して亂暴ではないのである。今日資本家たちは、神が一般人類の福利の爲に備へ置かれし天然產物を獨占しつゝあり、それと共に彼等は人々に聲明して、其の一般民衆を支配するは神が彼等に許して置かれる處の權能によるものであると主張す。埃及は神の民イスラエルの奴隷たる場所であつた、其の如く惡魔の組織制度は地上人類を奴隷になすのである。

アッスリヤ

アッスリヤも亦惡魔の一組織制度であつた。其の支配階級は矢張り政權、金權、教權の三權者が合一して形成してゐたが、就中最も優越なるは宗教政治即ち宗教が政治家によつて利用されたる處のそれであつた。人民の支配者なる政治家は之を便利なる方法として採用してゐた。

ヨナ書とナホムの兩預言書はアツスリヤと其の首都ニネベに關してのみ記されたるものであつて、惡魔の組織制度に於ては政治家が宗教を利用して人民を統治するを常套手段としてゐる事を明示してゐる。此の場合政權者は常に金權者即ち「巨人」たちによつて支持擁護援助されてゐて、同時に政治家は其の宗教制度に於ける「群の長たち」即ち有力者とされてゐるのである。世界强國なるアツスリヤに關する預言的記錄は「行伍を立つる時」の期間に實在する惡魔の組織制度の狀態と、サタンの組織制度と神の組織制度とが最後の戰鬪をなす直前に於けるサタンの組織制度の狀態を明示してゐる。之を換言すると即ち此の預言的記錄は今日、神の國顯現の時の切迫しつゝある時に於ける地上の狀態を預言してゐるのである。

ニムロデはサタンが地上に有する重要人物であつた。ニムロデはシナルの地にバビロン及び他の三都市を建設し、メソポタミヤに住んでゐた平和なセム人を征服した。アシュルはセムの子の一人であつて彼の子孫はバビロンの北方に當るメソポタミヤの平野に住んだ。ニネベはアツスリヤの首都であつて、英語欽定譯(キング・ジエームス)によると此の都はアシュルに依つて建設されたとなつてゐる、(創世記十章十一節)。然し此の記錄の訂正者は首都ニネベの建設者はニムロデであると主張してゐる。此の訂正は正確のやうである、(注意……日本語譯もニムロデを建設者となす)。創世記十章十節はニムロデの手柄を以て始まつてゐる。第六節より第廿節まではハ

ムの子孫に關する記錄であつて、ニムロデは其の中で最も有名なる人物であつた。セムの子孫に關する記錄は同章の第廿二節より始まつてゐるが、ハムの子孫の記錄中にセムの子アシュルの記錄が突然飛び込んでゐる筆はないのであるから、ニネベ建設者をニムロデなりとなす訂正は正確である。

「彼(ニムロデ)の國の起源はシナルの地バベル、エレク、アツカデ及びカルネなりき。其地より彼アツスリヤに出で、ニネベ、レホボテイリ、カラ及びニネベとカラの間なるレセンを建てたり、是は大なる城邑なり」(創世記十章十、十一節)。即ちニムロデは其の勢力を擴大してアツスリヤを征服し、其の首都としてニネベを建設したのである。

神の預言者ミカは、アツスリヤの地を「ニムロデの地」と呼ぶ、(ミカ書五章六節)。首都ニネベは「ニネベの王」(ヨナ書三章六節)と呼ばれたる統治者の住所であつた。ニネベは第二の世界强國なるアツスリヤの首都であつた。而して次にバビロンが第三の世界强國となつたのである。之等の事實はアツスリヤと其の首都ニネベはサタン即ち惡魔の組織制度であつた事を明白に立證してゐるのである。

ニネベは「大なる邑」と呼ばるゝ程に重要なる都であつて、「ニネベは甚だ大なる邑にして之をめぐるに三日を歷る程なり」とある、(ヨナ書一章三節。三章二節)。ヘブル人の一日の行

程は約二十哩とされてゐるからニネベの都の周圍は約六十哩に及んだのである。預言者は示してニネベには十二萬の左右を辨ぜざる者があつたと記す、（ヨナ書四章十一節）。之瞭かに小兒を指すもので、此の率を以てするならば同市の總人口は六十萬乃至百萬であつたであらう。

聖書の中にある獅子とは支配者を意味す、（創世記四十九章九、十節）。此故に殘忍なる獅子は亂暴、殘忍、暴壓的なる支配者を表象す。斯くの如き支配者即ち政治的道具は强大なる資本家の頤使下に行動し、其の惡しき行爲は僞善的なる宗教家の手で甘く塗り隱されてゐる。ニネベの都と其の支配者等を形容して預言者は云ふ、『獅子の穴は何處ぞや。若き獅子の物を食ふ處は何處ぞや。雄獅子雌獅子その小獅子と共に彼處に歩むに之を懼れしむる者なし。雄獅子は小獅子の爲に物を嚙み殺し、雌獅子の爲に物を縊り殺し、其の掠め得たる物をもて穴に滿たし、その裂き殺しゝ物をもて住所に滿たす』（ナホム書二章十一、十二節）。

此處にある預言は即ち殘忍なる政治家の一團があつて、彼等自身と同じく惡魔の組織制度に屬する其の仲間の爲に民衆を喰ひ物にするの光景を示す。此の預言は瞭かにサタンの組織制度中の特に傑出せる部分を示したるものである。而して神は此の惡しき組織制度に對して敵となる事を明示して置かれる。之ぞ即ち此處に示されある組織制度がサタン即ち惡魔のそれである事を明白に立證する處の證據である、（ナホム書二章十三節）。

アツスリヤ王は其の政治的勢力と强大なる政府制度を誇つた、『かれ云ふ、我が諸侯は皆王に非ずや』（イザヤ書十章八節）。ニネベの都は惡魔の宗教によつて汚瀆されてゐた。『妓女』即ち淫婦は惡魔の組織制度であつて、特に惡魔が人々を眞の神エホバより離反し、支配者と人民とを共に暗黑と惡の中に歩ましむる爲に使用する處の宗教分子を表象してゐる事を立證する明かなる證據がある、『是はかの魔術の主なる美しき妓女多く淫行を行ひ、その淫行をもて諸國を奪ひ、其の魔術をもて諸國を惑はしたるに因りてなり』（ナホム書三章四節）。

惡魔は國の支配者である政治家や資本家の迷信的恐怖を利用して彼等を己が支配下に置く。今日に於て多くの政治家や資本家が卜筮や「御みくじ」、降神交靈術、くちよせ等に依つて惡魔の「お告げ」に賴つてゐる事は一般既知の事實である。アツスリヤの政治家が其の持ち場を受け持つてゐる時に、一方同國の商業家等も等しく其の持ち場に働いた。アツスリヤ國、特に其の都ニネベは商業的富裕で有名であつた、『白銀を奪へよ、黃金を奪へよ、其の寶物限りなく、諸々の貴き器物夥多し』（ナホム書二章九節）。『汝は己の商賈を空の星よりも多くせり。吸蝗掠めて飛び去る』（ナホム書三章十六節）。讀者よ、留意せよ、留意して今日世界各國に實在せる武斷的資本政治が遙か以前に示されある此の預言と如何に一致符合するかを視よ。

アツスリヤと其の首都ニネベは大武斷國であつて嚴重に武裝されてゐた、『汝の重臣は群蝗

の如く、汝の軍長は蝗の群の如し。寒き日には垣に巣窟を構へ（冬は屯營し）日出て來れば飛び去る」（ナホム書三章十七節）。

エルサレムの前に陣營を張つたアッスリヤの軍勢は約二十萬であつた。或ひは其れよりも多くあつたかも知れぬが一夜の中に神によつて屠られた數は十八萬五千人であつたと聖書は記錄す。アッスリヤの王はエホバを侮辱し、神に獻身したる民をもエホバから離反せしめて惡魔に合體せしめんとした、（イザヤ書卅六章十三—廿節）。斯くしてアッスリヤと其の武力は惡魔によつて使用された事が明白である。

アッスリヤと特に其の首都ニネベは政治家、暴利資本家、武人及び宗教家によつて統治されたるサタンの組織制度であつて、常に他の者の血に餓ゑ、嘯僞と欺瞞とを以て民衆を利用して掠奪してゐたのである、「禍ひなるかな、血を流す邑、其の中には全く詭譎及び暴き行滿ち、掠め取ること息まず、鞭の音あり、輪の轟く音あり、馬は躍り跳ね、車は輾り行く」（ナホム書三章一、二節）。

サマリヤ人を造り出せるは即ちニネベの支配者等であつた、（列王記略下十七章廿二—四十一節參照）。惡魔の宗教である異教に交つた宗教的混合人種は表面エホバを崇拜する如くに裝つて實は迷信を行つてゐた。神は隙かに彼等を以て神の民の「敵」であると呼び給ふのであつて、彼等は自ら神の民に加はり、エホバの御名を以て呼ばれん事を欲しつゝ、一方それと同時にエホバの名に於て惡魔の宗教を行ふ者であつた。即ちゼルバベルと宗家の長等の許に至りて之に言ひけるは、我等をして汝等と共に之を建てしめよ、我らは汝等の神を求む。アッスリヤの王エサルハドンが我等を此處に携へ上りし日より以來我等はこれに犧牲を獻ぐるなり」（エズラ書四章一—三節）。神の選民であるイスラエル人が彼等と一緒になる事を拒絶した時に此の僞善的宗教家等はイスラエルの敵となつて之を迫害したのである、（エズラ書四章四—七節）。アッスリヤの支配者たちは之等の外國人をサマリヤの地に遣り、其處で再び繁殖せしめて彼等の間に惡魔の宗教を建設し、彼等の隣國であるユダヤ人を腐敗せしめんとしたのである、（列王記略下十七章廿四、廿九節）。

地上に在りしバビロン、埃及、アッスリヤの三大組織制度は何れも其の異なつた立場から惡しき特色をそれ〴〵示した。バビロンは「母」であつて、エホバは其の聖言中に之を『大淫婦』若くは『淫婦等の母』（改譯默示錄十七章一—五節）の名を以て表象してゐられる。他の全部の惡しき組織制度を產み出したる此のバビロン制度は依然引き續いてエホバに敵對し、其の聖名を譏謗し、神の受膏者を迫害してゐる。此の世の政治家と大資本家を腐敗して、彼等をして神エホバに敵對せしめたのは即ち惡魔の宗教である。神の聖書は示して豫定の時至る

に及びて政權者と金權者が或る程度迄眞理に目醒めて、老ひたる「大淫婦」を嫌忌するに至り、目に見ゆる地上の惡組織制度の全部を廢棄するに至る事を敎へてゐる、(默示錄十七章一—十七節。イザヤ書十章五、六節)。

故にアッスリヤは民衆を支配する政權者が金權者と共働して僞宗敎を援助擁護する時に於ける惡魔の組織制度の狀態を表象してゐるのであつて、之は最後の衝突が來るまで繼續するのである。同じく惡魔の組織制度なる埃及は金權者の支配振に特色を有し、彼等が武力を用ひて己が商業的權利を伸張し、政權者と共働して其の政治を行ふ狀態を表象してゐる。バビロンは全部の惡制度に對する「母」の役目を務めて惡魔の組織制度を代表するものとなり、他の全部の惡制度は皆此のバビロンに抱含されてバビロンの名稱を以て呼ばれてゐる。

製造眞

預言の研究者は神の偉大なる組織制度の各部がサタンによつて極めて巧妙に贋造されてゐる事を發見する。即ちサタンの目的は常に神エホバを敗かして嘲笑を加へ、其の聖名を全被造物の前に誹謗して全被造物をして偉大なる眞の神より離反せしむるにあつた。之等眞僞の正亂を併記するは頗る興味あるものである。

全能の神エホバ エホバはシオンの創造者に在して父たり、夫たる神に在して聖し。

シオン 神の組織制度を表象する「婦」にして、エホバの「妻」なり。「男兒」を產み出す役を務め、聖くしてエホバの承認を受く。

商 神の受膏者にしてイエス・キリストは其の首位者たり。神の御目的を實行する任務に服す。

僞

僞神サタン サタンはバビロンの創造者にして其の父たり、「大淫婦」の夫にして惡しき者等の父なり。

バビロン 惡魔の組織制度を表象する「婦」にしてサタンの組織制度全部に對する「母」たり、サタンの妻にして「大淫婦」たり、淫婦級組織制度の「母」なり。

商 サタンの受膏者たる支配者にしてサタンの任命を受けて地上の組織制度の見ゆる部分を支配す、特に宗敎的指導者に適用さる、(ヨハネ傳八章四十二—四十四節)。

神は其の最初の偉大なる預言に於て示された、「我(エホバ)汝(サタン)と婦(神に屬する婦、即ち神の組織制度)の間及び汝(サタン)の商と婦の商の間に怨恨を置かん。彼(婦の商)は汝の頭を碎き、汝は彼の踵を碎かん」(創世記三章十五節)。此の預言は必ず成就しなければならぬ

のであつて、然かも今此の時成就の途上に在るも其の最絶頂は未だ來らずして近き將來に在る。之等の兩種の齎は既に成育して今顯はれて來た。兩者の間の敵對行爲は既に顯はれ出したのである。

偉の異象

『また一の異象天に現はる。一條の大なる赤き龍あり。之に七の首と十の角あり、其の七の首に七の冕を戴けり』（默示錄十二章三節）。此の大異象は同じく默示錄十二章の第一節に示されある大異象と同時に顯はれる。第一の異象は婦が正に男兒を生まんとするを示し、第二の異象は偉大なる赤き龍が其の男兒を呑み食はんとするを示す。此の兩種の異象は以前から「存在」してゐた、然し主イエスが『怠らずして守れ』（マタイ傳廿四章四十二節）と敎へられた警告を固く守つてゐる者に對して兩種共に同時に顯はれたのである。

偉大なる之等兩種の異象は天界に神の殿が開かれたる後になつて始めて諒解されるのであつて、エホバに全部を獻げて殿の狀態に入れられた者のみに現はし示されし特權である。神の殿が天に開かれたのは一九一八年（大正七年）であつた、其の時以後地上に在るキリストの眞の追隨者は異象を諒解した。之等の異象を諒解し得た者の爲すべき第一の責務は其の同僚のクリスチヤンの注意を此の異象に惹きつけ、然る後「聞こゆる耳」の所有者の全部に告げ

知らす事であつた。之等の異象は主の臨在と其の御國の開始と、之に敵對する組織制度の實在するを立證する處の確定的實證であつて、眞理を知らんとする者に對して最も重要なるものとなるのである、

多くの自稱クリスチヤンは之等大異象の何れをも見る事が出來なかつた。彼等はエホバが其の組織制度を有される事を悟り知る事が出來なかつた。彼等は惡魔が其の組織制度を有する事を悟り知る事能はず、其の結果としてサタンの組織制度と、サタンが使用しつゝある代理者に關して云々するは惡しき事であると考へてゐた。斯かる者は之瞭かに昏睡狀態に陷つたのであつて、神の御目的の進展に盲目となつて了つた者である。イエスは今日此の時に於て斯かる睡眠狀態のクリスチヤンの存在すべきを預言し、『見る事を得ん爲に（眞理の光の）目藥を買ひて目に塗れ』（默示錄三章十八節）と敎へて置かれた。そして彼等は之を爲さないために殿の狀態に入る事が許されなかつた。

敎會の地上的經驗の終末期に於て斯かる微溫者の存在するは確實である、何故なれば神の大預言者なるイエス・キリストがさう示して置かれたからである。我等が此處に提示する眞理は之等の微溫者を助けて彼等の眼を覺まし、主が彼等に供へ置かれたる大特權に奮起させん爲である。

主イエスが默示錄十二章中に示された第一の異象は神の組織制度を表象し、キリスト・イエスの統治開始の起點となる事は全く目覺めし獻身者の全部に瞭かに示された處である。又同時に現はれたる他の大異象は惡魔の組織制度であつて、神の組織制度の「裔」を呑み食ひて更にエホバの聖名の上に誹謗を加ふる爲に全力を傾盡するを表象してゐる。サタンがニネベの時代から既に其の組織制度を形成した事は今迄の研究に見るも明白である。神がバビロン、埃及、アツスリヤに關する記錄を聖書の中に殘し置かれた事は之即ち我等が今在る所の此の末の日に於て、其の民に光を與へて彼等を援助せんとの目的にあつたのである、(ロマ書十五章四節。コリント前書十章十一節)。此の故に以上示した三世界强國に關する記錄の眞意義を諒解する豫定の時が到來したのである。之等の記錄は單に古代の歷史に過ぎずして我等に無關係であるなどゝは絕對に云ふ事が出來ない。主が今日に於てシオンを築かれたる後に始めて此の異象が人々に顯はし示されたる此の事實は、即ち今神が其の民をして之等古代歷史の記錄を精細に研究せしめ、其の意義を學び知らしめられる時である事を立證す。神の聖書中にバビロン、埃及、アツスリヤに關する記錄が詳かに特記されあるは、これ即ち研究者をして「大なる赤き龍」の異象が現はれた時に於て惡魔の組織制度の暴虐奸惡なるを悟らしむるが爲である。

惡魔は今此處に示されある事柄を誤解せしむるべく最も强き努力を爲す、何故なれば此の研究記事は惡魔と其の惡しき道を容捨なく曝露するからである。故に思慮ある各人は此の點に特に警戒せよ。サタンの執る方法は今日に於ても依然として益々欺瞞的である。彼は人を欺く者であり、義しきを行はんとする者を誹謗する者であり、神と全ての正義に敵對する者であり、エホバの聖名に總ての光榮を歸せんと願ふ者を皆呑み喰はんとする者である。

サタンは此の記事を以て地上の諸國政府に對する民衆の叛逆を助長するものであると多くの人々をして誤解せしむる爲に努力するであらう。斯かる事は本記事の目的では絕對にない。民衆は叛逆や內亂、革命によつて何事をも爲し得ない。民衆は今其の手足を縛られて全く無能力である。彼等は今惡魔と其の組織制度の全き奴隸である。民衆には自力によつて自由を得るの道が絕え盡きた。イスラエルの民が埃及の國に奴隸であつた如く、全地の民衆は今惡魔の組織制度の下に完全なる奴隸である。然し神は其の聖書の中に明示し給ふ御自身の方法を以て彼等を解放せんとされるのである。

我等が今、惡魔の組織制度の上に民衆の注意を喚起せんとするは、人々が此の惡組織制度から免かれ出でて主たる神に全く賴り縋り、人々をしてエホバの祝福に浴せしめたいからである。

人類の大衆は今惡魔の組織制度の中に監禁されてゐるに拘らず彼等は其の事實に盲目である。地上の支配者中には其の治下の民衆をして更によき狀態に生活せしめ度いとの直き願望を有してゐる者があるに相違ない。そして之等の統治者は善き政治を以て民衆を幸福にせんと努力す。然し今民衆と其の支配者が、全能の神エホバの御力以外には如何なる救濟も祝福も齎らす事が出來ないと云ふ事を悟り知らされる處の神の豫定の時が遂に到來したのである。此の故に神の組織制度を諒解すると共に、サタンの組織制度の惡しき力を諒解する事が最も重要となつたのである。

現在の支配權

現在の諸强國は「キリスト國」の名稱によつて結合す、何故なれば彼等が所謂「キリスト教國」であると云ふからである。神エホバとキリストを崇拜すると自稱してゐる諸國以外の國々は偶像を崇拜するとの理由を以て「異邦人」若しくは「異教國」と呼ばれてゐる。今神の組織制度とサタンの組織制度との二大組織制度のみが實在す。然らば全地の諸國は此の何れの組織制度に屬してゐるのであらうか。全ての心直き人々は此の問題を正當に諒解せん事を願ふ筈である。何故なれば之は全人類の福利に最も重大なる關係を有してゐるからである。眞理の前に自ら耳目を閉ぢてゐる者は決して福利を得る事は出來ぬ。事實を公平と正直に判斷し

て後に其の問題に對する解決を眞理に基いて得る事が最も必要である。

所謂「キリスト國」に屬する諸國は彼等自身を以てクリスチヤンと呼ぶ。果して然るか。一個のクリスチヤンたる者はキリスト・イエスの眞の追隨者にして神エホバの實在を認め、之に奉仕し、崇拜を捧げ、其の聖言に服從する者でなければならぬ。其の者は神の言を眞理として受け容れる、何故なれば大預言者イエス・キリストが神の言は眞理であると宣言されたからである、(ヨハネ傳十七章十七節)。今日「キリスト國」と自稱する諸國の宗教的指導者の多數は聖書の眞理を否定し、イエスの血が人類を罪と死とより贖ひ出すの價となつた事を否定す。眞のキリスト教の基礎はキリスト・イエスの贖價の大犧牲である。聖書は示して此の外に救ひの途は絶無であると敎ふ、(使徒行傳四章十二節)。現代的牧師は人間が最初完全に創造されたる事實を否認し、人間が罪の爲に墮落せる事と、イエスの犧牲が人間の爲に贖價を供へた事を否定しつゝ尙ほ彼等は己がクリスチヤンであつて、キリスト教の指導者であると稱するのである。

神の組織制度に二種の指導者がある筈はない、何故なれば神は「混亂の神」でないからである、(コリント前書十四章卅三節)。所謂「キリスト國」には二種以上の指導者即ち現代派と云ひ、根本派と呼び、其の他種々の名稱の人々があつて各々勝手な事を敎へてゐる。根本派に屬

する指導者たちは何れも皆人間は不滅性を遺傳してゐて決して死する者に非ず、其處に死と呼ぶ終結が來るにしても靈魂は幸福なる狀態か、又は苦惱苛責の狀態かに於て永遠に生存すると敎ふ。斯かる敎はサタンの嘘言の上に築き上げられある僞敎理であつて、イエスはサタンを以て嘘言の父即ち元祖であると宣告されてゐる、(創世記三章四節。ヨハネ傳八章四十四節)。根本派の指導者たちの全部はイエスの血が全人類の各自に生命の機會を與ふる事を否定し、神が地上的生命に回復さるゝの好機會を全人類に與へられる事を否認してゐる。

「キリスト國」が信奉すると云ふイエス・キリストは、父なる神エホバの律法なる『汝殺すこと勿れ』を敎へて眞のクリスチャンに對する誠命とされた。イエスは更に敎へて己が兄弟を憎む者は殺人者であると示された。世界大戰に際して現代派と根本派とを問はず殆ど全部の敎職者は民衆の敵愾心を煽動し、互ひに殺し合へと奬勵した。世界大戰には兩者側があつて「キリスト國」の敎職者と彼等の「群の長たち」は敵味方に殆ど二等分されてゐたが、然かも彼等は敵側の人間を殺害せよと奬勵煽動したのである。斯かる精神が神の組織制度に屬せざるは當然である。

イエスは此の世の政治に關與するを峻拒された。イエスは此の世の中に在つたとは云へ此の世には決して屬してゐられなかつた。イエスは世に勝ちて、そして其の追隨者たちもイエ

スと同じく世に勝たなければならぬと敎示された、(ヨハネ傳十六章卅三節。八章廿三節。十八章卅六、卅八節)。何故にイエスは斯く敎示されたかと言ふと此の世の神即ち目に見えざる支配者がサタンであるからである、(ヨハネ傳十二章卅一節。十四章卅節)。イエスの使徒達即ち神の代表者たる權威を與へられたる敎師はイエスの追隨者たちに告げて、彼等は己自身を此の世より離反せしめ、神の立て給ふ王キリストと其の義の御國に關する眞理を宣明する事に全部を獻げなければならぬと敎へた、(コリント後書六章十七、十八節。ヤコブ書一章廿七節)。

使徒は更に進んで敎へ示し、自らクリスチャンなりと任ずる者が此の世の友となる事は之即ち姦淫を行ふ者となるのであつて、神の敵であると告げた、(ヤコブ書四章四節。ヨハネ第一書二章十五節)。カトリックとプロテスタント新敎の名宗各派を問はず其の敎職者の全部は此の世の政治に關與し、「キリスト國」と稱する地上諸國の政權を掌握せんと努力してゐる。彼等は皆世界大戰の助長に貢獻した。斯かる道は神の組織制度に絶對逆行するものである。

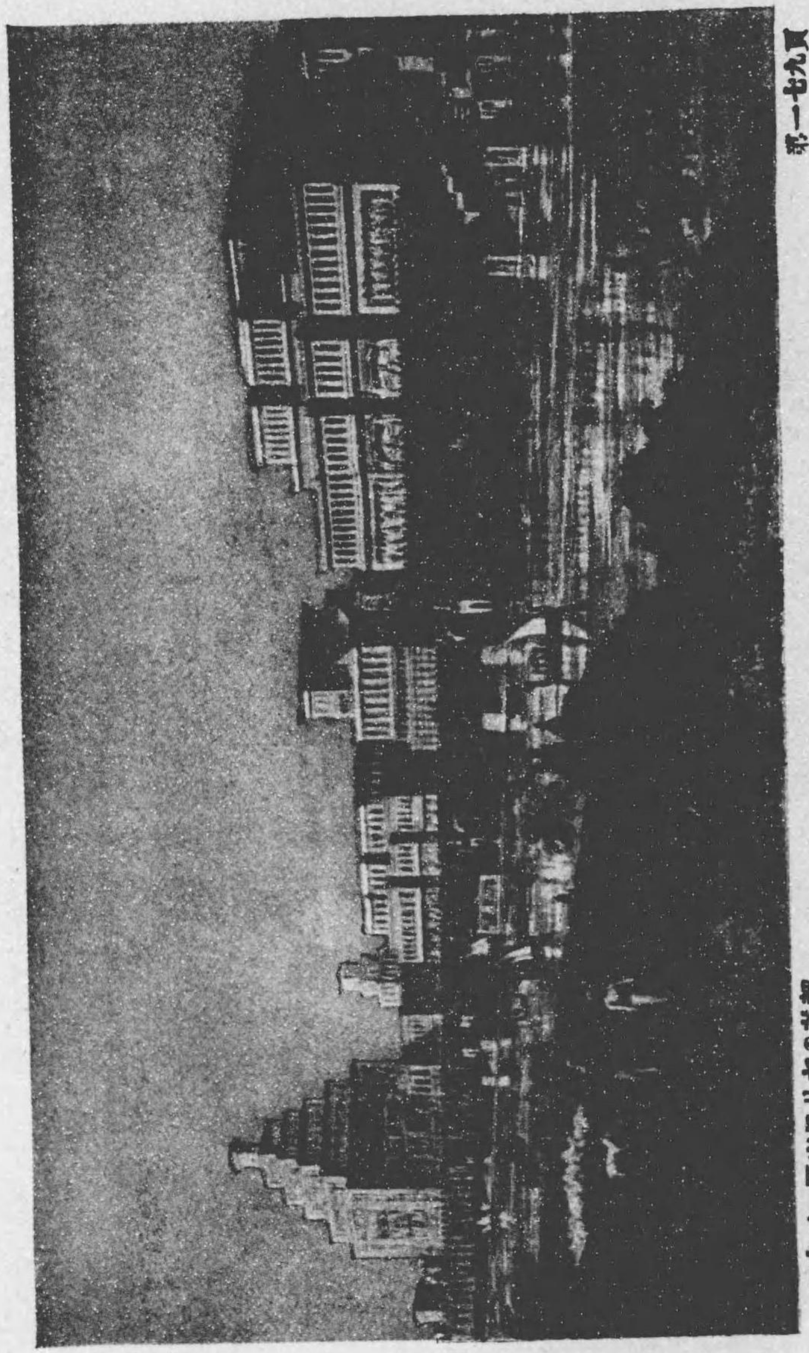
然し或る人は云はん、「クリスチャンの敎會はイエスと其の使徒等によつて組織され、現在の敎職者は敎會を管理するの權を與へられてゐるのではないか」と。イエスと其の使徒たちは地上に於けるキリストの敎會を組織し、爾後暫くの或る期間はクリスチャンと呼ばれた人々の一團がイエスの敎に服從してゐた。其の時の敎會は純潔であつて、使徒は之をキリスト

に婚約したる潔き處女であると形容した、(コリント後書十一章二節)。然し後に至つて此の組織制度はサタンの組織制度中に捲き込まれて了つた。

イスラエルの民がエホバ神の聖名を奉じ、其の聖旨を爲すを誓約した事は事實であつた。彼等は未來に於ける神の民即ちクリスチヤンを表象する預言的民族であつた。イスラエルの民の不信背逆の爲に神は彼等の上から恩惠を除き去り給ひ、其の結果として彼等はバビロンに囚はれて了つた。其の時彼等の上に起きた事は皆預言であつて「クリスチヤンの教會」と稱する團體を支配する者等の上に發生成就する處の前影であつた。

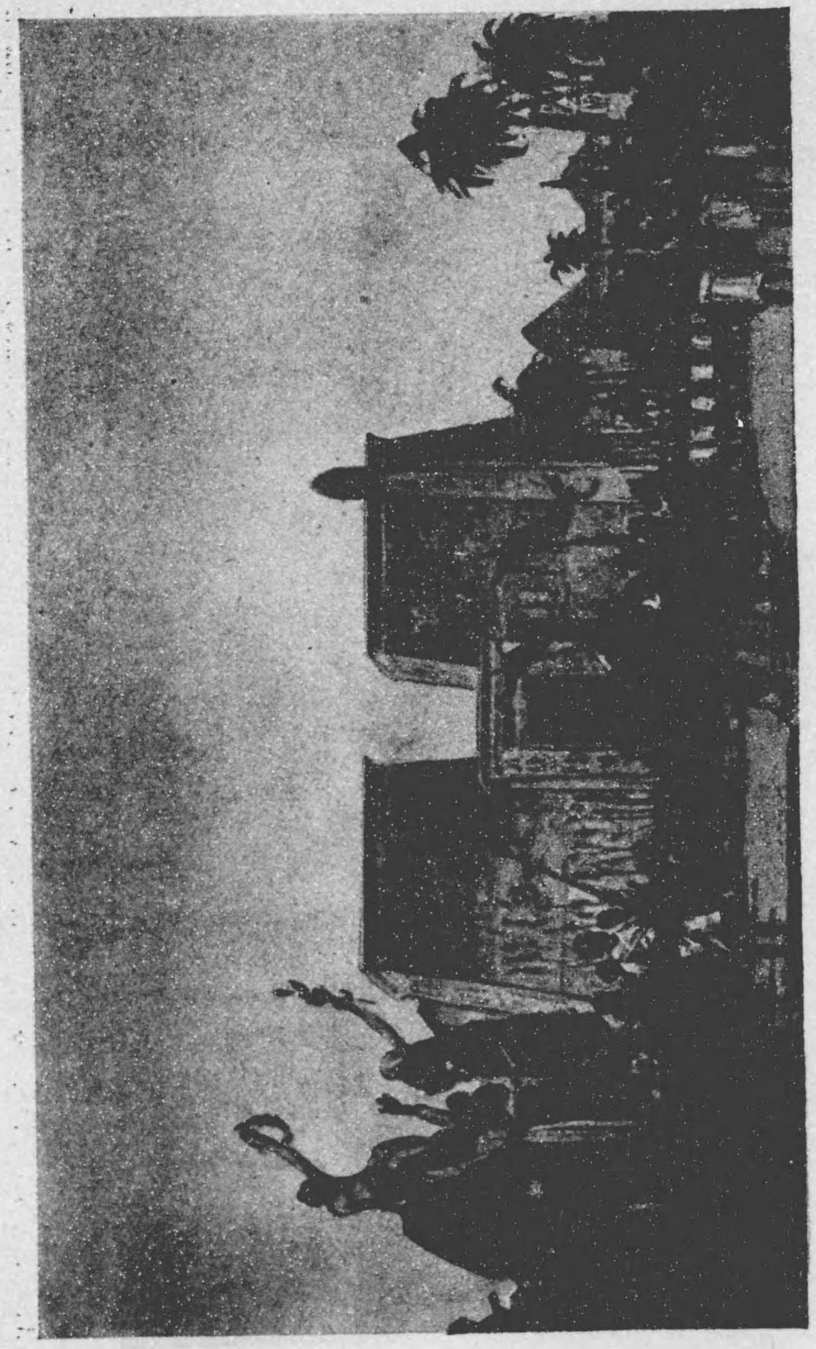
千數百年以前、「クリスチヤンの宗教」と稱されたる組織制度は眞の宗教を拋棄して了つた、何故なれば其の指導者と彼等の群の長たちが墮落してバビロン即ちサタンの組織制度の中に囚はれて捲き込まれて了つたからである。其の理由は神とキリストに對する彼等の不信背逆であつた。故にサタンは此の組織制度を腐敗せしめて之を支配するに至つたのである。サタンは人々の眼を盲まして彼等を神の聖書の眞理の研究より離れさした。其の結果此の組織制度はキリストの名を徒らに稱ふるものとなつて、其の檻の中には少數の正直なる善人と多數の僞善者を抱括するに至つたのである。

他の人は又云ふ、「然しキリスト國の宗教がキリストと神の名を公然と稱へ、神に祈禱をな



第一七九頁

サタンの組織制度の政治的分子を表象するニヨベーアッスリヤの首都



サタンの組織制度の武力と商業的分子とを表象す

してゐる以上彼等は今尚ほ眞のキリストの宗教を信奉してゐるのではないか」と。否、サタンの執る方法は常に欺瞞的である。人類初期の時代にサタンは人々を誘つて彼等をして互ひにエホバの名を以て呼び交はしめ、爾後此の方法を屢々採用して來たのである、(創世記四章廿六節)。イスラエル人は神の契約を與へ給ひし選民であつて、彼等はエホバの名によつて呼んでゐたが、彼等の不信に就て神は彼等に斯う告げられた、『この民は口を以て我に近づき口唇をもて我を敬へども其の心は我に遠ざかれり』(イザヤ書廿九章十三節)。之と共に使徒パウロは我等が今在る今日此の時の狀態に就て斯く預言す、『末の世に難の日來らん、汝この事を知れ。其の日至らば人たゞ己を愛し……神よりも快樂を愛することをせん。彼等は敬虔の貌あれども實は敬虔の德を棄つ』(テモテ後書三章一―五節)。

エノスの時代に人々は僞善者となつて互ひにエホバの名で呼び交した、(創世記四章廿六節)。又猶太人の宗教的指導者であつたパリサイ人は自ら神の名を稱へて然かも僞善者であつた、(マタイ傳廿三章十二―卅五節)。其の如く「キリスト國」の宗教家も亦僞善者である、何故なれば彼等は神の民なりと自稱し、キリストの名を稱へて自らクリスチヤンと呼ぶと雖も其言行に於て決して神に奉仕せず、キリストに追隨しないからである。斯くの如く老ひたる「大淫婦」なるバビロンはキリスト教制度と呼ぶ組織體を腐敗墮落さして之を完全に呑み食つて了

つたのである。サタンは其の嘘偽と欺瞞とを用ひて人々をエホバより離反さして後に此の事に成功したのである。

主が其の殿に來られる以前に於ては多數の聖書研究者はカトリック教會がバビロンであつて、「淫婦らの母」であると教へられてそれを信じてゐた。之は誤りであつた。バビロンとはサタンの大組織制度であつて總ての惡しき組織制度を產み出す「母」である。バビロンが「大淫婦」であり「淫婦等の母」である以上、之は他の諸々の組織制度をして同じく姦淫を行はしむるものである。初期の教會が神より離れ去つて惡魔に捕へられた時に、サタンの組織制度の一部となつたが此の教會制度を捕へたサタンの大組織制度は父なるサタンの名と共に「母」の名を以て呼ばれたのである。カトリック教會は惡魔の組織制度の一部となり、亦プロテスタント新教各派の教會制度も同樣の徑路を執つてサタンの組織制度と提携合同した時に彼等は姦淫の罪を犯したのである。カトリックと新教各派の指導者の全部は其の眼を盲まされ、サタンの嘘偽と欺瞞とによつて墮落させられたのである。カトリックとプロテスタント各派の諸教會制度中には今多くの正直にして眞摯なる人々があるが、彼等はキリストの光の道を歩む事をしない爲にサタンは彼等を眞理から盲目にしてゐるのである。彼等の多數は今の狀態から救ひ出されん事を叫び求む、何故なれば彼等はバビロン即ち惡魔の組織制度の中の

「俘囚者」であるからである。而して神は其の豫定された時に於て必ず彼等を救ひ出さんとの御約束を與へてゐられる。

「キリスト國」の教職者たちは其の教壇に政治家や資本家を引つ張つて來て人々を教へてゐる。斯かる教職者が神とイエス・キリストを信ぜず、又其の眞理に絕對無知無識なるは一般周知の事實である。同時に彼等教職者は又キリストの血を否認する猶太教のラビたちをも其の教壇に歡迎するのみならず、彼等教職者は佛教、ヒンヅー教其の他總らゆる宗教の教師たちをその教壇の上に歡迎し、人々に教へて如何なる宗教でもよいから信じさへすれば必ず救はれると僞り教へるのである。彼等が神の備へ給ふ唯一の救の道に背反逆行して放埒に歩み出した結果は即ちキリスト教と呼ぶものを今日の亂雜極まるものと化したのである。

バビロン即ち惡魔の組織制度は常に惡魔の宗教を用ひて働いて來たのであつて、之を以て政治家や此の世の支配者を誘つて宗教制度の檻の中に引き摺り込み、斯くして之等の支配者に不聖なるバビロン制度と姦淫の罪を犯さすのである、(默示錄十八章九節)。此のバビロンと呼ばれたる惡魔の組織制度は彼女の不正なる兩腕を擴げて大資本家や暴利商人を其の檻の中に引き込み、其の不義の美味を喫せしむるのである。そして之等の有力者は即ち其の宗教制度内に於ける「群の長たち」とされた、(默示錄十八章三節。エレミヤ記廿五章卅四節)。　此の故